明治四十年十二月十九日第三種郵便物認可
明治四十一年十二月一日發行（每月一回一日發行）

女子文壇

第四年第十八號



愛讀諸孃の精讀を煩す

到る處に吹聽せらるべき

◀日本一の女學雜誌▶

女子文壇の大發展

▲來る新年第一日を以て創刊五年第壹號を發行する女子文壇は紙面大革新と大擴張を實行す（創刊は去る卅八年一月なり）

▲紙數は大いに增加さるべし內容は愈よ充實さるべし、讀むべき分量と書くべき範圍は益々多かるべし

▲投稿の自由と選評の嚴正と懸賞の確實とは世擧つて女子文壇を第一位に推す

▲若き婦人の唯一の機關として又文學と家庭の調和者として雜誌界無二の特色を存す

▲世の父兄たるもの子女の品位を高め、趣味を養はしめんとするには女子文壇を讀ましむるを以て最も好策となすべし

▲女子文壇は學校以外に於ける善き感化、美しき感化、清き感化を與へんとに主力を注ぐ

▲女子文壇が中心とする文學的記事の如きも新年號以後の分は更に多方面に渉り、常に時流に擢んづるの用意を以てすべし

▲內容の實、體裁の美、相俟つて大革新を行ふと共に女子文壇の**定價**は次の如く**改正**さる、其實質に比すれば矢張此の種雜誌中の最も廉なるものなり（論より證據現品に就て試讀あれ）

女子文壇 改正定價

定期發刊（毎月一日發行）

○一冊（一回分）定價金拾五錢…郵稅壹錢五厘 合計金拾六錢五厘
○三冊（三月分）同前金四拾三錢五厘…同四錢五厘 合計金四拾八錢
○六冊（半年分）同前金八拾四錢…同九錢 合計金九拾三錢
○十二冊（壹年分）同前金壹圓五拾六錢…同拾八錢 合計金壹圓七拾四錢

臨時增刊（二、五、八、十一月）

○一冊（一回分）定價金貳拾錢…郵稅一錢五厘 合計金貳拾一錢五厘
○二冊（半年分）同前金三拾八錢…同三錢 合計金四拾壹錢
○四冊（壹年分）同前金七拾貳錢…同六錢 合計金七拾八錢

《郵券代用壹割增》

振替口座第壹七貳九番

發行所 東京市京橋區大鋸町十十一番地 女子文壇社 賣捌 全國各地書店

女子文壇第四年　十二月一日發行

每號　皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ

本欄

▲口繪▼





第十八號目次

レックス



英國製實用浮石鹼

英國ボヅソン、エンド シンプソン會社特製

千九百〇八年八月最新輸入

◎本品は化粧用浮石鹼にして香氣高く價格も低廉なれば實用に適す

◎既に英國に於ては上流社會に理想的浮石鹼として好評を博すに至れり

一個にして石鹼箱大形小形共兼用す

東洋輸入元　東京市ヱス、シー

關西特約店　江ノ部商店

煖爐



大江原色版部製版

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

五千萬之少年少女諸君

日本一の面白い雜誌



少年之友



十二月一日發行　三卷十二號

△美麗口繪▽

●大探險家ヘチン博士風雲と闘ふ……服部㵎夫

●少年繪手本……二齋伯鮮

△ねづみ△節季候△子狗△厄拂

△主なる記事▽

●妖怪宮……白雨

（大好評の中に完結を告ぐ）

○珍奇の動物……はくら

●立志小說 涙の郷（續）……秋畝

○ヘチン博士來る……記者

●僕は小獵夫である……頓夫

○十二月の日記……記者

其外 懸賞少年文壇

（記事山の如し）

定價金五錢　郵稅五厘

◉來る四十二年 第四卷第一號は如何に樂き？

四十二年一月一日　四卷一號豫告

△美麗口繪▼

◎石版密畫○三色版○寫眞銅版……澤山入

△主なる記事▼

●黃金の箱（お伽噺）……神泉

○大盜賊の追跡（冒險）……白雨

●動物新談（博物）……理科大學 ケーデー生

○さよさんへ……篠井清子

●試筆……西村醉夢

○少年小說 春興……横川さと子

●戰闘中止……虎髯少尉

○繪ばなし……よした

●シーザーの最後……文科大學 小林樂天

○動物の病氣は如何にして治す療べきか……家畜病院長

●成功美談……田中秋畝

改正價　一冊八錢五厘　●六冊…四十八錢　●十二冊…九十錢

發行所　東京神田旅籠町一丁目　振替口座一九五五　文光堂

賣捌　東京堂　東海堂　北隆館　良明堂

産科婦人科専門醫學士 北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病 自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて。素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて、生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◉著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。(婦人病者の心得)と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり◉病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ。

目次

婦人病の總論◉子宮病血の道(ヒステリー)の原因病理及び自宅療法◉神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◉しらちながちの病理及其根治法◉月經時の手當月經諸病の療法◉妊娠の原理、受胎すべき場合、妊婦の攝生、つわりの養生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一(電話新橋三千六百一) 笹岡省三

おしれもくせも
もはへうけあい

女髪師

故務し升御問合せは往復はがきにて御申込あれ

妾の手がけた方で此病にて諸種の買薬して癒らぬ人も悉く治りし故夫れで皆懐の進めにより御

東京麴町區飯田町四ノ十六 安部歌子

洋畫講義錄

執筆 三宅克己先生 岡田三郎助先生 大下藤次郎先生 中澤弘光先生 伯外大家十數名

洋畫講義錄は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり、毎月一回發行、一年卒業、會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

繪畫講習錄

執筆 川端玉章先生 荒木寛畝先生 寺崎廣業先生 梶田半古先生 伯外大家十數名

繪畫講習錄は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽らにして上達せしむ毎號美麗なる繪畫數葉を挿入す、毎月二回發行一年卒業會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

新學期開始

東京市麻布飯倉四丁目 大日本繪畫講習會

◉色白くなる秘法◉

いか程色黒き御方にても色白くなる奇法を郵劵二錢封入申込の方に御知らせ申上升

東京小石川柳町 森 義郎



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

本年最終の雜誌界を飾る本誌の大盛裝

記事親切

婦人世界

文章平易

十二月號 一日發行 每月一回 三巻 十四號 一冊拾五錢 郵税一錢 半ヶ年分八十錢 郵税共 一ヶ年分一圓五十錢

◎結婚式は如何に改良すべきか……村井弦齋

◎子供を殘して離緣された所感

◎無邪氣な子供の言葉　長野女學校長 波多市松

◎本野大使夫人結婚當時珍談

◎新年重詰料理　弦齋夫人

◎婦人服の風に捲れるのを防ぐには如何にするか……女子美術學校教授 谷田部順子

◎私は斯くの如く苦心して我が子を養育しつゝあり　陸軍中佐小山秋作氏夫人 小山みつゑ子

◎精神病の婦人を看護して全快させたる實驗　愛生看護婦會長 金子貞子

◎私の長男は實子でありながら何故に母に親しまぬか……津山瀧子

◎最も感心した應接の上手な婦人　ドクトル川瀬元九郎氏夫人 川瀬富美子

◎子供が出來てから良人の性質は一變せり……宮西たけ子

◎跡見花蹊女史と武村耕靄女史……川村文芽

◎岩田帶についての注意　醫學博士 榊順次郎

◎齒の病氣はかうせば癒る……志村[illegible]

◎小説 人妻

◎[illegible]

◎我が子の嫁に彼女を選びたるは何故か……鳩山春子

東京京橋區南鍋町十二 實業之日本社（電話新橋八四七番）（振替口座三三二六番） 賣捌所 全國各書店

(三〇)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

(乙ゟ六)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

文壇の光

附錄　名家新話

▲目次▼

○短篇小說○美文○論文○新體詩○日記文○和歌○お伽噺○書簡文○俳句○短文○スケッチ

○英詩と愛戀…………野口米二郎
○客前錄…………大町文學士
○作中の意味…………小栗風葉
○隨筆文學…………島村抱月
○女の俳句…………內藤鳴雪
○手紙の文章…………横瀨夜雨
○ちやるめらの響…………河井酔茗

全一冊　紙數二百五十頁
入賞作家肖像寫眞四頁及泰西名畫原色美麗口畫二枚

▲定價金貳拾錢▲　郵稅壹錢五厘

高評　▼女子作文の良材

此二書は文學一通りの者は揃つて居ます文章を作るには此上なき良參考書です

懸賞傑作　文壇の花

▲目次▼

○小說○お伽噺○美文○論文○日記文○書簡文○新體詩○短文○和歌○俳句○圖書

附錄

○官吏の死…………瀨沼夏葉
○笛…………田山花袋
○木の花…………與謝野晶子
○文藝の材料と其扱方…………片上天弦
○蛤（五句）…………高濱虛子
○暖爐…………三谷蘆華
○家出…………水野葉舟
○暮れゆく光…………三木露風
○卒業して故郷に歸れる
○敎へ子におくる文…………武島文學士
○いさ子の日記…………中村文學士
○川の少女…………巖谷小波
○朧夜…………佐々木信綱

全壹冊　二百五十頁
入賞作家▲肖像▲寫眞及び原色密刷
▲睡蓮▲石版彩色密刷▲花苑▲皆美麗の口繪澤山

▲定價▲金貳拾錢▲　郵稅壹錢五厘

東京京橋大鋸町十十一番地　女子文壇社出版　（振替口座第壹七貳九番）

誌友面影（十二）

（續々お寫眞の寄贈を望む・お返し致しますから）



（神戸）島小松子　安達絹子

（奈良）福井秀子　[illegible]子

（長野）樋口美代子、中村つぎ子

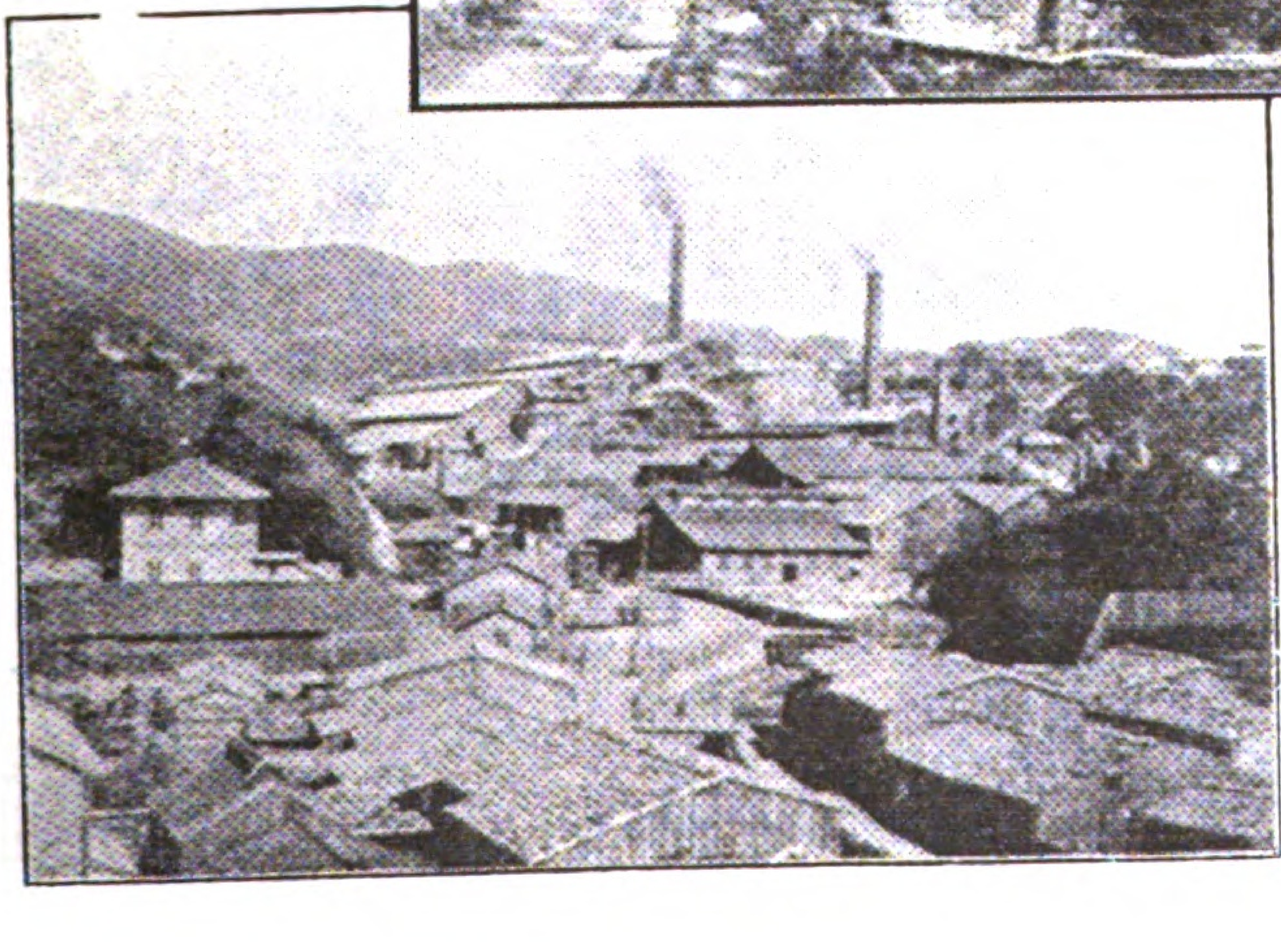
長崎港ドック



（上野春子寄）

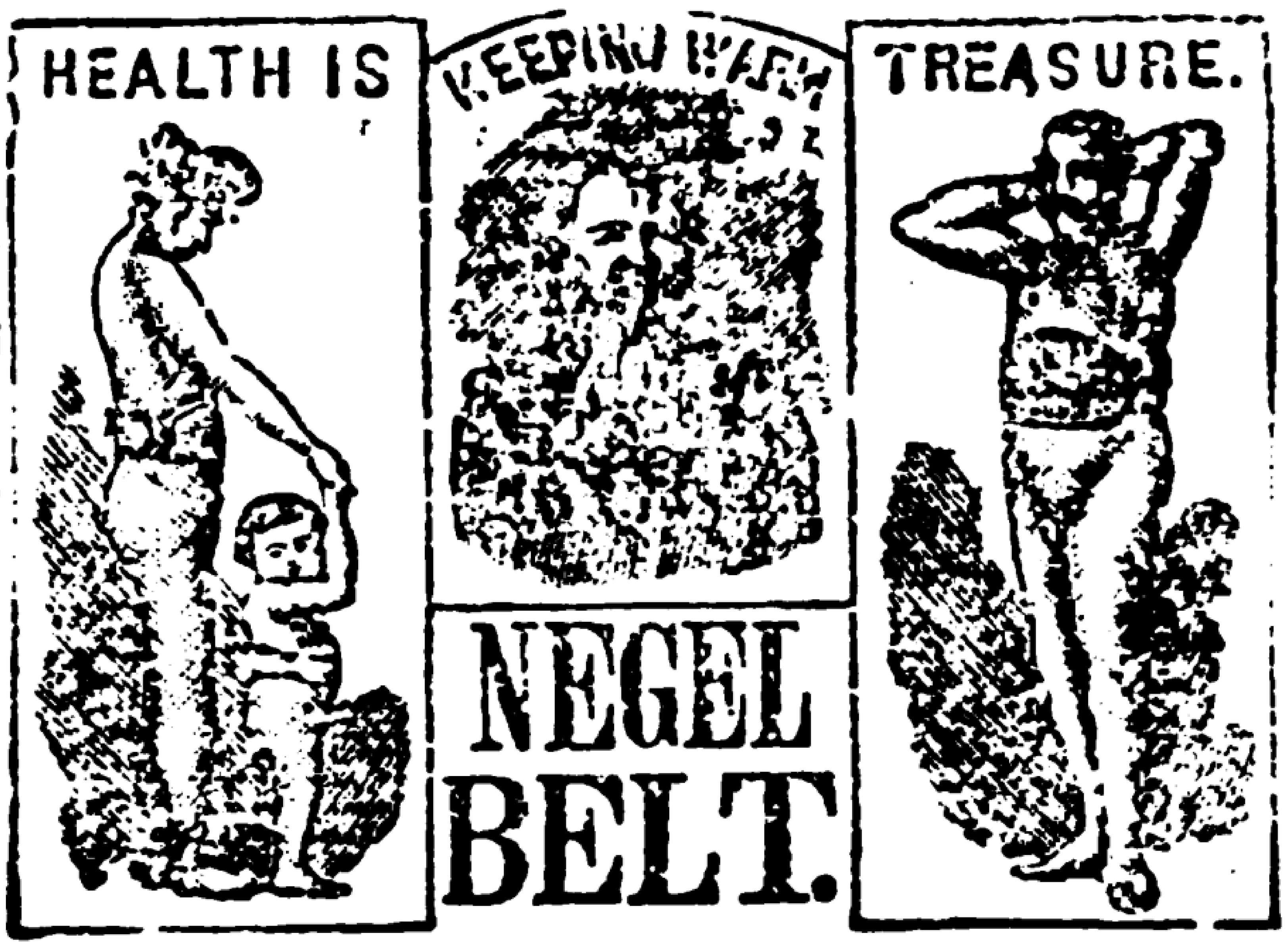


佐渡相川鑛山（一）



同　鑛山（二）

（境野茂登子寄）



This belt promotes thecirulation, and assimilation for cure of the ailments due to the sluggishness of

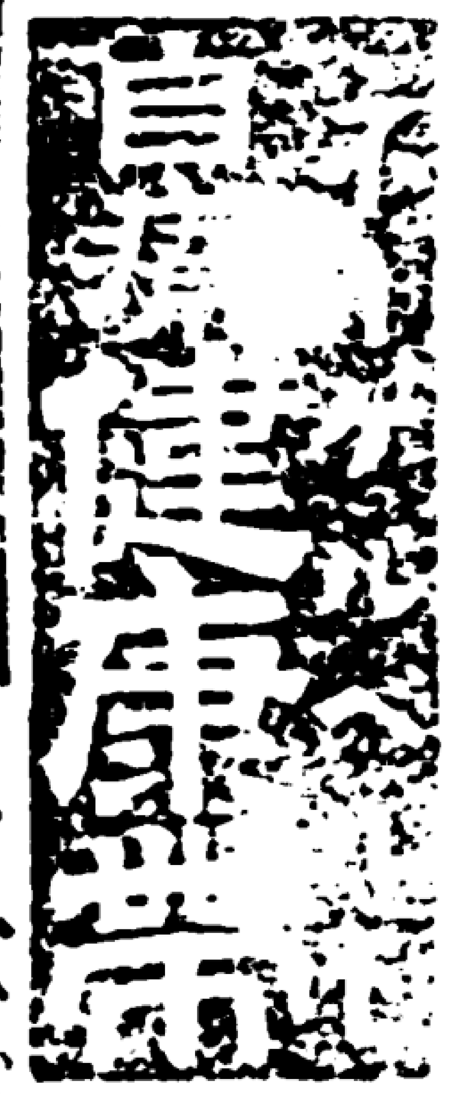
新發明

（エチルギー療法）

獨逸國大學教授チーゲル博士發明

木村病院長　木村ドクトル有効證明

本品ハ獨逸大學教授チーゲル大博士ガ藥化學ト理學ノ研究ニヨリ發明セラレタル物其效力ノ卓絕ナルハ世界醫學者ノ賞讃スル所



人身ニ尤モ必要ナル內部ノエチルギーノ作用ニヨリ左記諸病ヲ治療ス病魔ニ惱ム人ハ試ヨ

斷筋僂痳質斯　子宮病血ノ道胃弱胃腸病　神經衰弱貧血胸痛冷症疝痛逆上眩暈不姙症腦病腰痛膀胱炎痳病消化不良月經不順便秘痳小便等

殊ニ本品ハ溫健ナル熱ヲ發シ衞生具トシテ慢性病老人小兒姙婦等ニ用ユル時ハ特種ノ奏效アリ引風痳冷ヲ起サズ

防寒溫腰器

（定價）

丸形　並一圓八十錢　特製二圓半

帶形　並三圓五十錢　特製五圓

說明書　進呈郵便二錢封送アレ

本品ハ今ヤ**各國醫界**ニ其ノ需用**頗多シ**

有効期各壹年以上

原品直輸入　東京京橋區中橋和泉町一番地

東洋發賣元　**小宮愛生堂**

▲代金爲替ハ京橋和泉町局　㊤振替一〇六七七番

見よ　**月經なき女子　病める婦人**

▲勿論……藥力最强度……効能峻烈……有効無害……

●本劑は專門博士が專理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて**帝國大學**病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の**月經**閉止月經**滯**り月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は**血塊**にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歲になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛



肥滿病新藥　（米國新輸入）

小供の折**美愛**と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〱肉太りたる爲め上圖の如く**醜婦**となる人少なしとせず本劑はバークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人●ぶと〱ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艶白となり皆て**美顏**窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音



藥價	
一劑一圓五十錢	二劑二圓九十錢
三劑四圓卅錢	四劑五圓半
送料	十錢

發賣元　東京京橋中橋和泉町　**小宮愛生堂**

振替壹〇六七七番

通俗作文全書

全部廿四册洋裝四六判
並製紙數三百頁
正價一册三十五錢
郵税一册六錢宛

記事論說或は紀行敍事等の雄編大作より尺牘柴書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の狀况を見るに、百般藝術の漸々進步するに反し作文の技のみ獨り退步の觀あるは洵に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を敎ふる完全なる書籍なきもの亦其一因なりといふべし。弊館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を裨補する所あらんとす。其の目次は下に列記す。

第一編 文章組立法 大和田健樹君著
第二編 書簡文作法 同
第三編 美文作法 田山花袋君著
第四編 商業作文法 天城安政君著
第五編 支那時文軌範 靑柳篤恒君著
第六編 紀行文作法 西村醉夢君著
第七編 寫生文範 福田琴月君著
第八編 論說記事文範 河村醉茗君編著
第九編 女子消息文範 西田敬止君著
第十編 書翰文範 森田米松君著
第十一編 日記文範 大和田健樹君編
第十二編 祝賀弔祭文範 石崎篁園君著
第十三編 中等學生文範 山川直五郎君編
第十四編 明治時代文範 生田星郊君編
第十五編 言文一致文範 堀江秀雄君編
第十六編 古今名家尺牘文 大田才次郎君編
第十七編 古今名家文選 武田櫻桃君編
第十八編 新體詩作法 河井醉茗君著
第十九編 新體漢文軌範 久保天隨君編

●叙論 漢文の研究講習外六項●第一論說 南語序論(中井履軒)外十八項●第貳序引題跋 名山圖叙(佐藤一齋)外廿九項●第三記傳 紀非貿與一事(柴野栗山)外十九項●第四紀遊 竣蘇紀行(平澤旭山)外廿項●第五書牘 上茶山先生書(賴山陽)外五項●第六祭弔 祭石川丈山文(柴野栗山)外五項●第七小品雜著 示塾生(柴野栗山)外七項

販賣用電話 本局二六二〇番
東京本町 博文館
振替口座番號 第二百四十番

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

館友募集

破天荒の新事業

讀書界の一大機關

共立 大日本國民圖書館

▲規則書は郵券封入申込あれ▼

▲東京澁谷道玄阪上五七〇▼

●何人も本館々友に加入せば本館より幾多の新刊文學書、新刊小說等を無料にて借覽し得るものとす。地方遠隔の地にある館友には郵便にて書籍を送り貸與すべし

●かゝる多大の利益を享有する本館々友は甚僅少なる加入金と一ヶ月六錢の館費を負擔すれば可なり。

●一ヶ月新刊書を見ざる者は時勢に後れて最早共に談ずるに足らず。然も每月幾多の新刊書を購讀せんは何人も經濟の許さざる所なり。

●されば來れ、本館は諸君の希望を滿さしむる最良機關なり。男女貴賤老少を問はず館友に加入せざる者は愚の極也。

●先づ規則書を一讀して本館組織の如何に巧妙なるかを見よ。

大安賣の空前

諸大家選評 女子懸賞文集 第二（四六判五百頁）▲定價卅五錢 特價金貳拾錢 郵稅六錢

國學院學士小森松風先生著 美文作法（菊判二百卅頁）▲定價四拾錢 特價金貳拾錢 郵稅四錢

國學院學士小森松風先生著 言文一致文範（菊判二百卅頁）▲定價四拾錢 特價金貳拾錢 郵稅四錢

報知新聞記者中村木公君著 實地精査 女子遊學便覽（校長肖像入）▲定價參拾錢 特價金拾五錢 郵稅四錢

右の外『玉蟲』及『朝ばれ』は既に賣切れ絕版仕候

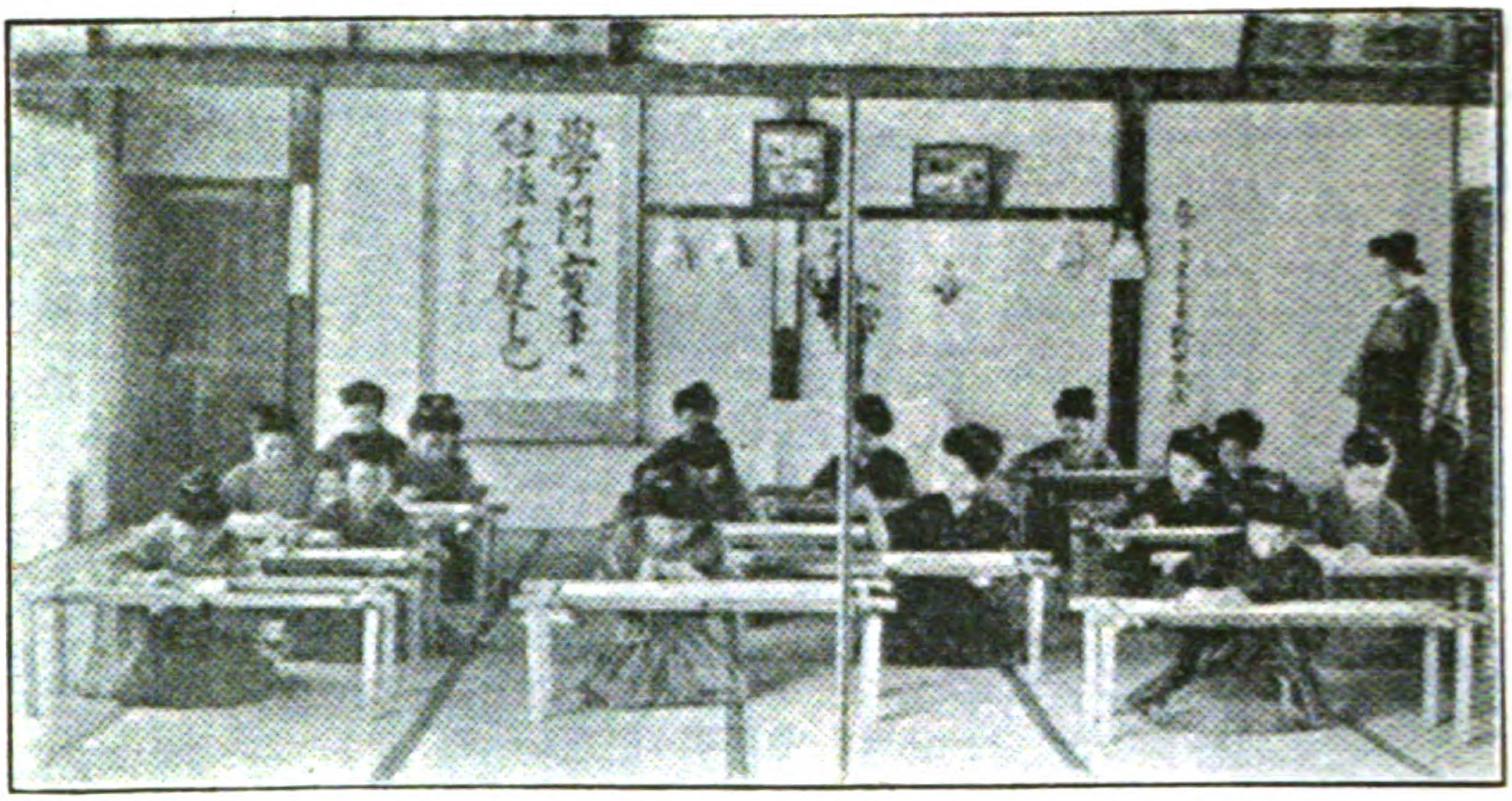
東京大町館 女子文壇社出版 全國賣捌書店

（振替口座第壹七二九番）

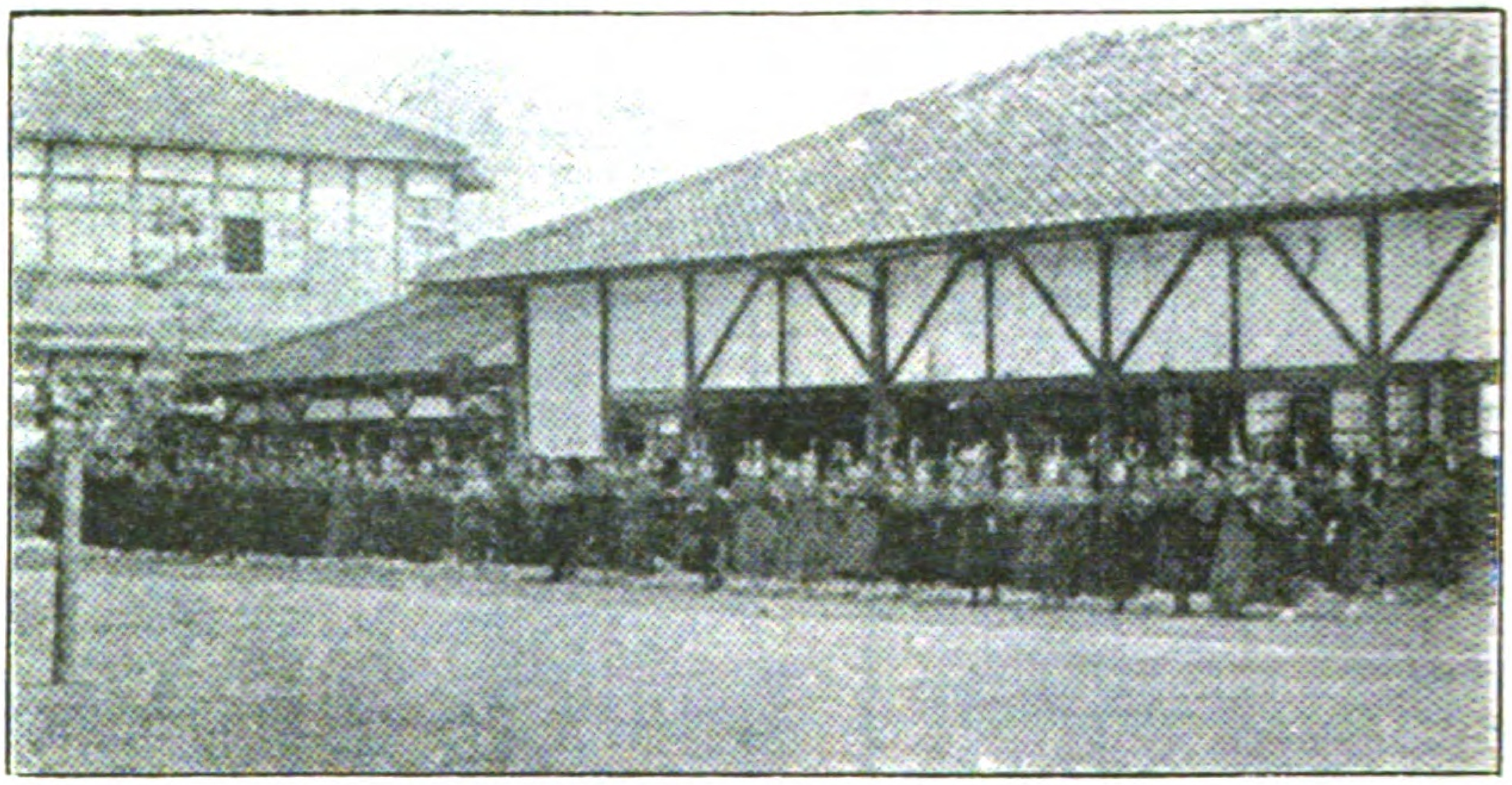


改良醤油
今般御愛用諸彦の御注意に基き更に醸造法の上に一大改良を加へたる結果製品の品質一層醇良となれり幸に御試用の榮を賜へ
醸造元　日本醤油醸造株式會社

大阪の女學校



市立育英手藝女學校刺繡教授

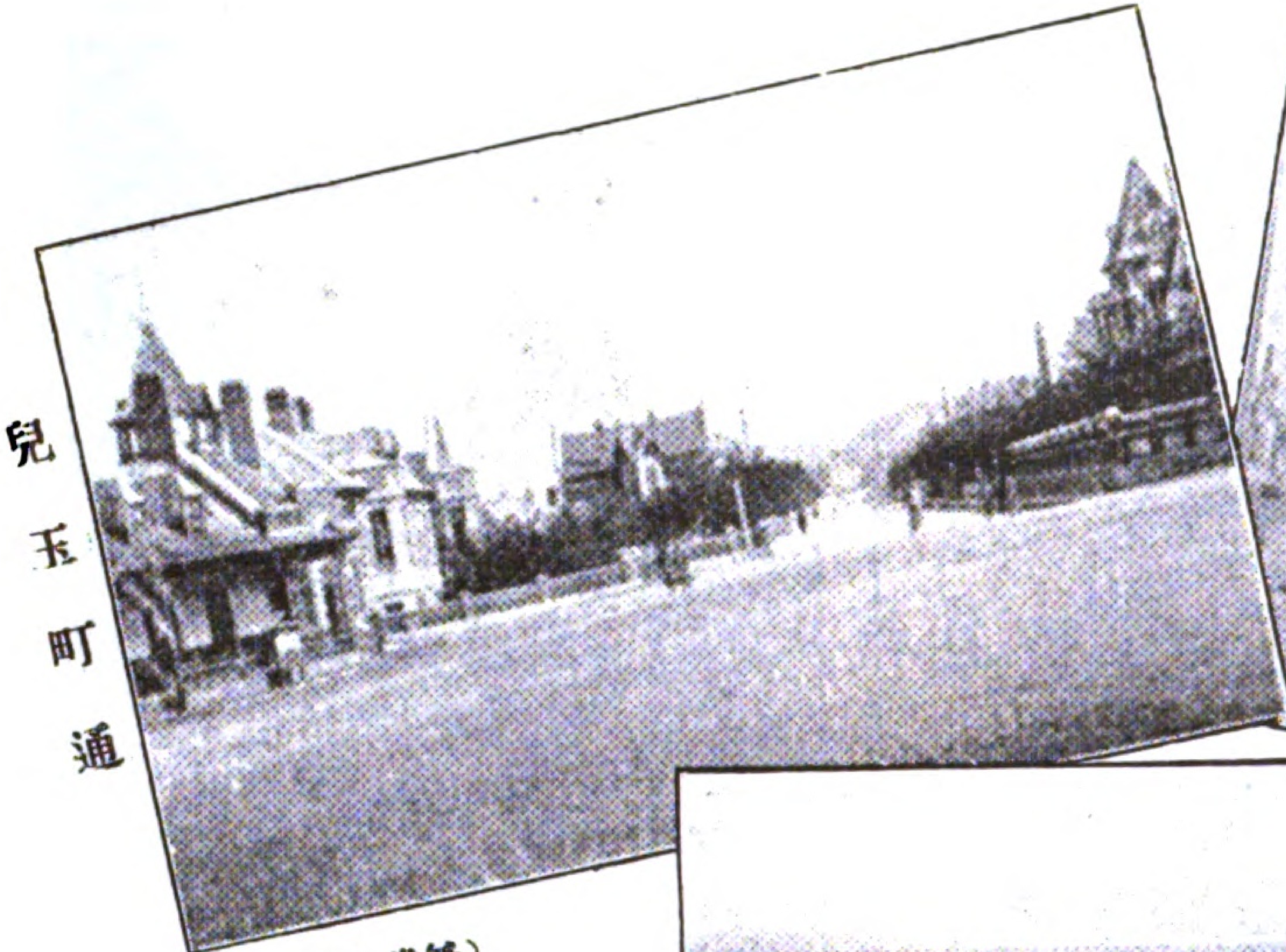


南區育英第三高等小學校



市立育英手藝女學校造花教授

（米田號寫眞部撮影）



兒玉町通

（兼常久子寄）



大山町通

（高山米子寄）



全市街

（兼常久子寄）

清國大連市街



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

茶之湯道具

（特別一割引）

●弊店儀多年各位之御愛顧を蒙り日に月に繁榮に趣き候處尙一層業務之擴張を計り平素之顧客之外更に新しき多數の顧客を得んが爲め當分之內茶道具一式特に（一割引）を以て販賣可仕候

●丹橋棚及び茶道具附
（金貳圓より）

●其他今回製造元に特約をなし澤山荷着仕候間此際陸續御用命之程奉願上候

東京日本橋區藥研堀町二十番地

諸國銘茶
茶の湯御道具 商 三吉園

（特別一割引）



東京買物便法
（とうけうかいものべんぽふ）

今般本社にては愛讀諸嬢の御便利を計り東京市內に於て發賣する書籍、雑誌は特別に定價の壹割引其他文房具、化粧品、西洋小間物、玩具等有らゆる百般の物品は定價の五分引其外は手數料申受けず誠實に御用達致しますから多少に拘らず遠慮なく御申込下さい

（申込心得書は十月號に載せてあります）

東京市京橋區大鋸町
女子文壇社
買物用達部
（振替口座第壹七貳九番）

此好機愈よ本月廿五日に迫れり

女子文壇臨時增刊

四十二年第一增刊

新美文

十二月二十五日發表

物に驚き易く事に感じ易き青春の人は今や讀むべく語るべく書くべきことの多きに苦しめり、之が大勢の赴く處を知らしむるものは其等若き人の手に成りし文集に如くはなし、殊に現代の隨筆とも稱すべき美文に至りては千變萬化、諸君の思想の自由なるが如く作ることも自由なり、今我社「女子文壇」の臨時增刊として『新美文』を出版し、紙數の大半を此に宛て、併せて一般の文藝作品を募り、例の如き大冊子を編纂して讀書界の空氣を清新ならしめんとす、冀くは競ふて投稿せよ

懸賞贈品

○第壹種（凡て正金）
壹等賞 金貳拾圓
貳等賞 金拾圓
自三等賞至五等賞 各金五圓
自六等賞至十等賞 各金貳圓

○第二種（凡て呉服物）
壹等賞 價格七圓
貳等賞 價格四圓
三等賞 同貳圓

○第三種（凡て呉服物）
壹等賞 價格五圓
貳等賞 同三圓
三等賞 同壹圓

○別賞（凡て物品）
自一等至十等賞 價格貳圓以内

大懸賞募集

投稿締切 十二月廿五日限

新美文募集項目

▼第壹種▲

美文（廿四字詰百行限）

感情を主としたる文
事實を主としたる文
天然を描寫したる文
家庭を書ける文
或る人を描ける文
その日〳〵の日記文
旅行して得たる紀行文
對話を主としたる文
地方的特色のある文

投稿諸君は必ず此分類に據るの要なけれども、題を考ふる便宜上假に分類したるのみ、要するに實用的のものを除いて、一般の文章は殆んど美文の系統に屬す。

▼第二種▲
○小說 總假名付一行廿四字百行限
○新體詩 總假名付二十行限
○論文 一行二十四字三十行限
○書簡文 一行二十四字三十行限

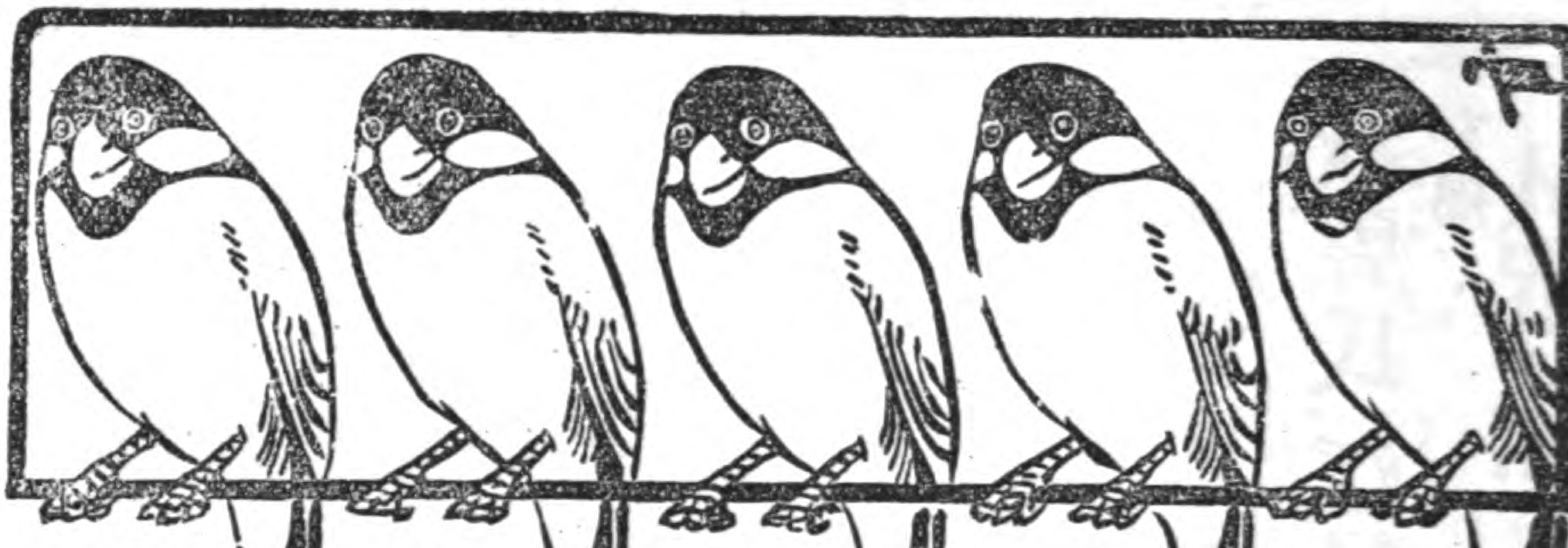
▼第三種▲
○和歌 一首限
○俳句 一句限
○短文 總假名付一行廿四字五行限

○別賞 圖畫 縱横隨意二寸五分に三寸

▲投稿心得摘要▲
○題と文體とは各自の隨意なり。
○投稿紙は半紙又は原稿紙に限る
○投稿は課題を異にする毎に必ず別の用紙に認むべし。
○投稿は句讀點を施すべし。
○圖畫は附すべからず。
○投稿の封筒は東京京橋女子文壇社編輯局宛新美文原稿の文字を傍書すべし。
○投稿は必ず自家の作物たるべきこと若し剽窃の疑あるものは入賞無効とす。
○入賞の通知を受けたる者は最近寫眞送付あれ。
○投稿は一切返附せず、不足未納投は謝絶す。
○入賞者へ懸賞品送付は發表一ヶ月後たること。

(丁の四)

發行所（投稿受付）東京市京橋區大鋸町十十一番地 女子文壇社



女子文壇　第四年　第十八號

紀元二五六八年　（明治四十一年十二月一日發行）　西暦1908

眞

人間は然うえらいものでない、只此れだけのものだ、此れだけのものを、此れ以上に見せやうとするから虛榮になる、學問で飾つても、智識て彩色しても、人間以上にはなれぬ。要するに人間の仕事だ、それを互ひにえらさうに見せたい爲に、態と隱したり、殊更衒ふたりする、何の價値もないことだ。昔の文學は隱すべく、衒ふべく、智識の作用を示すべく、所謂才華煥發を尊んだ、けれども既うそれては威赫がきかぬ。人間として言ひさうなこと、考へさうなこと、想つて居ること、感じて居ること、それを正直に痛切な言葉て表はすのが文學だ、詩であらうと文であらうと形式は其人々の才能に因ることて、文は繪畫の如く、人生を描くもので、詩は音樂の如く、人生を歌ふものだ。若い時には描くより、歌ふ方が多い、歌ふにしても昔の花鳥風月ては困る、強い感情、鋭い感情の聲であらねばならぬ、人間は人間て、人間以上になれないけれど人に據りては自分を深く、鋭くして見ると、恐るべく疑ふべく、悲むべく、驚くべき新しい人生が見える、注意を深くせよ、新しくせよ、何物にも捉はれるな、而して生きた人生が眼前に現れて來る處を、描け、歌へ、それが所謂眞、外に眞があつても吾等の知らないことだ、知らないことは言へない、知てゐる處が即ち眞である。

十二月（大）
日曜　六日　十三日　二十日　廿七日
冬至　廿二日
年の市
クリスマス

新年號豫告

屢愛讀者諸君に告白したる如く、本誌の大革新に伴ふ新年以後の計畫と、編輯方針の主意は了知されたことゝ思ひます。

新年號は特に紙數を增加して二百頁となし、面目を一新し、趣味の充實せる雜誌を作ります、大體の計畫を左に發表して置きます。

表紙は洋畫界の大家**長原止水氏**が新意匠に成れる高雅にして**鮮美**なるものを用ゐ、**口繪原色版**は**大作**として世に傳へらるゝ「パーチエルとソフイア」(ゴルドスミス「ヴイカー物語」の一節)にして假に「**快活**」と題し**精巧**なる原色版にて刷出す。

新年附錄には小說壇の雄將**島崎藤村氏**の新作を初め**德田秋聲氏**、**江見水蔭氏**、**眞山青果氏**及び**大塚夫人**の苦心の作を掲ぐ。

本欄の材料は多趣多樣なることを努めますが就中愛讀諸孃の爲め、多年婦

人界の消息に通じられて居る羽仁もと子夫人に依囑して、毎號つゞきものとして娘時代より嫁入頃に到る迄の婦人の心得を説いて頂くことにしました、修養をするにも、學校を選ぶにも最も迷ひ易い時代ですから其等の諸孃の爲めに實際的の指導者を得ることは急務だらうと思はれます、本誌は聊か其任に當らうとするのです。

女子の思想界に對する問題の如きも、本誌は努めて之を先輩の諸氏に意見を叩かうと思ひます、新年號には若き婦人の自覺に就いて、博士名士の新説を聴くことになつて居ります。

有益な年賀狀の認め方や、面白い花の辭彙も載せます。

各名家の小品文、新體詩、短歌、時文、評釋等に到りては今一々細目を擧げませんか、必ず新春文壇の花たることを疑ひませぬ。

投稿は積んで山を成して居ます、各選者は特に懇切なる選評に着手されて居ます。

以上の如く分量と實質に富む大雑誌にして、猶定價は改正の普通號と同じです、以て新年の欣びを讀者と共に頒ちたいのです。

人形

岡本靈華

去年の冬姉が死ぬと間も無く、およねは其の後添に今の家へ縁付けられた。良人の慶造といふは今年三十五歳、そしておよねは十八てある。齢から見ても隨分不相應な縁邊な事は、親達も承知して居た。が、縁あつて一旦姉が嫁いて、姻戚にもなつて居る間柄を、其まゝ疎遠になつて了ふのは誠に本意で無い。且つは姉が殘して行つた一人限の遺孤――今年漸う五歳になる英坊といふを、此先氣心も知らぬ他人の手に任せる事は、何よりも里の親心には痛はしかつた。恁ういふ事情が、究り妹の其談を急ぎもし、又容易くもした譯てある。けれど、およねは其れを格別不足にも思はなかつた。同じ嫁くなら、何にも知らぬ餘所よりも結句氣安い位に思つて、一も二も無く老父母の想くに任せて居た。

其の當座のおよねは、唯ソハ〳〵と日を暮した。別段良人が慕はしいのでも無く、姉の子供が可愛いても無いが、譯も無く其の變つた境遇が味ひ深く思はれた。全て水の中の魚のやうに、スイ〳〵とした鮮しい心持て居た。が、家庭に段々馴れるにつれて、何時の間にか然うした情趣は薄らいて來て、未だ一年と立たない今日此頃最うおよねは、人の妻といふ重苦しい思に、シミ〳〵と胸を塞がれる事もある。そして、輕い微笑の代りに、ともすると溜息がその優しい唇から洩れた。

今日は死んだ姉の十度目の命日に當るので、およねは午飯を濟すと、手狹い勝手の板間て、せつせと手向の黄粉團子を造へて居た。今も其胸には差迫つた心配がある。て、團子を丸めながらも、それに黄粉を塗しながらも、やたらに其事が苦になつて、慶造が今日出掛けた交渉の首尾ばかり、何うだらう〳〵と考へ詰めて居る。外の事なら左も右く、事件が實家の兄から起つて居るし、自分も其際口添した覺えがあるので、弱

い胸は唯最う心配に震へる。折節門口を通る下駄の音を聞付けても、良人の歸りかと思つてハッとして息を呑んだ。

事件と云ふは、里の兄が詰らない商賣上の失敗から、少からぬ借財を造へた。慶造は賴まれて餘義無く其の請判をして居る。所が、那れ程自信のあるらしい口振だつた兄が、先月の期限を何の沙汰もせずに過して、加之に一月程前から何所へか姿を隱したので、突然債主から手强い談判を這方へ持込んだものだ。今朝其の手紙を見た時の良人の慌て方、眞靑になつた顏色など思出すと、およねは熟々氣毒てならないし、一方には又氣の小さい人だとも思つた。

其間に團子は次第に皿に盛並べられた。埃の光る虹のやうな秋の横日が、切窓から明るく流れ込んで、未だ餘溫のある鉢の煉餅に薄い湯氣が立つて居る。羽力の無い蠅の群が旨さうな匂の中をフハ／＼飛んで居た。そして、物思ひに沈んだおよねの澤醒めた額にも止つた。

やがて、團子拵へが濟んて、お供の分は小さな供華に盛つて佛壇に上げ、餘りが皿のまゝ蠅帳の中に藏はれた時、慶造は歸つて來た。顏色を見ても直ぐに知れる。交涉は果して好い結果で無かつたらしい。

顏を見るなり、およねはヂッと胸が塞がつたが、

「貴方、何うて御座んした。」と何より先きに其れを問ねた。

慶造はヂロリと其顏を見た。

「駄目だ。無論駄目さ。」と嘲るやうに言つて、淺黄の小風呂敷に包んだ物を傍へ投出した。烟管を拾つて一服吸ふと、ヤケに火鉢の緣を叩いて、そしてフウと烟を膝の上に吹いた。眼窩の深い、頰の尖つた血色の惡い顏が、其時徵かに抑付けた激昻の熱を見せて顫へた。

「駄目つて、何う言ひますな。」とおよねは良人の目元を見詰めた。

「駄目は駄目さ。駄目に幾通りあるもんか。借りた奴が逃げて了や、請人が尻拭ひせるなあ當前ぢやない

か。」
「あの、些との間延しても下れんのかな。」
「見込がありや、延しも爲やうさ。逃げた奴に、誰が見込を付けて待つとる馬鹿がある。遣口が全て詐欺だもン。掛り合になつた間抜が、一人て好い面ア見るんさ。」と慶造は業腹て耐らぬやうに、口尻をブル〳〵と震はせて居る。

　およねは何とも言樣が無かつた。良人の立腹は無理も無いが、それかと云つて何故自分にまて、恁う刺々しく言散らすのだらうと思ふと、それが又恨しくも悔しくもなる。胸は最う一杯である。

暫くしてから、
「でも、兄さんかつて、此なり置けば貴方に御迷惑かゝる事は知つてだし、何所かて乾度金策ても……」
と言ひかけるのを、慶造は苛々しく遮つた。
「何が……そんな義理を知つとる位なら、始めから今度のやうな借金爲やせん。」
「那の人も、それは運が惡くて……」と言つたが、兄の辨解するやうて、およねは氣が咎めて口を噤んだ。
「然うさ。博奕に運が無いんだ。」と慶造は嘲笑つた。

　そこへ、英坊が何を惡戯したのか、泥塗れな兩手を擧げて、べそ面をしながらショタ〳〵と表から入つて來た。およねは直ぐに見付けて、
「まあ、何だねその手は。」と顏を顰める。
「轉んだよ、あすこの役場の前で……」
「馬鹿だね。着物を汚しや爲なんだかい。さあ、早く遣方お來て、洗つてやるに。」とつい突慳貪な言方をして、子供の手首を取つて流し場へ連れて行つた。着物には何所にも泥の痕は無かつた。唯これ丈の有勝ちな子供の過失が、今日に限つておよねは頭でも小張つて、泣かせてやりたい程むかついた。然し。有繫にそれ迄は爲ずに、金盥を前に突付けた丈て虫を濟した。

　英坊はボチャ〳〵と洗つた手を、母の前垂て拭いて貰ひながら、目早く蠅帳のみたらしを見付けて、
「お母さん、那れお下んな。」と甘へた聲て請る。
「やらない。外へ行つて泥だらけになつて來るよな者

に、何やるもんか。默つて、些との内大人しく爲とるだ。」と強い顔して叱つた。

火鉢の傍て、慶造はムシャクシャして耐らぬと云ふ風に、兩手て頭を二三度逆ごきに扱いて、腹一杯目口を顰めて見た。そして、出拔に、

「おい、酒があるか。無けりや直ぐ取つて來い。」と啖鳴る。英坊はビックリして、團子の事は忘れて、兩方の顔を彷と見比べた。

およねは無言て酒の仕度をして、良人の前へ持つて行くと、慶造は引手繰るやうに德利を取つて、

「何だ、この燗は。水にても漬け置いたのか。」と毒吐いたが、突返して直させるても無く、その儘グイ〱と續け樣に三四杯呷つた。酒は弱い方て、其丈飲むと直ぐ最う目色が變つて來て、息苦しさうに唇を咬歪めて居る。

「貴方、それて今の話は何う成りました。」とおよねは最一度傍へ坐つて其事を聞いた。

「何うも恁うも成るもんか。田地ても賣つて了ふさ、それて足りなきや、屋敷ても家ても賣るんだ。」

「まア、そんな暴な事言はんて、貴方確かり考へて見てお下れませう。」

「煩さい。貴樣も同類の癖に、恍け面あ見たくも無え。那方行つてろ、酒が不味い。」

「何てす……私、私が同類と……」聲が窒つて、およねの目からハラ〱と涙が零れた。

「然うさ、同類さ。」と慶造は光る目て冷然と其顔を見て、そして又一杯一息に空けた。

「同……同類とは何てす。」

「同類だから同類さ。博奕打の兄弟だらう。」

「兄弟なら何うてす……」とおよねは袂てヒシと顔を掩つて、耐らずしやくり上げて居る。

「何うても可い。煩いから那方へ行けつたら。蹴飛ばすぞ。」

「行きません……悔しい。」

「馬鹿。」と言ふと、行成其の手の盃がおよねの肩を掠つて、板間に落ちて破れた。英坊は母の傍に走り寄つ

て、腕にしがみ付きながら、ふいに大聲を上げて泣出す。

慶造は眞靑な顏して立つた。そしてプイと外へ出て行つて了つた。

何時の間にかトップリ日が暮れて、最う周圍も見えぬ程に暗くなつて居る。暫くして、およねは顏を上げた。泣き喚く英坊を賺して、ランプを點け、其邊の戸締をした。火鉢の所へ歸つて見ると、良人が突付き散した膳と、板間に碎けた盃の破片とが、ランプの光にさも暴風の跡の狼籍を見せて居る。およねは醒めた顏をして其等の物を片付けた。

其晩床に入つてから、およねは終夜眠らずに種々な事を考へ通した。餘りな良人の爲打や、不幸福な緣や、寧そ最う思切つて了はうと云ふ決心は、考へ考へた末、彌張思返さねばならなかつた。

そして、明方近くにウト〳〵と睡に入つた。

初戀の人

水島佐久良

私はもう少し先刻、雜誌社からの歸りに、不忍池の畔りで思ひもかけぬ或婦人に出逢つた。

これは私の一生に「戀」といふ感念を始めて彫りつけた女なのだ。

初戀の人――それに計らずも出逢つた刹那の私の心は何んなに亂れたらう。とまづ人はさう思ふだらうが併しその刹那こそむしろ私は不思議なほど冷然としてゐた。隣家の主人に逢つて「今日は、」と挨拶した時と同じやうに平氣でやつた。

面を合し、眼を見合したその時は、何の思ひもなく通り過ぎたが、然て半町ばかり來ると、私は何氣なく立止つて振り返つた。と同時に彼女も振り返つて此方を見る。この時私は何者かに強く胸を打たれたやうに感じた。あゝ私はこの刹那に、始めて抑へる事の出來ない懊惱を覺えたのである。

そして私の記憶は少年時代に遡つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

尾山たつ子が嫁いだのは、私が十九の時であつた。私はその話を從妹が隣室でするのを聞いて、思はずはつと息を止めて、唇を强く嚙んだ。そして障子越しに耳を欹てたのである。

彼女の夫となる人は某會社の技師だといふ。

こゝまで聞いた私は、言ひ知らぬ怨めしさと口惜さとが强く湧き上つて、今まで未來の希望を樂しんでゐた私は、忽ち千仭の谷底に追はれるやうな、淋しさと悲しさとが、胸に烈しく往來して、咽喉はからびて呼吸はしきりに荒んで、嫉妬と絕望とに机の上に突伏した。

悲慘な痛ましい失戀に、如何ばかり煩悶え狂つて、彼女を呪つたであらう。

彼女が溫かな家庭を結んで、そして睦しく囁く有樣を思ひ浮べると、燃えるやうな血汐は、むら／＼と腦を掻き亂して、止め難い怨恨の復讐の念は、疾風の如く襲ひかゝつて、われ知らず拳を固めて戰慄した。

私はなぜ逆上しなかつた。狂人になつて彼女の胸を刺して、悶え苦しむ姿を見て、自分の心に滿足を與へなかつたかと、絕望した私は實にかう思つたのである。然しその極度の激憤に驅られても、自我を沒する事は出來なかつたのだ。

たつ子――それは私と小學校の同級にゐた婦人である。

私はそのたつ子を何時からとなく戀してゐた。て其の頃、私は毎日たつ子と學校で顏を逢はすのが、何よりの樂しみであつた。假令ば鬼ごつこなぞして遊ぶ時も、態々たつ子の居る方へ追はれたり逃げたりするのが、たゞ妙に嬉しくつて、わけもなくなつかしがつてゐた。

三月になると私も彼女も卒業して、彼れは女學校に、私は中學校へ這入つた。かうなると今までのやうに、毎日彼女の姿を見ることが出來なくなる。するとそこには新らしい輕い煩悶が起つて來て、たつ子を思ふ念が日に增し强くなつて來る。學校にゐる間でも、路ぞ歩く時でも必度彼女の事を考へて、無暗に胸を躍らしてゐたのである。

一層手紙を送つて、この胸中を打ち明けて見やうかと、幾度か思つたが、併しその戀しさよりも、人眼が恐ろしいといふ力ある不安が、限りなく起つて來て、それも成らなかつた。そんな風であり乍ら、月日が經つに隨つてたつ子を思ふ情は烈しくなるが、不安の念

は執念くも着きまとつて、躊躇の域を脱して放縱な心になる事は出來なかつた。そして私は絕えず惱んでゐたのだ。

夏の或夜、區の衞生會で催す幻燈を、私の居た小學校に見に行つた事がある、その日は久しく逢はない彼女に、必度逢ふ事が出來るやうな氣がしたので、逢はうといふ一念から一人で出かけた。

晴れ渡つた蒼い空にきらめく星の光は、一日の苦熱を醫やすやうだ、夜氣は肌を掠めて涼しい。

學校の門にはぞろ〳〵と人が這入つて行く、私は友人に逢ふのを避けて、運動塲の後ろに立つた。

小砂利を蹈みにじる音や、群衆の話しごゑが、ざわ〳〵と漲つて、人の汗ばむだ臭氣や、女のよごれた髮の匂が、厭はしくむんむとして、押しつけるやうに鼻を衝いて、空氣は重々しく濁つてゐる。

處々に點した高張提灯の火影に慕ひよつた小さな虫が、その周圍を飛びめぐつてゐる。

私はたつ子の事を考へ出した。彼女も必度來てゐるだらうと思ふと、たまらなく胸がせわ〳〵としてくる。

すると後ろに靜な足音がした。私は何の氣なしにふと振り返ると彼女である。この時私は嬉しくも懷しくもなかつた。たゞ胸は異樣に躍いて、赫と上氣した。

白い凉しさうなリボンをつけたたつ子が、すまして下婢を連れて私の傍に立つた時は、何となく恐ろしいやうな氣がして足が慄へた、けれども暫らくするとそれが一種の誇りのやうに覺えて、限りない滿足に胸はむづ痒いやうに思はれた。

彼れは黑味勝ちな瞳を、折々私の方へ向けるのである。然しかうなると私はむしろ——勉めても冷やかな態度をする、そして心の底からは「何んだ女なんぞが。」といふ氣が湧いて、見得を張るのだ、張るわけではないが、自然とさういふ心持ちになつて、何時しか昂然として肩を聳すのである。

併し私は戀する人の傍に長く居られなかつた。たゞ私の感情を苛々と昂ぶらせるばかりで、情の激し易い私には、實に堪へ難い苦痛なのだ。その切ない心を抱き乍ら、猶且傍に居たい、苦惱は一種の慰安であるといふやうな、妙に矛盾した心になつて來た。然し私は或決心をする爲にその夜は强て歸つた。そして途すがらその事を考へて見た。

歸つて机の前に坐ると、疲れたやうにがつかりとした。

螢火を睨と凝視てゐると、白いリボンの涼しさうなたつ子の姿が浮んで來る。たゞ戀しさの念より外には何にもなかつた。そして私は感情に任せて手紙を認めたが、氣ばかり躁つて手は異樣に顫へる、それでも兎に角書き上げた、併しそれを讀み直す氣力はなく、忽ち寸斷々々に裂いて、それを燃してしまつた。

「意氣地なし。」と自分を罵り嘲つたが、やがて激昂した氣は折れて「自分は果して人を戀する事が出來るであらうか。」といふ疑が限りなく湧いて、落膽とした。

そしてその戀はついに成らずに了つたのだ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

その當時の思ひ出はこれで盡きた。

無論私の感情は昔程激烈ではなかつたのである。

たゞ自分は生活と鬪ふ爲に、目下の運命に滿足して、立働く一人なのかと痛切に思つた。

田中久子冥す

本誌投稿家の中でも特に希望を囑して居た小說壇の奇才、田中久子孃は豫て病ひを相州三浦三崎に養ふて居ると聞いて居たのでしたが、計らずも其訃を聞いて痛惜の極みに感じます、孃は昨年三月初めて本誌上に作物を揭げ、以來殆んど每號の如く入賞し、小栗風葉先生の如きも女子にしては珍しき才なりと稱揚されましたが、天、此人に年を與へず、終に彼女自らが語つた如く「死」の手に捉へられました、孃に令兄あり、又文學を愛して現に早稻田大學文科に學んで居ると云ふことです。孃が逝去の模樣等は左に揭ぐる親友梅澤女の文を見てお知り下さい。なほ其次に揭ぐる「海の二十里」は實に孃が絕筆にして、想ふに病重り、もはや小說をすら書くに苦しき程になつても猶筆を捨てず、短い美文を綴られたのでせう、之を發表しても作者は世に亡いと思へば、實に痛哭の次第に堪へません、因に云ふ孃の肖像は增刊『文壇の花』に出て居ます、就いて亡き人の面影を忍んで下さい。

田中久子君逝く

牛込　梅澤梅代

嗚呼、田中久子樣は逝きました。吾友田中久子樣は逝きました。私は今日「久子樣が逝つた」と伺つて全く自分の耳を疑ふ程でありました。豫て久子樣は轉地療養

に三浦に御越になつたとは伺つて居りましたけれども其後毎月女子文壇て御作を拜見しますのてこれは必ず好い御經過に相違ないと內々喜んて居りましたのに：：：。そう久子樣が實踐女學校から私達の第一に轉校なさつて以來こゝに四年、共に一つ敎室に机を並べて來たのてありました。

久子樣は極く靜かな優しい方てした。每も冬になると私達は皆寄つてたかつてストーブを取り捲き勝手な事を話し合つて所謂ストーブ會議を初めて居りますと久子樣一人は俯き勝ちて羽織の紐を弄りながら笑を含んて聞いて居らつしやるのが常てした。そして作文が御得意てよく先生から讀んて聞かされたものてした、私達仲間ては久子樣を「未來の一葉」と期して行末を待つて居りましたのてしたのに：：：。あ、あの運動場の芭蕉の葉蔭て毎も一人て考へて御出る淋しい久子樣の後姿が瞭々と見えます。久子樣の美文「死」の中にも「少女十八「死」と手を握るにはまだ餘り早くはあるまいか：：：けれど人は死んだ、十八ても十六ても「死」は用捨なく少女の頬を冷して行くもの：：：：」と、ああ久子樣はとう／＼十八て：：：：全く死の手は用捨なく吾久子樣を取去つてしまいました。

今月の本誌て小栗先生が久子樣の「一人限り」を評して「其世故にたけた觀察、老熟なる筆致、他日の進境こそ思いやらる」と仰いましたけれど、あゝ他日、他日を待つ迄もなくもう／＼永久久子樣の御作は見ることが叶はなくなつてしまひました。あゝ來月からの本誌には「田中久子」なる文字は消されてしまふのてせうか！、あゝ私は友として久子樣を悲しむと共に女子文壇の爲に前途望ある田中久子樣の逝かれたことを痛く／＼嘆くのてあります。あゝ私は「少女十八「死」と手を握るには：：：：」とよみ返してはまた新しい涙の湧き來つて：：：：：。

嗚呼。田中久子樣は逝つてしまつたのてす、吾友田中久子樣は逝つてしまつたのてした。

（「女子文壇」愛讀者、投書家たる田中久子君は今十一月三日午後二時相州三浦にて逝去せられたのてす生前長く愛せられたる知られたる本誌愛讀諸嬢に一言この訃を御知せ致し度いと思いますこの一篇はごく拙きもの故沒書にされても決して苦しくはございませんが田中久子樣のなくなられたといふことだけは是非皆樣に御知らせ下さいます樣にまげて記者樣に御願申ます）

海の二十里

三浦三崎　田中久子

ポーと又、勢の無い汽笛が聞える。……これて三度艀はもう人を乘せて靜かな波を蹴つてるのだ。と思ふと、其艀の中に誰か私の所へ來る人が、洋傘に秋の日を避けて、低い家並の漁師町を眺め乍ら、乘つて居るやうな氣がする。昨日もこれて二時のお藥を飮むで了つても、もしや〳〵と思つたけれど……。

またポーと、今度は長く尾を引いて消えた。もう是が終りの音。ドヤ〳〵と棧橋へ上る人の後へ隨いて、誰ともつかぬ私の心へ映つた人は靜かに上つて、懸て兩側の街を見い〳〵此方へ來る。何所かで訊くと、其坂ならこれ〳〵と敎へられて、重ね草履を重た相に、今大乘寺の傍を上つて來る……。

幸樣だらうか、君さんだらうか、それは分明分ら無いけれど、けれど何と無く、たゞ何となく、誰か私の所へ來る人が今彼坂を上つてゐる樣な氣がするもの。母樣に話して笑はれて、兄さんに話して又笑はれて、それでも〳〵、まだ耳をたてゝ居た。必然、必然來ると耳元で何か囁く。石垣の外、草堤の路を步るく人の氣勢……怪てゝ枕から耳を離して澄ましたが、二分――三分――石段を上る音がし無い。がつかりし乍らもまだ其儘にして居ると、また微かな足音に、今度は搔卷から半分身體を延ばして玄關の障子の中硝子を見詰めて居たけれど、けれど矢張駄目だつた。

幸さんも君さんも誰も女、一人では許さるまじき海の上の旅だもの……誰も來て呉れはし無いと思つた時戀しさと寂しさについ淚が頰を流れた。

都を離れた海の二十里、蟲を聽いて、浪の音を聞いて今年の秋を私は唯、母樣のみ膝に縋つて泣かう。

三浦三崎に御保養中の田中久子樣は、秋も暮の去る十一月三日の夕、遂にあへなく御なりなされました。若い小說家、まだ十八の――久子樣は僅に老いた母樣にすがつて兄樣と共に淋しい運命に泣かれた方、徒然のすさみに筆を取つて文壇上に皆樣と御なじみとなりました許の秋、吁惜しい天才をむざ〳〵失はれました。御佛前に御泣き遊ばす母樣の御氣の毒さ、只淚で御座います。失禮ながら誌上に御厚情を致しました諸姉樣に御知らせ致します。（日本橋區元大工町十五松井靜代）

independent of man and that women were happier by themselves. So she tried to promote the cause of women by forbidding any man, even fathers and brothers to trespass on her college ground.

B. Didshe carry out her plan to the end?

A. No, she could not. After many failures, she found her mistake and saw that true womanhood should be developed by helping and uplifting men as sisters, wives or mothers. I can give you quotations after quotations from the poetry which express the beautiful setiments of noble life.

C. I must recite a piece at our next literary meeting. Please give me one passage from "The Princess"?

A. Haven't you learned "Sweet and Low," or "The splendour falls on castle walls"?

C. Why yes, I learned them, but I did not know they were from it.

A. "Home they brought her warrior dead,"—this is a good one. Do you know it? "Tears, idle tears," is another fovorite piece of mine.

B. Please let us copy them. I do not know either of them.

C. Afterwards I shall come to you and please explain them to me.

が幸福と思ひましたものですから，女子の進歩を謀らんとて，男子と云へば，父たると，兄弟たるとを問はず，悉皆構内出入を嚴禁いたしました。

乙．終に其目的通りに實行出來ましたか？

甲．駄目てした．種々樣々の失敗後，彼女は己が過を知り，眞個の女德と云ふものは，男子の姉妹，妻，母となりて，彼等を輔佐し上進せしめて，發展するものであると悟り得ました。此詩より高潔なる人生の美しき思想を歌ふた句が澤山にあります。

丙．次の文學會て，私は詩を諳誦しなくてはなりませんから，「王女」から何か教へて下さいませんか？

甲．「靜に吹け西風よ」だの，「壯麗城壁を打圍み」などの詩句を御存知？

丙．エー其は習ひましたが，「王女」からのだとは存知ませんてした。

甲．其から，「討死の夫は家に運ばれぬ」は良い詩てすが，御存知ですか？「涙よ，わけなき涙」も私の好な短篇てす。

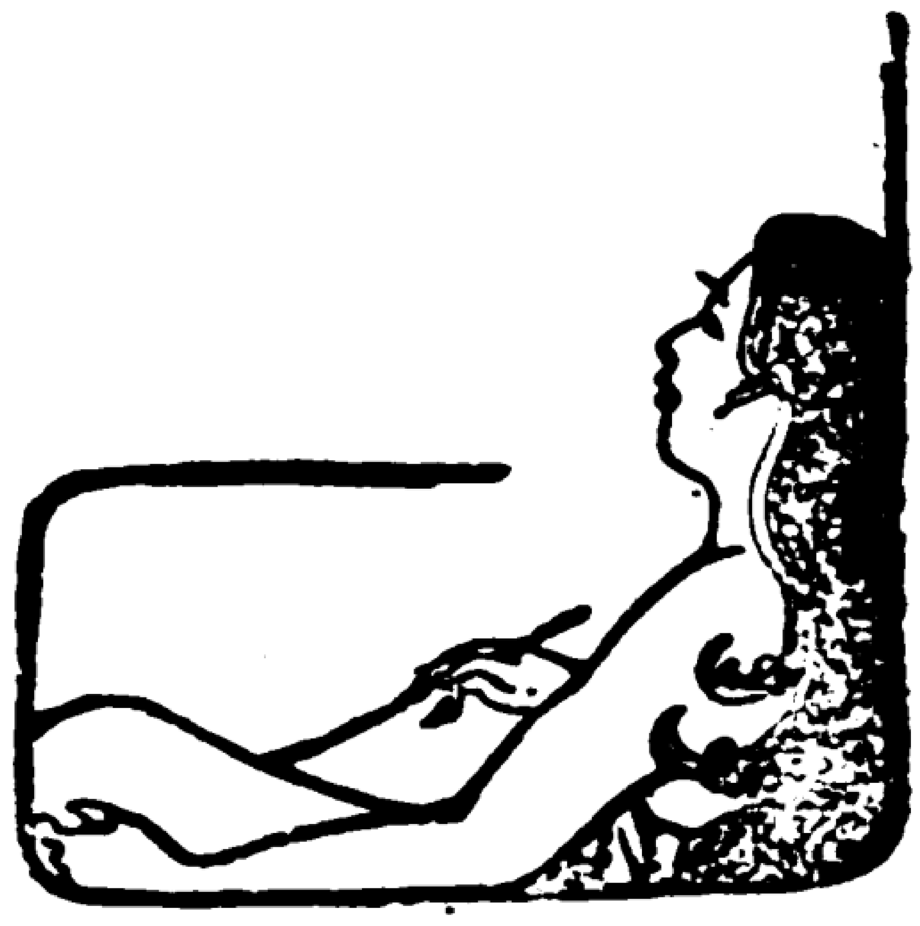
乙．何卒寫さして下さい．私は何方も知りません．

丙．後て又參りますから，其說明をお願ひいたします。

英　文

(第四年第十二回)

女子英學塾講師　河井道子



"The Princess"

No. II.

A. I admit that this poetry is too difficult for most of the girls of your age, but there are also many easy and exquisite passages which you will appreciate highly.

B. Won't you tell us the main idea of "The Princes"?

C. And please tell us the easy passages you have mentioned.

A. There was once a beautiful princess who founded a college for young girls.

B. She must have been a very learned lady.

A. Her idea was to form a female society entirely separated from the world of man.

C. What a peculiar notion it is!

A. I suppose she was just like one of the modern women who consider woman equal to man in every respect. She thought that the fair sex could be quite

王　女

其二

甲. 貴女方位の歳頃の方々には是は餘り六ケ敷事は，私もよく解つて居りますが，又其中には又平易でありながら，歎賞措く能はずとも云ふ可き句も澤山にありますから，貴女方も充分に會得なさられます。

乙. 此詩の大體を聞かして下さいませんか。

丙. そうして，其良い平易な句も御願ひ致します。

甲. 昔し某王女が女子の爲に大學を設立されました。

乙. 餘程學者な姫君で，在らせられたのでしよう。

甲. 其創立の主眼は，男子の社會と絶對的に隔離　たる，女子の社會を組織するのでした。

丙. 何と妙な考でしよう。

甲. 多分此姫君は，男女同權主義の，今日の某婦人連に似て居たと思ひます．彼女は女性に男子の助を少しも借らず獨立て行けて，併も女子丈の方

家庭日記

日記文のうちで美文風のものは美文欄に收め、今後は家庭日記として日記文を募ります、就いては家庭に關係したことなら美文風のものでも、亦實用的のものでも宜しいことになるのです、實用的と言ひますと家庭に關する心得や、實地の出來ごとや、文學を離れたものでもかまはないと云ふことです大要を擧げて見ますと左のやうなことです

▲家庭で行つてゐること、見たこと聞いたこと、出來ごとのいろ〳〵。
▲衣服、食物、住居のことは勿論、廣く生活上の新しい經驗や、失敗や疑問など、何でもよし。
▲其日のうちに起つたことなら物質的のことでも、精神的のことでも。
▲成るべく實地の有りの儘を書くと云ふことを主眼とします。
▲小さい子供達の教育のことでも、若い奥様の家庭改良意見でも、女子の筆になつた家庭の日記なら歡んで迎へます
▲行數は二十四字詰三十行限りです（本月十五日締切）

『餘興』火（課題）

▲「火」と云ふことに就いて何事なりと語つて下さい▲「火」は燃ゆる火です、火は若き人に最も強い印象を與へるものです、火は熱です、火は光です、火は命です▲文學的に火を描き、火を歌ふのもよろしい▲或はあらゆる火のことについて、自分の感じを述べるのも面白い▲火の色に就いて、火の形について、火の聯想に就いて、言ふべきことは澤山にあらうと思ひます▲單に燈火とか、炭火とかに就いて、想ひ浮んだ談話だけでも面白いでせう▲偖て原稿は例の通り十六字詰十行内外とします▲原稿には餘興火と云ふ文字を落さないやうに注意を乞ふ▲しめきりは本月十五日限りです▲因に云ふ前號に文壇餘興を「話」と改めるやうに書きましたけれど單に「餘興」とします。

『新美文』の投稿

本誌が年四回增刊を發行する其第一として「新美文」出版のことは廣告欄にある通りですが、愈よ原稿の〆切は本月廿五日です、最高賞の一篇には金二十圓を呈上して聊か其勞に酬ゐます、其他各項に就いて御覽を願ひたい、美文と稱しても廣い意味が含まれて居ますから其旨を了承して、自由に、大膽に、眞率に、好い作を寄せられたい。

靑年文士として純潔硬直の聞えある一色義朗君（醒川）は本社に入りて編輯の一員となれり、此段讀者諸君に告ぐ

自宅轉居　靑山北町五丁目四十七　河井醉茗



美文

編輯局選

▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採錄す、二十四字三十行以內、用紙は半紙又は原稿紙、一人一章に限る事、投書締切は毎月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

天　○生より死へ

信濃　太田喜志子

妾の思は斯う走り去る。

なぜ足早に――なぜ足早に――のであらう、花木槿の一ッ二ッ殘つて咲いて居る窮屈な陰、栗の切り株に腰を下して葉と葉の間から一ッぽつゝりと坊主のやうになつてゐる實をぢつと見つめて、口惜しいやうなぢれつたいやうな心持。今まで私は何を思つて居たらう、何を――何を――いくら追ひかけてもやはり心は心、いきなりに膝にさわるヂブの葉をむしつて、ヂャキ〳〵にかんで吐き捨てた、片手は山茱萸の幹に、片手は黄な落葉を拾つて持つて、考へて――考へて。

おゝこの落葉、病葉ならぬこの落葉。

今だつたこのまつげの濕つたのは――

かすかな〳〵韻に驚いて見上げたが。

（これこの髮はこんなに亂れちまつて、これでも人の前に出て美しひ笑ひ顔が出來る事てあらうか）

かすかな〳〵ひゞきに驚いて見上げたが、ハラ〳〵と母なる梢をはなれて大地に散つたこの葉、それは痛ましい姿、悲しい調べを吾が胸に宿らせて逝つて仕舞つた。……目は閉ぢた……。

……生より死へ？長いやうな事であるがまた短かいものとも思ふ。生と死とのさかひ、その瞬間に出づる叫び、其の叫びはもはや死しゆくものゝ肉にはひゞかぬ。生より死へ移る瞬間の叫び、それはどこに行つて何に應へるのであらう、この世の果てには其のひゞきばかりが集まつて成つて居る國があるやうに思はれてならぬ。

生より死へ移る瞬間深い〳〵意味が有るてはないか。今こゝにこんな事を思つて居る私のこの肉にもいづれは其の影が迫つて、やがて誘ひゆくのであらうがまア其の時はどんな叫びを殘して逝くのであらう宇宙の萬物のすべては其の時間中の出來事を覺知する事が出來ずに永遠に〳〵死んでゆくのである。昨夜も便りない寂しい思を秘めて泣いて寢入つた。まだこの胸に痛きひゞきを殘して……。心は浮かぬ、浮かぬ、誰れにとがのあるてはない、たゞ自分に切ない悲しい暗い影が迫つてきてこんな處にかくれて何を思ふてもなく斯うして居るのだけれど、けれど……あゝ妾はな

んてさびしい……苦勞性の子であらう目は開いた。何も皆おぼろげに――、水晶のやうな泪の玉がホロリ〳〵と散るのが見えた。

殆んど散文詩の領域に入る、其哲學めいた冥想も、詩として讀めば大なる、深き價値がある（評）

地

○古城

名古屋　八重子

今日も徂く。

とう〳〵雨もあがらずに暮れてしまうのかな。冷い雨はしと〳〵と、石も濡れ、木も濡れ、私の胸迄濡れてしまふた。あゝ淋しい夕ぐれよ。どうしたらいいだらう。どうしたらいゝだらう。あせつても、叫んでも誰も答へぬ。

ぐつたりして身を落して目を瞑る。

胸に刺された哀寂の矢さずはひし〳〵と痛むやう。よろめきながら外に出る。氣を晴らすつもりて。

道は一すじ濠の前に來た。

ふと佇んで力なく見上げると、淡い夕べの光が城址を包んで居る。噫敗殘とつぶやいて、しと〳〵と雨のそゝぐ城址を、つく〳〵と見入る。

淺墨の松ばかりは古偲べと聳へてるけれど、濠にうつる影は淡い。

古は、血氣にはやる若武者が大望を抱いてこの城に擴つたのてあらう。天下を我が掌に握らんずの野心は彼が生命てあつたらう。けれども彼が思慮はあまりに若く一朝の戰いに脆くも敗戰の骸となつたのかもしれぬ。美しき生命と誇つては居たけれど。――

運命の神に導かれたのは野の穴。手向られたのは桐の朽葉。彼が靈はどんなに泣いたらう。無念だつたらう。

城は燒けてたゞ一つ遺されたあの石崖は、今は頑としてゆるがぬけれども、時が立つたなら、主の運命の如く、がら〳〵と崩れてしまふてあらう、音も靜に――いつか――いつか、乾度一度は。――

その時は矢張りこんな秋徂く夜てあつてほしい。そして雨が降つて。

けれども。――

あの城は、私の友達!!幸なき戀なき私の慰藉者よ。私の靈はちやんとあの石崖の間に、奧深く秘めて置いた再び汚ない風に飛ばされないやうに。

その靈の家が崩れたら――崩れたら、其日は私の終りなんだもの。噫矢張り淋しいわ。

秋風が一しきり、ほけたすゝきの穗を渡つて暗に消えてゆく、松の實がポタリと地に落ちた。やがて冷い土に化るてあらう。

雨の古城を見て自分の淋しい感じを言ふことは新しい、古城と云ふやうな古い意味のついてくるものが、全然新しい意味になつてきた、あゝ若い人の胸は日に〳〵新しい血が流れてゐる（評）

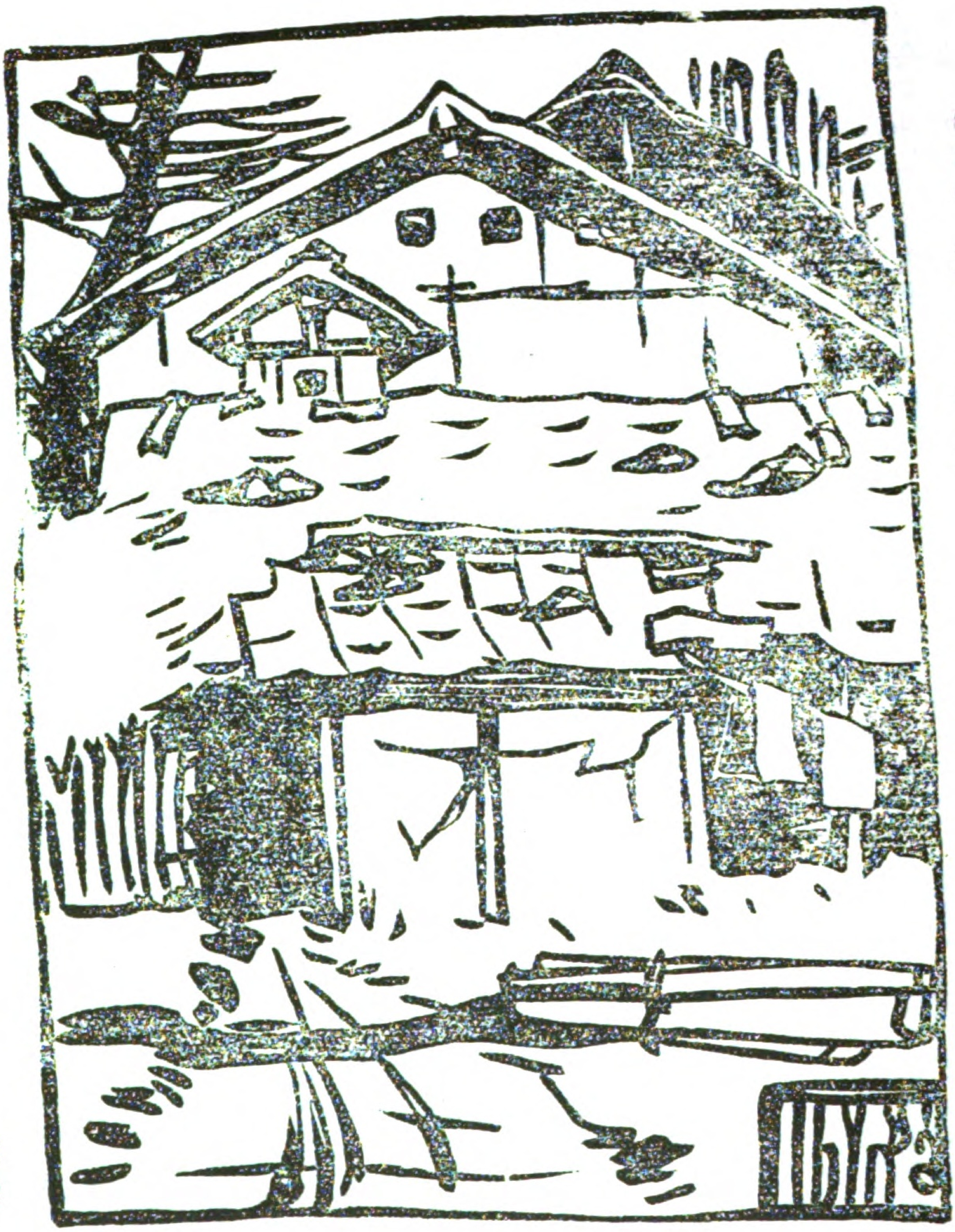
人

○我が願ひ

山口縣　さくら子

小暗い灯のもとに今宵も又、女子文壇を開きました。私の一番好きなのは新體詩てあります。私は熱心になつて、よみ始めました、しかしどうしても意味がわかりません、中には少し、わかるのが有りますけれど。あゝ私は満十三年十一月てあります、いくども、いくどもよみ返しましたが、どうしてもわかりません、此れ程まで好きなものが何故、わからないか、と思ふと俄かに、悲しくなつて、涙がハラハラと頬を傳りました。したはしき記者様よ、私は未だ年がいかないから、わからないのでありませうか、それとも一生わからないのでござり

〔天賞〕　家の裏　磯津　とよ子



ませうか、目をつぶつてやゝしばし、机の上にふした時、窓の下の、くさむらでは虫が靜かに鳴き始めました。私は何卒、新體詩が早くわかつて、諸姉樣のように美しい詩をつくることができる樣にと神樣に、いのりました。

此文其まゝが詩だ此外に詩はない（評）

秀逸

○秋の夜

諏訪湖畔　しぐれ

靜に白きカーテンを上げて、音にのみきゝし秋雨の夜に向へど、つめたきはなほ我が頰を流るゝ涙なるに—ゆるしませ、筆毎ににじむはとかりもなき、ゆり子が涙を—、我心は痛みて死ぬばかりにて候へば。——海なれり、暗なる海は狂ひなれり、逆卷く波のはげしければ、今宵は内地に通ふ船も見えず、あはれ淋しき夜なるかな——、海暗し、……かゝる夜を心にも身にも重き苦痛を負ひて、たれ慰むるあたゝかき人もなき、淋しき家に病を守り一人ある身は、刻ごとに高き暗き潮の音に、強く〳〵引入らるゝ如く、今此まゝによみの人とはならずやと、いためる胸に手をおきつゝ、汐のひゞきと相和して高くさしくる血汐のどよめきをきゝ入り候。淋しき哉悲しき哉、人のゆくてはすべてかゝるか？よしさらば此まゝにゆり子は淋しきやぶれたる運命のまゝに、たふれ死すとも、人つひのゆくてはなべてこゝぞと思へば悲しとは悶え候はじ、涙あふる目をとぢて、靜に冥に入り候のみ。しかはあれ、心に殘るはなつかしき姉上樣に一目逢たし、一目逢たしと思ふたゞそれのみ。——苦腦の一呼吸の、そのたまゆらの靜まりし間は、罪なかりし、彼の昔の幼な心に立返り、たゞ一目、たゞ一目、まことの心の底の底より、「幼き」の一字になべてをうち忘れて、幼きまゝの笑顏を交し、血を分けし、生てふものゝ血を分けし、そのなつかしのなつかしの、姉上樣と異安笑ひて見たし、—と思ふのみに候へど思は心の願のみ、まことと手をとり交す日の、あゝ此ひろき宇宙のゆくて、いづれいかなる「時」にきざみつけられて候はむか——と思へば、迷ひ入りにし山の奥の夜、遠くかすかに消えかてなる、灯の光を見出し心地に、うれしくも、なほこれの狐火なるや……と……心ほそさに涙流れて…………………

海暗き夜櫻草白うたゝずみ咲く窓に向ひて

ゆり子

涙のあと點々たる此文を受取りし夕、守屋の嵐強う吹きまきつ。——一人の妹は——我なつかしき一人の妹は、心の痛のそれのみか、今は病も負えりときくに—、ともすれば事なき日にも涙ぐむ、弱き妹の病みふす秋よ、いかにいかに淋しくかなしきか——、雲遠し——北海の空、九月の風は寒からむを病みふすまゆに荒く吹かば、つぶらなりし、生れしまゝのにこきひとみも

おとろえつらむ、行たや、行きてやせたる手を握り、一人泣きふす涙の寂を、――分ちてもやりたし、と思ふ心の切なりては、胸のえぐらるゝまて迫る情の、さりとは何にとめられての現し身ぞ、我は今なほてゝにあり――。弱きは我の心なるかな。

守屋の嵐　峯をすさみて、冷く強く又一しきり、泣て泣てふせたる重きえりあしにさても冷う――、……去年木の葉散る夕よ廿年を妹と住みしなつかしの家をあとに此家の人となりけるは………。

かね鳴れり!! かくて暗き夜は來るに、北なる海は今宵もさわぎて病みふすゆり子が枕の底にむせび入りつゝ泣かするにはあらざるや思へば、――又しても高ぶる情のおさえがたうて……たゞ泣きぬ……おゝかわいの妹よ！ ゆり子よ！

血湧り情迫る、怒情の激した時に書いたものと思はれる、全篇悉く無韻の詩、文の境地てなく詩の境地だ（評）

○少女美

阿波　長曾我部菊子

其は七月の陽がかん〳〵と藍の薬の大野を照りつけて草の葉木の葉といはず道や河原の土まて石まて、じり〳〵といられるやう――。吹く風も流るゝ水も生温うたゆげの午後てあつた。一時二十分すぎ。

母家の方を見ると綾江（妹）がたゞ一人ちやんと座つて、花簪の箱をひらいて、造花の白ばら、大きい濃い色の牡丹花、木理の紅いリボンや、長いゴム櫛や、バラリと膝の周圍にとりちらかして何やら双手を動かしてゐる。たいくつなのであらうが、（暑い事ぢや）とおつしやりながら座を起つた祖母樣は暑い故てか足の浮いてふら〳〵とよろめくのをやがて離家の東の縁（母家と相對してゐる處）へお出なすつたとかた〳〵と音がする、きつとお髮上げなさるんだらう？ と思ふて見かへると櫛箱のふたをとつてお引きよせなすつた。私は三疊の間て食後のしまつをしてゐるので。

むせると言ふので間の障子をことことく取りはづしてあるので椽にすわつて白い短い茶筌に結つた髮を覺束ない手付て解いてゐられるお後姿がよく見える。

五分ほど經た。あぶなかしく持たれた櫛が今白い髮にふれやうとする時（あれ！祖母樣、綾が結ひまほよ！）と消しう聲かけていそ〳〵と。綾江は母家から見つけたのてある。目ざといのが可愛くも不思議にもある。

昨日までも手毬はついてもお掃除はといふと嫌がつた綾が何といふ氣のつきやう。私は妹の近頃いちぢるしい身心の變化を考へながらどうする事？ と見てゐると、だまつて祖母樣のわたす櫛を手に後にまわり、一寸かあいゝ頰を傾けて亂れ毛をかきあげておいて、さてときはじめた。

左の手を髮の下にすけ、櫛もてる手をおほらにはつて

品をしてすいと梳いた。誰のしてゐるのを知つてか、手際がいゝ、祖母樣は心よげに目を閉ぢてゐられる。外には蟬がミンミンと梅の木になきたてて、目まぐるしいまで強い白光は、塀より壁より反射してゐる。綾江は根氣よく梳く。すく毎に白髮が、夢ともつれてぬけて四筋六筋と櫛の齒にからんでくるのを、織い眞白い中指と親指とでそと合して、取り集めては横の疊紙の上に投してゐる。

根が漸くしまつた。茶筌に結た髮の切り端はちやきつとそろつた。（出來たんてす!!）祖母樣のお額をのぞいてにつこりするのだ、心の底から笑ましいとやうに。（おう結へたな）と祖母樣は少し身動ぎなすつたけれど綾江はまだ櫛を手から放さうとしない。ただの一筋もそそけないやうにといふあんばいに、くる／＼と身をまはして梳き上げながら（あらあら！ また落ちるは）と言ふ。私は洗ひをはつた茶碗をそれぞれに仕末してしまつて、綾江の後に歩いて行つた。

（上手だつたわ。ホホ）笑をふくむと「え」とかへりみて、上目に私の瞳を見入つて、まぶしう、パッと美しい目を輝かせて笑んだ時、そのふつくりとした双の頰に、耳朶に、花の樣な紅色さした。その艶なるまなざし、羞恥せし色の清さ、情熱あるふるまひの何とまあ少女ぶつたことであらう。あゝ妙齢の美に生れかはつた今日の綾はもう／＼決して昨日のまゝにあしらふてはならないと私は心に思ふた。

女の見たる女の美、女が眞の女になつた時の美、其れは誰でも知つてゐる、斯ふ云ふ場合に捉えて、斯ふ云ふ風に書いた人は少い、太だ佳（評）

此次からは規定の行數を越えないやうに願ふ

○一夜　（人を思ひて）

羽後　菊池りう子

ゴー／＼と恐しく吹き荒れる嵐に窓のガラスがビン／＼なる、ピー／＼と杉や柏は悲鳴をあげる、見るとガラスにはぼんやり片割月がうつつてる火桶を取りまいたのは女許り五人。嵐の響を聞き乍ら婆やは雜巾をさしてる、みわと芳樣は唯ぼんやり針もつ指先の動く樣をじつと見守つて居る、私？私は今ついた人の文を見るでもなし唯しつかり握つてる許り。編物をしてた姉樣がうつとり瞳をあげた「姉樣の毛の多い事」「否、ゆるくまいたから」私は淋しく笑つて手を頭にあげて見ました、前髮もとらずにうるさいのをくる／＼まいて一寸片羽の蝶の簪て止めて居る、是は春に姉樣と茂樣と私と三人お揃ひて雙羽のを買つたのだが如何したのか間もなく私の許り一ツホロリと落て了つてこんなに淋しく片羽が殘つたの。其時から私は冷い／＼世を獨て行かねばならぬ樣な氣がしてならなかつた、其内

に姉様と茂様は外に嫁つてしまはれたし…………。此内では私が一番若い、紅帯をしめてるのは私獨だもの、私は漸々十七になつた許り。けれ共昨日も一諸にさした夏菊が私の許り早く萎んで了つたし……。私は矢張此儘人にも世にも合ずに凋んで了ふのでせうよ其を思ふと髪など結び度もない！姉様は好な人とならば今の今諸共に死んでも！とおつしやる、御二人は此世でも御一諸の癖に――。みわは死ぬのは恐い、如な悲しい事が有つても死許りは否と云ふ、誰の頬を見ても姉様の頬程美しいのはない、幸福な人は皆から美しいのでせうか。私だつて其は女だもの、何もわざと髪も結ず、紅もさゝずに居るのぢやないけれど――。されど！私の思ふ只一人の人は拙い運命に泣いて死を待つと云ふのだもの――。堅く手を握り合て行くのなら眞暗な洞の中迄も諸共に！其は本望だけれど！だつてあの若しやもし結んだ手が離れて獨前後も知れぬ暗闇に迷つたら――！。あゝ其時は――！私の思ふ人と云つても其はまだ眉の端も見た事はないんだもの――。暗い洞の中ではぐれて了へばもう其限り。生れる時にも獨てきたのだから五十年の生涯のよし長くとも寂しく共獨て行けぬ筈はない、其に女は幾度生れ變つても矢張女だと云ふもの――。幾度か〳〵生れ變る内にはきつと〳〵！よしや七度でも八度でも少女に生れきては柳さん！と夢にのみ知る熱い御手に抱れて互の瞳のあふ時の來る迄は長い〳〵路をもきつと〳〵獨て行きませう。ゆきますとも！

其だのに何の涙が此なに流れるのだらう？噫！私がさうして幾代も〳〵まつて居る間に若や柳と云ふ此幼い小女の名をお忘れになつたら――。否お忘れはなく共其二人は互の夢の外には聲も知らねば瞳も知らないのだ物――。ふとしたゆきずりに互に思ひつゝも知らずに過て了つても――其限り永劫にまつても〳〵結ばれる縁となつたら…‥!!と思ふと私は悲しくつてもう涙がとめどもなく落てきますもの――！



（地賞）　停車場の花賣り　佐野良子

多情多恨の文字、女性の心情を披瀝して餘す所なし、文體の上でも幾度か繰返されたやうだが、人の變る毎に文字の度も變る、勿論眞の情から發した聲であらう、つまり感じが鋭くなり、多方面になり、複雑してきたのだ（評）

○雲居る日

四谷　河野槇子

微かに顫へてゐるやうな柔かい日の光に照らされては、あらゆるすべてのものがみんな懐しく見える、しづかな秋の晝てございます。奥の八疊てお母樣は、燃ゆるやうな緋綸子の綾の糸をくゞつては、きらめく針の行く先にのみ心を泌らしていらつしやいます、私はその前にすはつて空を仰いてをりました。たつた今まで、雲母を撒きちらしたやうに、きら／＼光つてゐた小さい雲の群はどん／＼東の方へ走つて行きます。弱く儚きさがゆゑに、日にそむいて暗きに落ちて行くのてございませう、其の路は淋しいけれど、やがて優しい月の光に、其の冷たい額のおぼろに白う照らされる時、彼等は悲しいさだめもうち忘れて、幸ある我身よと、微笑むてせうに：。あゝもう行つてしまひました、つれなくも恐しい世に私をひとりのこして……。影なきあとをぢつとみつめてゐると、眸がみどりの中に溶入つてしまふやう、囚はれたる羈絆を脱れてしばし尊き詩歌の姿に酔ひ恍けました。しかしそれもゆめのま、急に何だか暗の手が身に迫るやうに覺え、身がすくんだと思ふうち、またすうつと明るくなつてものみなが浮き出たやうに輝きました。ふと見上げると恐ろしい鈍色の雲が、今頭の上を通つてをります。あゝいま、たまゆらをふと瞳にうつゝた灰色の寂しいものすごい國、それはこの雲の影てあつたのか……私は思はず面をおほひました。耳に入るのはたゞ二人のかすかな呼吸の音ばかり、今こそこんなしづかだけれど、次の瞬間！それはどんなに恐ろしいてせう。大嵐がくるかもしれません。絶えず動亂してゐる胸てすもの、空てすもの。鈍色の雲は羽を伸してふたゝび口を掩つてしまひました。私は思はずお母樣を呼びました。

大いに驚き、大いに怖れ、大いに叫ぶ、之れ若き人の常態である、凡て平氣になるのは若き血の涸れた證據である、大いに驚け、大いに怖れよ（評）

○はらから

紀伊　田中文子

三歳ちがひの三人姉妹、お父樣は軍人、男のお子の無いのが御不足。髪は稚兒まげに美しう紫の矢がすりに緋純子の帯立矢の字に結んだ姿は何う見ても氣高い優しい振袖を召してもよく似合ふお孃樣、妙ちやんと肩を打つと何あにと振りむく色白の面長、眉じりの長い鼻の高い憐れみの深そうな眼は阿母さまそつくり。例へば白百合の如な神々しさと云つても未だ年弱の十二歳てすもの、それは／＼氣立の溫和しい一度も妹達

をいぢめた事のない、それて居て學校の成績もよくお琴も中々お上手、七十歳に近い祖母樣は始終妙子、妙子と一番秘藏に遊ばすとか。

お姉樣の優しいのに引かへて活潑な千代子樣、九歳の割には大きい方で、濃い前髮を廣くとつてとき色のりぼんて結へ、殘りは後へたらして、ばらの模樣の更紗ちりめんの筒袖に紫の袴みじかう、丸顏てぱつちりと大きい眼、言つきのはつきりとした、恰度櫻の如な心地の好い、誰にでも好かれるあつさりとした氣質、それに聲のいゝ事つたら、唱歌などは大のお上手、隨分とお轉婆さんてすがお姉樣にだけは極く神妙になさるとは又面白い。

末の綾江さんは何と云つても未だやつと六歳の幼稚なけさ、白百合や櫻に對しては紅桃の如な趣、小紅入りの友仙にとき色ちりめんのしごきだらりと、髮はまだかぶきり、人なつこい眼つきの可愛いゝ誰にでもすがりついて甘へて、私お父樣やお母樣のお留守に一人てねましたと自慢話。

何れも可愛い人達の末は何んなにおなりなさるやら。

三人姉妹の姿と心だてを描いて、繪よりも美し、實に美文の名に背かぬ優しい作（評）

○校の音

山梨　井上笹波女

秋の空は果てなく高く澄んで其靑い下をちぎれ〳〵の白い雲がとんで行く。あの雲は何處迄行くのだらう！廣々とした運動場の外垣にそえる芝生に立つて私はそれを眺めて居る。紫紺の袴の裾には小輪の白や黄の野菊が亂れ咲いて淋しそうな蝶が其上に羽を休めて居る。此頃の癖で何事も感じ安い私は何だか急に悲しくなつた。胸の中の暗い不安の影は果てしなく廣がつて涙は頰を傳ふ。雲の行へに涙を流す私はあゝ何にあこがれて居るのだらう、この胸の高鳴りを自ら何とも覺り得ず人に傳へもせずに逝いて仕舞ふのではあるまいか？胸に双手を當てゝ底の響きを聞かうとした。

ふと目の前をかすめてボールが草原に落ちたと思ふ間もなく跡には珍らしく色の白い宮田と云ふ子が勢よく駈けて來た。「先生、ボールが來ませんでしたか？」「そらその草の中に……」一聲の曇つて居るのを知つてか、宮田は私の顏を不思議さうに見たが直ぐ微笑して元の庭へ駈け出した。嗚呼可愛き子等よ!!　教師としてこの校に赴任してより三年の間、少しも私の意に反かずによく信じよくなついて呉れたのはあの子等てある。此頃のやうに冷い思ひを胸に抱いて居る時も亂れて居やうとは露知らず何のへだてもなく「先生先生」と云つて袴にまつはり袂にすがるのてある。彼等のためとならば此處に老ひてこの地の土になつてもと思つたのも一二度てはなかつた。けれど近頃の私は外に何物をか……あゝ生の意義とはそも何ものであらう！

一時でもいゝ物思はぬ身になつて見たい。あの幼い時代が懐しい。懐しいと思つて耳をすますとバットの音は何時か止んで淋しい運動場の彼方、距つたゝ家から枯葉の木の間を傳つて梭の音が風のまに／＼聞へて來る。虫が鳴かうが花が咲かうが何の感じも思ひもなく晝となく夜となく機械的に手足を動かして、つらいとの愁ひも不平も云はで、○○○○○○この淋しい田舍に滿足して老ひ行かうとする年若い機織る小女の上を思つて私は心から羨ましいと思つた。杼のとぶに混つて優しい歌の聲もする。其餘韻の微かに耳に殘つた時私は「天與の自覺」とでも云ふべき大なる聲に呼び覺されたやうな氣がしてつと身を反らした。オゝそれよ天の啓示!!白き雲は依然として東に亂れとぶ。秋の日は何時の間にか暮れやうとして草原では蟋蟀が鳴き初めた。

近代人の卒

○暮色

麻布　森とよ子

日が暮れやうとしてゐる。灰色の暗い影が次第に四邊を籠めて來る。妾は弟と共に門の外へ出た。人が通る車が通る、夕暮れの町は雜閙を極めてゐる。

「姉さん。」と弟は言つた。妾は他の事を考へて默つてゐた。「姉さん、……僕はねえ、此の賑かな社會の裏面に、何か暗い影が潜んでるやうな氣がして仕方がないんだ。」妾は然うかも知れないと幽かに考へて又も他の事を思つてゐた。弟も淋しさうに空を仰いでゐる。西の空には秋の雲がフンハリと赤く輝いてゐる、妾は何んといふ事なしに弟の方を向いた、弟は矢張り空を仰いでゐる。空と境の森や林や山や家は皆暗灰色を帶びてゐる。妾は淋しい感じがして來た。唯譯もなく無暗に淋しくなつた。

「正男さん、あなた淋しかなくつて?」「僕?」「エゝ、さう何んとなく胸の迫るやうな淋しみを感じなくつて?」弟は暫く考へてゐたが、「淋しいといふよりは悲しいんだ、涙の出ない悲しみなんですよ。」としんみり言つた。妾も然うだと思つた。空は益々暗くなる。二人は家に向つて足を動かし初めた。

急に横から男が出て來て。身長の高い、神經質らしく眼のドンヨリした、そして顏色は青よりも灰がゝつてゐる。着物も褪めて灰色してゐる。「灰色の男」といふ念が頭に起つた。「灰色の男」は弟と妾の間を通り拔けて行つた。暗黑は間もなく彼を隱した。「社會の敗北者か?」と弟は淋しげに呟いた。妾は暗い暗い心になつた灰色は廢滅の色である。死の色である。「灰色の男」は廢滅の男!……死の男!……妾は愕然とした。死の冷い悲慘な手が最う自分の直ぐ後方に接近してゐるやうな……後腦から脊中にかけて氷で冷すやうな鋭い刺激を感じた。……身内がぞつとした。

恐らく最新式のものであらう、これ位ゐ新しい人の言ひさうな事をのみ込んで書くものは少いが、なほ一脈の感情を缺く。（評）

○雨後

神田 英子

雨上りの朝だつた。いやに空氣が濕つぽい樣なので、又好きな香を焚いた。ゆらくと上る、煙りの白いのが、何處ともなく消ゑて仕舞ふと、又跡から上つて來て、又消ゑてしまう。：「姉樣．．．．萩が澤山咲いてよ、少し切りませうか。」．．．．美いさんだ。障子を明けると、白萩のみだれて咲く、間に、美いさんの姿が目立つ、



（入賞）登校　三重縣 加藤つたえ

派手な矢絣りの御召に金茶の帶。ふつくらとした束髪に、かざした勝色のリボンが、何となくけば／＼しいやうに思はれて、黒ずんだ我姿をながめては、之れでも一つ違ひの姉妹かと、何となく太息した。美いさんは、手に餘る程切て來て笑ひ乍ら、「露が冷たいのね」と云ふ。「人の心もそうね」と、つい云つて仕舞つた。が、美いさんは聞ゑぬのか、凹地の水溜りに、萩の散つて居る邊りを見て

居た。私美いさんは、おこつて居るのかと思つて、氣遣ひ乍ら、「萩が水に散つたの美麗ね」と云へば、「江戸裙にしたら宜いわ」と云ふ。「まあそんな事考へてたの。」びつくりすると、もう美いさんはだまつて、空を見つめて居た。私は其時、あゝ美いさんは普通の女ではないと思つた。此夕、運命の神の冷たい笞に、打たれ樣とは。……何時かは此の家に、惡魔のあざ笑ふ時が、來はすまいかと思つた事も度々だつたが。……それても矢張り、別世界の事かなどの樣に、見きゝした人の世の、情ない運命が、あゝけふ、我が身にまわり初めやうとは、知らなかつた。美いさんは、殆ど失神したやうになつて、涙もこぼさなかつた。現在の境遇さへ不足だつた美いさんは、華やかな上流社會の生活が、理想だつた。伯父樣が、「どうせ女だもの、なあにうまく行きやあ馬車にだつて乗れるさ」とおつしやつた時、私は思はず耳をおほふたのであつた。可哀さうに美いさんは、何にも知らない。何不自由ない奥樣の、袖のもみうちにも、にじむ涙のあるのを、知らないんでせうよ。つらい生活に追はれても、人に何と云はれても、かうして母さまと二人、苦しみも悲しみも、共にわかつて、――あゝ不足はない。月が入つた。あゝ美いさんは、矢張り彼の星の樣なひとみに、明るい美しい光を見て、居るでせうか？

少し透徹しない、但し、初めの書き出しは甚だ好い(評)

○母さんのお留守

吉村玉子

私は天にも地にも只一人の母さんと、丁度凪のなぎた海のよう、しづかに／＼に暮して居ります、人樣が御覧遊ばしたら、さぞつまらないと思ひでせうが、私は又いつまでも／＼このまゝて居られゝば世の中の寶と云ふ寶などは一ッもほしくありません。

今日は珍らしく暫くぶりて、私が少さい時うちに居た富やが新栗を澤山もつて來てくれました、あゝあの富やがうちに居た時分は面白かつたつけ、店の健次のお母さんが來て私と弟と二人上野へ連れていつてくれたり、長藏の兄さんの編輯局へ出ていたのが來て、活動寫眞へつれていつてくれたり、又山王樣のお祭りて宅へもお師匠さんがいらしやいますから是非いらして下さい「これはお店の嬢ちやんてす」つてお師匠さんにその千代ちやんの奇麗な處をほめて頂き度いからなんて、がや／＼云つた人逹が、今ぢや見向いてもくれないんだもの、それだのに富や丈けは私ほんとに感心だと思ふ、今にをり／＼尋ねに來てくれて、私やかあさんをなぐさめてくれるんだもの、だから少し富やが來ないと、私さびしくつてしようがないの、そしてどうしたらう、もしや、病氣てもしてやしないかと思つて案じられる、あゝもう考へるのはよそう、それよりか母さん出がけに今日はお墓參り丈けてすぐかへつて來るよと仰しやつて入らしたから、この栗て美味しく栗の

御飯をたいて母さんおどろかして上げませうや……
……裏のお庭のゆづの木は御馳走に爲てもらいたさうに好い香を放つてゐる。

此文章は生れて初めて投書する爲に作つたと云ふ口上が添へてあつた、なる程幼い、幼いが少しも文字に囚はれてゐないて、言はふと思ふことが七八分まで出て居るのはなか〳〵感心だ(評)

○生

高知縣　横田貞子

水國の秋は閑けゆくまゝに、葦の枯葉が風にさゆらいて、絶えまなく哀愁の曲は自然のすべてより奏てられる時となつた。夜毎の海の響き寢覺の床に聽いて、我とわが身の寂寥を、はかなさを何に訴ふるともなく、たゞ泣くばかり。今宵も琴の浦ては、海の底をはげしうどよむ浪は、自分を呪ふが如くきこへる。

生れて二十、春はゆき秋はゆけども、病める身は日増しにつのる苦痛の痕！あはれ妾はこゝに生れてよりの病と、未來に守るべき孤獨の性！すぎ來し方をふり返り、未來を遠く思ひては、流石に生に對する苦悶がむら〳〵と起る。

病！孤獨！こは神様が妾に授けたまひし運命である。妾は生れぬさきに、すぐにすぐに病むべく孤獨たるべく神様から宣言されてゐたてあらう。

空想の劇しかつた靑春の時代はとうにすぎ去つて、今といふ今はたゞ、冷たい現實の風になやまされて、周圍のすべてより辛いさいなみを受けねばならぬ時期とはなつた。

生を樂しと思ふ者は幸福てある。妾にはどうしてもそれができない。同じ性を受けながら、人の妻とよばれ母とよばれて、平和な家庭をもつて、人生の眞を味つてゐる友を見るたびに、心の底から一時は叢慕心が起るけれど、そは束の間て、後は言ひしれぬ一種の嫉妬が、胸の奥の方て反抗の刄をひらめかす。なぜ女性の心はこれ程までも淺間しいてあらうと、かつては我と我が身を疑つたこともある。

人の世の底の底までもつき落されて、浮ぶせのない常闇の國を、さぐりさぐつて、岸あらばすがりつかんとする盲者のそれの如き妾は、病みては何の希望があらう。ただ父ぎみよ母君よ、不幸なる兒を二十年此の方そだてたまひし御恩はどうして忘られませう――、すべてを悲觀せる妾。苦悶せる妾。父はゝの愛情をそぞきて他に愛あるを知らぬ妾に、ひたすら暗から暗へ狹い道をたどりつゝ、光明てふ煌きに浴せねば、人の世に生れて何の意味かある。

寂しい秋の風はふけども、雨はふれども、たゞ生に對する一種の解けがたい疑問は、深く胸の奥にわだかまつて、消ゆるとはせぬ、

ふすま洩れきた夜風は、いとし身に泌む。戸の外では藤の實が、現實をあざけるやうな音て鳴てゐる。

文才に任せて人生の解決、未解決、或は女性の苦痛、煩悶などを訴ふるのは一種の危險を伴ふやうだ(評)

○鈴木先生の御逝去を聞きて

眞　砂　女

散り失せた花も亦來む春に逢ひますれば、一しほ色香まさつて咲き出ますものを、永久に歸り給はぬ君が御行末、塵の世を後に上りまし、師の君の御魂は、安らかて御座いませうけれど、とり殘された姉妹の涙の泉は遂に溢れて、君に手向けの水ともなりませう、あゝ人の世は、實にはかり難いものでは御座いませんか、師の君の御逝去も亦夢の樣で御座います、そも〳〵文壇が世に生れ出ましてから、幾春秋を經て來りましたてせうか、其間日に月に進歩發展して來りましたのも、全く記者諸先生の、御盡力によりますものを、あゝ此末たのもしき、境遇を一人外づれて、はてしもない、旅路におつきなさいますのですか、あゝ心憎い惡魔の振舞!!

師の君は僅に二十有七年におはすよし、何春秋に富んて居らつしやいます、私共姉妹の深き悲しみ、世のなげきも、ふり捨てゝ歸り給はぬのてせうか、あゝ……今宵しも、女子文壇十四號の十六ページ河井先生の御弔文や、鈴木先生の御肖像を拜見して、幾百の人が涙にむせんて居りませうか、理知らぬ私さへも、殊更哀れ深く、泣いて居りますものを……いてや後に殘つた私共は、文壇の爲に互に身體の健全をはかり、精神修養におこたりなく進んて、無き師の君が御魂を安らかに守り度と存じます。

あゝ今宵月白うさえてくまなきを、定めし君が御墓にも此同じ月影がやどつて居りませうに、あゝ淋しい月、やがて十月の十一日にもなります、此御肖像をまつりて心ばかりの御供物をさゝげまゐらせませう。

文章は巧みでないが、志は厚い、在天の靈、恐らくは欣んでうけん(評)

○舊渡守

下野　み　つ　葉

昔は一抱えもある巨な松が、五町の間兩側に並んて、晝猶ほ仄の暗く、其間に茅や蘆などの雜草が生ひ茂つて、腥い風にさら〳〵と葉摺の音がして、五十部の渡舟場といへば、淋しい恐しい塲所の一に數へられて居たのでありました。

此松並木の端れに、首切地藏といふのがあつて、其あたりを一帶に馬捨塲と呼んて居たのてす。

牛や馬の死んだのや、野倒れ死をした引受人のない、無緣佛を捨てる所て、昔は何處の村境ひにも、よくあつたものだそうてす。

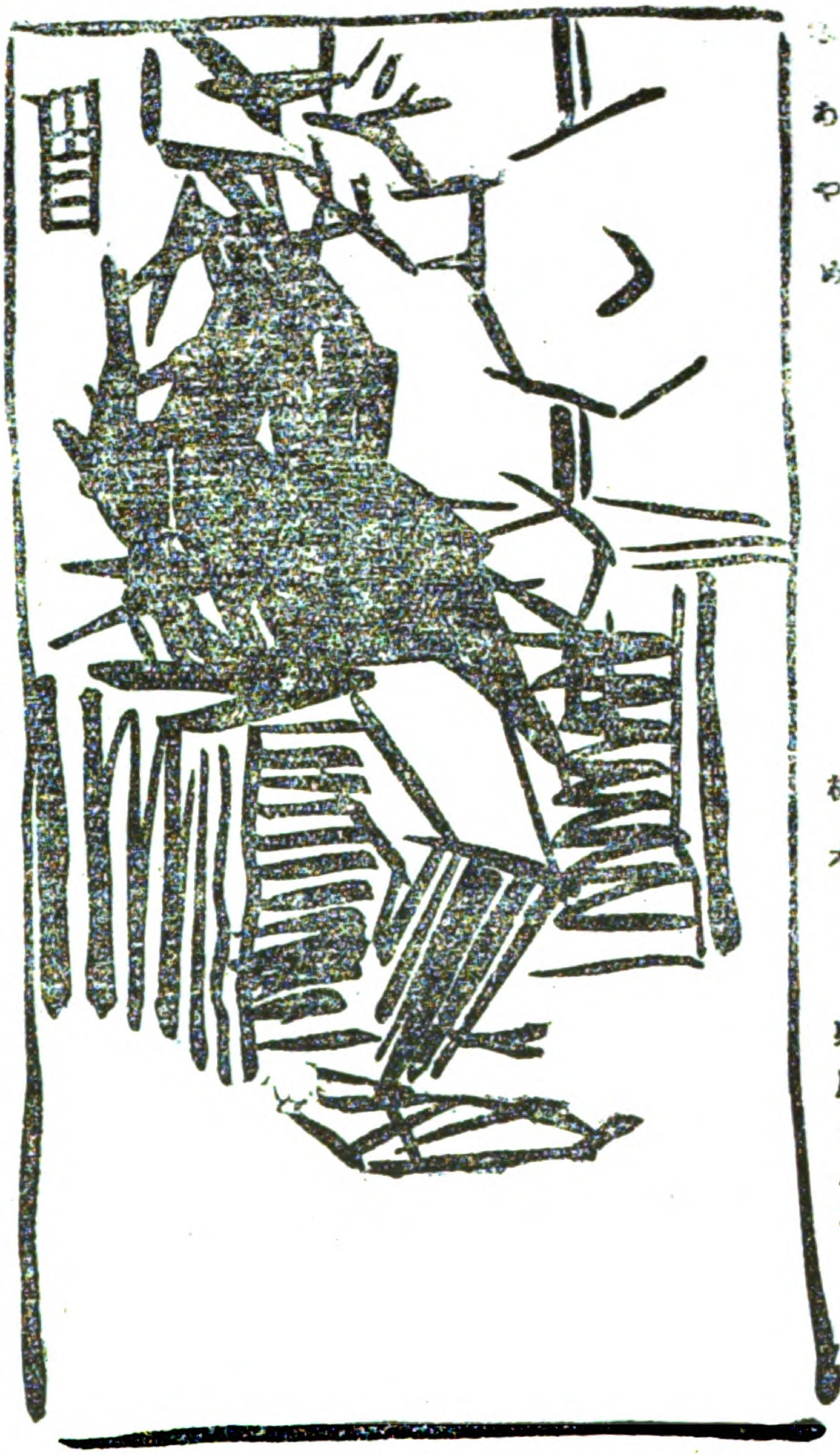
此馬捨塲の周圍は、一寸小高い丘になつて居て、楢や櫟などの雜木が、其處此處に疎らに繁て居る、傍には血の池と、里人が命名した小な池もあつたとか。

鳥の鋭い嘴に屠られて、鮮血のたく〳〵流露して居る

のや、半ば腐敗して紛々たる惡臭を放てるのが、草の中に轉て居て、雨の夜などには、折々燐火が燃えて、身の毛もよだつ程恐しい塲所です。

此處から前は石河原で、小一町進むと、渡良瀨の長江が愁人ならざるも、涙催す樣な哀しひ音を立て丶靜に流れて居ります、渡守は、六十あまりの老人で、一人の美しい娘と住んで居たそうです。色の白い上品な、年は十七八で、一寸人好きのする娘であつた。老人は稜々たる氣骨があつて、其で物言ひの莫迦に優しい、一僻あり氣な面魂であつた相な。

ある時は疳走つた鋭い聲で『鈴』と呼びつけにするかと思ふと、又或る時は帶まで縮めてくれて、ねんね扱ひもした時としは上座に娘を押し据へて「言ひ甲斐もなき此有樣、面目次第もござりません」などと氣狂ひ染みた眞似もしたとか。



あやめ

栃木 栗原とみ子

里人は彼等の身の上に就て深く研究した者はなかつたらしい別に何等の口碑も殘つて居ない。が、只一つ例の首切地藏へ雨が降ても風が吹いても屹度此老人と娘は人知れず詣てたのみ。何時の頃か、此父娘は不思議にも一葉の扁舟に掉さして、水の流れに托して泡沫の樣に消えて了つた相である、其後、渡舟塲は廢れ、洪水の度に地形は變じて、昔の松原は切り拂はれ、馬捨塲は桑畑と化したが、今も猶首切地藏は依然として、昔の秘密を包んで居る。

小說とすれば陳腐だが、事實談として聞くと多少の興が動く(評)

お伽噺

巖谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は乙種の規定に據る。

天

○永き眠り

大津市　内田八千代

今から約五百年ほど昔、或る王國に一人の女の御子が御生れになりました。御子が一人もありませんので、王様も皇后様も大層御喜びになり、今日は、その命名式でございました。

御殿は、今日は殊に美しうて、それに集られた多くの人々も、皆嬉しげに見えました、皇后様は、其御子を御抱きになり、御披露になりました、すると急に一人の美しい女神が其所へ、現れまして、

「十八の年になれば、悪魔のために、永き眠りに着くてあらう、それ故に、國中に糸繰器械を皆毀して、見せてはならぬ。」

とて、消えてしまひました。

王様はじめ、皆々は半ば喜び、半ば悲しみなされ、王様は、遂に、國中に令を出して、糸繰器械を皆一所に集めて燒いてしまひました。

年月のたつに隨つて、王様や皇后様の愛も、増して來まして、漸く十八の御年に御なりなさいました。

或日、御側の者が、御姫様の所へ、手紙を持つて參りました、御姫様は、何氣なく御讀みになりましたが、急に氣狂ひの様になりなさいました、これと云ふのも皆悪魔の業でありました、御附きの人々も仕方がありません、御姫様は、遂に御居間を出て行かれました。此御殿は、大層廣いもので、四方一里、城の様になつて居ります、此事が王様に知れました、王様は、大層お驚きになりまして、兵士をやつて、探させられました、御姫様は、だんだんと此御殿をお上りになりまして、天守閣の近く迄おいてになりました。すると一人の者が切に、糸繰器械で糸を繰つて居ります、御姫様はこれを取り上げて、御自分で器械を使つて御覧なさいました、此所に糸を繰つて居ましたのは、かの悪魔でありまして、遂に、此御姫様を、永き眠りにつけたのてありました。そこへ上つて來たのが、兵士であります、お附きの者に化けた悪魔から、永き眠につきなさ

れたと聞きまして、大に驚き、お抱き申して此御姫様の御居間へ連れて参りました。王様も皇后様も大層悲まれ、此御殿の文武百官も皆そのまゝ永き眠につきました、そこへ又女神が現れまして

「此姫は、悪魔の糸繰器械のために、百年の永き眠に着いたのである。」

とて、消えてしまひました。間もなく、王様も、皇后様も、御かくれになりました。

＊　＊

百年の月日は、夢の様に過ぎて、こゝに隣國の王子がありました大層旅行好きでありまして、此御殿の側を、馬で御通りになりました。すると白髪の老人が居りま



すので、此御殿の事を、尋ねられました、老人は「私は神の使で、此宮を守つて居る者である。」と云つて、詳く其話をしました、王子は、之をお聞きになり、直ぐに馬から下り、此御殿へ入りかゝりました、御殿は、荒れ果てゝ、草が繁つて居ますが、さすが内は立派であります、そして此大御殿に、一つとして、物音はしません、王子はだんだん深く入られました。此御殿の番兵達は、劒をぬいた者も、立つて居る者も皆、そのまゝ永き眠りに、ついて居ります、愈奥深く進みますと、殊に美しい所へ、入りました、見ますと其所には、かの老人から聞いた

御姫樣が永き眠について居ます、王子は側へ行かれて、御姫樣をお起しなさいました、御姫樣は、漸く百年の永き眠から、お覺めになり、此御殿の番兵も皆覺めました。王子は御姫樣に、その來た理由をお話になりました。すると、又、かの女神が現れまして、二人の手をつなぎ、此に目出度く、御婚約が成りまして、王子は此國の王樣となり、此御殿は、もとの樣に、立派になり、此國は、益榮えました。めでたし〱。

（評）今回のは西洋種が多くて何となく飜譯臭くありましたが本篇の如きは先づ傑作と認めらるゝものでせう

地　○月の妃

熊本市　近野春子

昔、波斯の國に、サロダンと云ふ王樣が居られました性質勇猛なお方でしたが、惜しい事には、大變短氣で一寸とした事にても立腹されると、前後の考もなく、非常に亂暴な事をなさるのが常でした。

或る年の事、不圖した事から、隣國との戰爭が起りました。よく世間で云ふ通り、强將の下に弱卒無しとても申すのでしよう。到る所、連戰連勝、戰つては破り攻めては降し、遂う、向ふの都に攻め入つて、終には敵の王樣を擒にして了ひました。サロダン王の欣喜はほんに譬へ樣もありませんでした。

ところが、愈々明日は凱旋と云ふ晩に、さしも、嚴重に押し籠めてあつた、敵の王樣が、突然逃出されました。さあ失策つたと、サロダン王を始めとして、上下血眼になつて探しましたけど、天にかくれたのか、地にひそんだのか、どうしても分明りません。たゞ、いつも御飯の給仕をして居た、十七八の娘の子が、助け出したと云ふ事だけが知れましたから、では、先づ其娘を引つ捕へよと、四方に手分けしましたが、結局、骨折損て、更に行衛が分りません。今しも一人の將校と見へる奴が、御前に出て何か申上げていますと、サロダン王はさも腹立たし相に、聲まで慳貪に、「何に？まだ分らぬ？おのれ惡いは十七八の娘、よし此上は、此國中の娘共を、一人も殘さず搦め取つて、殺して了へ」。と聞くも恐ろしい、命令をなさいました。さあ其からは見當り次第、女と云ふ女の子は、一人も殘さず引捕へられて殺されますので、斬られ乍らに、泣き苦しむ聲が、一日も絕へませんでした。

茲にサロダン王のお妃は、ミズロー樣とて、非常に情深いお方で、今度一緒に、陣中にいらせられたが、陣

も無い乙女の、毎日無慘〳〵殺されるのを御覽になつて、淚を流して、王樣を御諫になりました。至誠は石をも動かすものですが、惡魔の樣な心になつて居られる王樣には、優しいお妃の御言葉も耳にはは入りませんて、却つて大變お怒りになつて「これ〳〵家來共、今日は乃公が成敗の手本をして見せるんだ。さあ妃を縛つて了へ。」と尻込する家來共を白眼み付けて、御庭の眞中の十字架に縊り上げさせ、手づから長鎗を引つ提げて、スックと身構へなさいました。餘りの事に、連る家臣一同、身じろぎもせず、息を殺して、中には、顏色さへ、失つている者もありました。

さて、其時のお妃の御心持は、どんなでしたらう。嘸恐くつて悲しかつた事でしよう。が健氣な御妃は、別に女々しう取り亂したる樣子も無く、觀念の眼と口とを堅く閉ぢて、次第に血の氣のなくなつて行く眞白い片頬に、冷たい笑を湛へつ。無心の風は、輕く妃の裳を動かすのです。

態てサロダン王は一歩進んて、一突と身構へなさいました。すると不思議やな、今迄晴れ渡りし天日、俄かに黒雲に蔽る丶と思ふ間もなく、天地も崩る丶樣な物凄い響がすると同時に、十字架の邊から、眩ゆい計りの光明がさして、莞爾した御妃の姿は、獨りでに、漸〳〵天に昇つて御出てになりまして、程無く元の如な立派な御天氣になりました。ハッと氣付いて、家來共が見廻しますると、さても奇怪、十字架等は跡方も無くなり、たゞ王樣が齒を食ひしばつて倒れて居られましたのです。そこで、家來共も色々介抱に手を盡しましたけど、王樣は遂々甦りなさいませんでしたが、あの慘酷い王樣が死くなつたと云ふので、國中の者共の喜びは大變なものでした。

これは勿論遠き昔の事乍ら、波斯の國では、今も尚、毎月十五夜の明月を拜んでは、ミズロー樣〳〵と、色々御供物なんかして敬ひます。これはミズロー御妃が平常から「一生の願ひは、あんな奇麗な、お月樣になつて見度ひ〳〵」と仰しやつて居らつした計りか、恰度天にお昇りなさつたのが、月の十五日の事なので、必然あの奇麗な優し相な御月樣は、疑もなくミズロー樣に相違は無いと、千萬年の後迄も、數多の人の爲に貴き犧牲となつて御かくれになつたミズロー樣の、御慈愛や御恩德を、幾久しく稱へるのです。

ほんに御月樣の光は、長へに彌增る事てしよう。（完）

（評）作者のお伽噺述作に熱心なるは毎度感服する所です、此稿恰も活動寫眞を見る心地がしました。

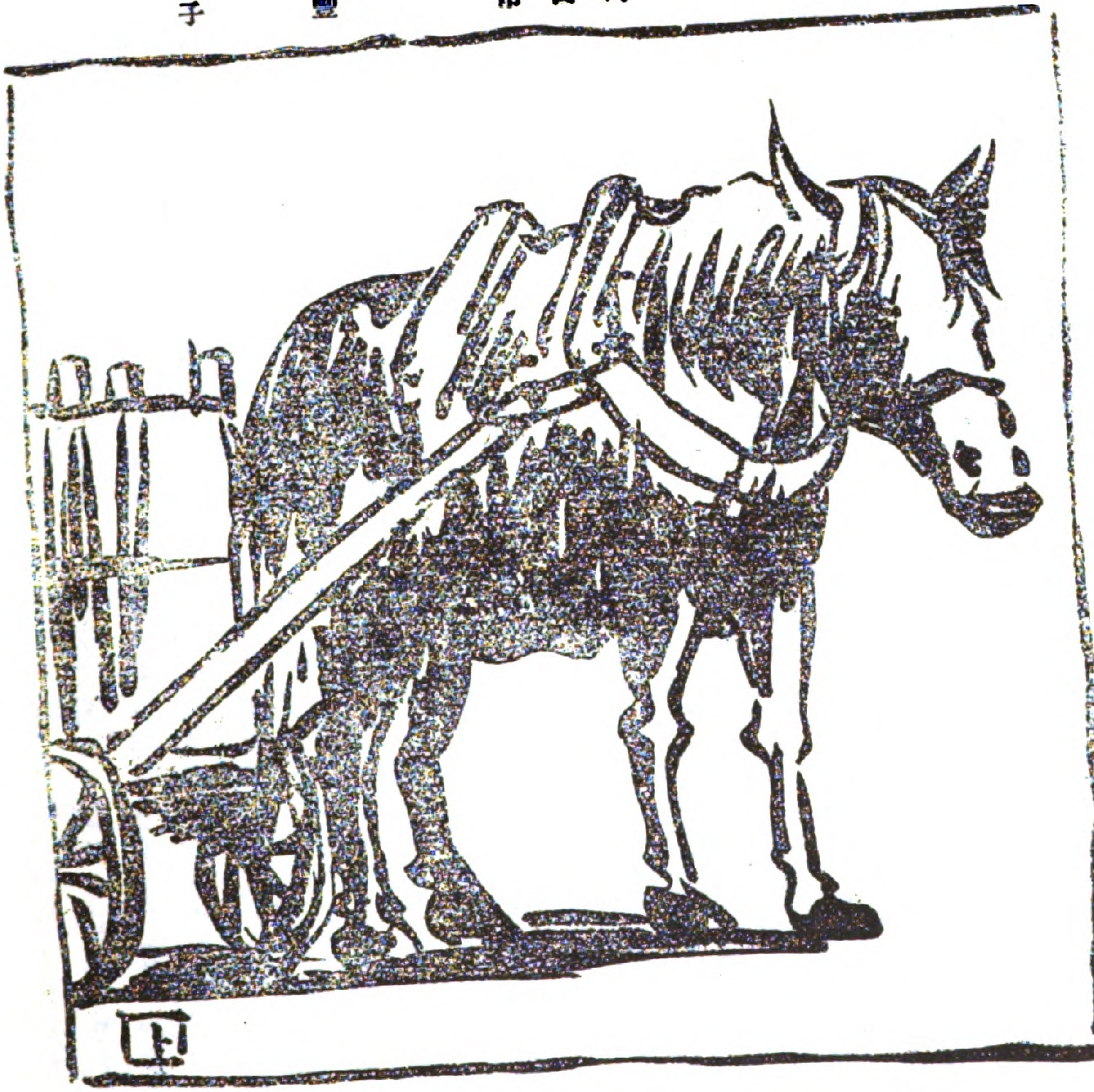
人

○黄金の編針

京都　さくら

或貧しい家に衣子という可愛い少女がありました。お母様と二人シャツを編んで正直に暮して居ました。或日の事衣子は毎日の様に針を動かしてシャツを編んで居ますと「衣子やシャツが編めたら一寸お見せ」とお母様が言ふので「ハイ」と見せますとお母様は俄に恐ろしい顔をして「此なシャツが何

馬　岡山市　豊子



の役に立つ。お前の様な者は不要んからさあ出てお出て出てお出て」と追ひ出して終いました。可哀相に衣子はしほ〳〵と家を出て「ア、何時も優しいお母様が何故彼様に怒り成被たんてしやう。是からは如何したら可いてしやう」と日の暮れた田舎道を西へ〳〵と辿ってゆくのでした。悲しさと寂しさに小さ胸を痛めつゝ、來るともなく來たのは或寂しい山の中。斯る

處に人の來るとも覺へぬに向ふから美しい女が一人步いて來ます。衣子を見ると莞爾々々として「衣子や先刻から待つて居た。さあ今宵は妾の家て宿めて上げ樣！」と早や先に立つて行く。桃色衣の色鮮かなのを身につけて、金剛石の指輪のきら／＼輝く白い手を上げて何か言いますと、向ふから一臺の黒塗馬車をひいた馬丁が來ました。

此の婦人は余程尊い身分の方と見えるのに、大變親切にしてくれますから、衣子も譯は分らぬ乍ら馬車に乘つて一所にゆきますと、或立派な御殿に着きました。

此の御殿は王樣のお城てす。前のお妃は大變優しいお方てしたが、惜しい事には二年前に亡くなられて、直に居被つたが今のお妃。實は魔神の娘なのてすが美しい女に化けてゐるのてす。そして前のお妃の忘れがたみの王子を殺さう／＼と思つて、色々考へてとうとうこんな事を考へ出しました。

それは魔法を編み込んだシャツを着せて、殺して終はうと考へたのてあります。併し其の裁縫師に困つて色々探してゐますと、衣子というシャツを上手に編む少女のある事を知り、わざとお母樣を怒らしておいて自分がわざ／＼迎へに行つたのてありました。

何も知らぬ衣子は此の恐ろしい役目を言ひつかつて如何に驚いたてしやう。併しもう斯なつては仕方がない。お妃から渡された桃色の絹糸を取り上げたが、如何して之が出來樣とぼんやり考へ込んてゐると、何處からかサッと金色の光が射して、水色の衣を裾長う引いた氣高い婦人が現はれました。而して優しい聲て「衣子や此の編針て編んておくれ！何卒妾等を助けて下さいよ！」と言つたかと思ふと其の儘消えてなくなりました。後には衣子の小な膝に黃金の編針がある許り…………

衣子は不思儀に思いつゝも一生懸命になつて、黃金の針て王子のシャツを編みました。編み上げてお妃に渡すと大變喜びまして、其の翌日王子の部屋を何食はぬ顏て訪れました。折柄王樣は王子を相手に抱き上げたりして遊んて居被いました。

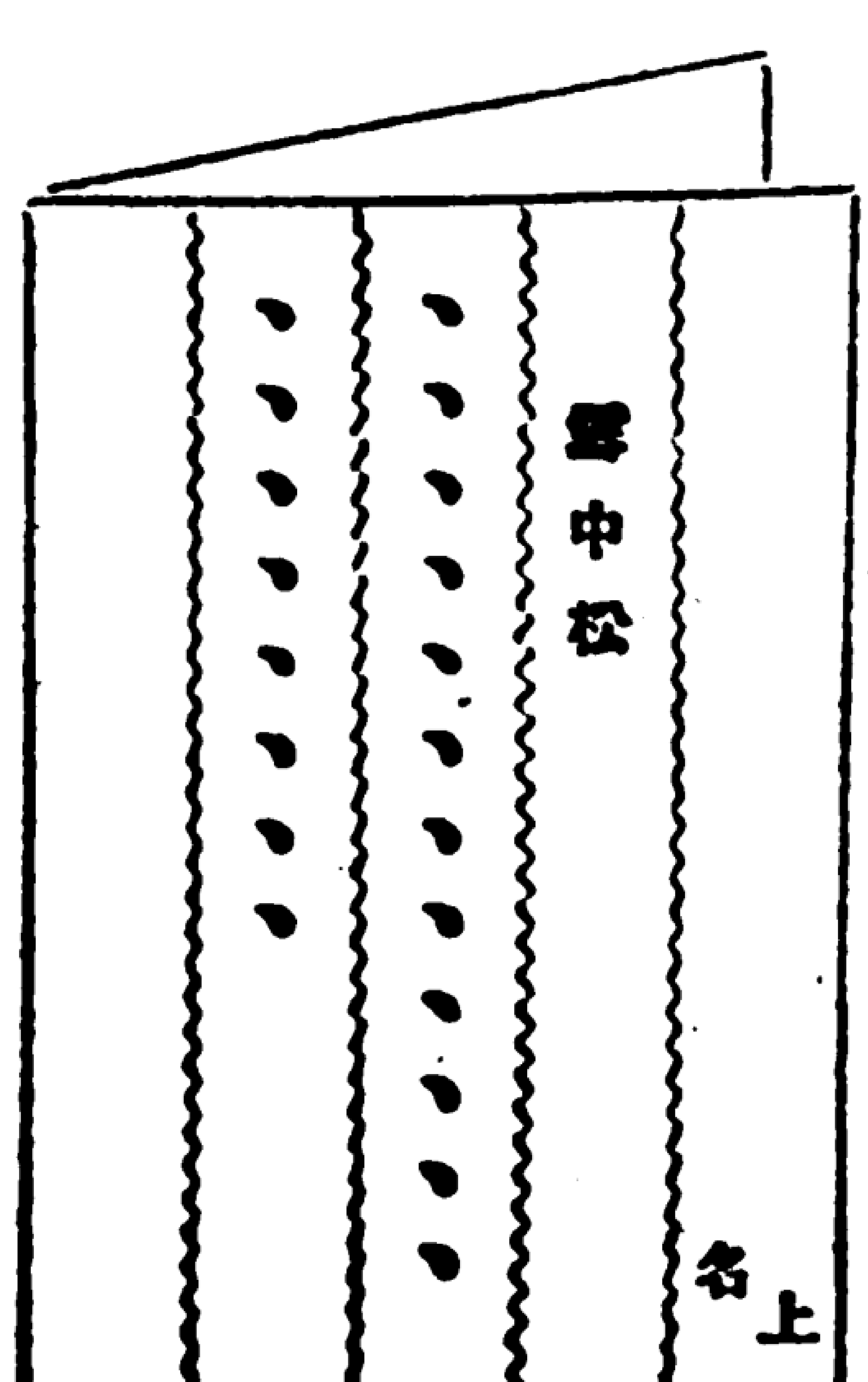
お妃は美しい顏に凄い笑みを浮べ「さあ此の新しいシャツを着せて上げましよう」と言つて表面は美しく飾つた桃色絹、内には針を包む此のシャツの、王子の玉の樣な肌に觸れたが最後、最早や命はなきものよと思ひつゝ着せました。

すると不思義や其のシャツからサッと金色の光を放

つたと思ふと、何處からか美しい婦人が現われました―…水色衣の裾長う引いた氣高い彼の姿――お妃の顔色はみる〳〵中に變つてバッタリ其處に倒れました。
「オヽお母様？」と計王子は婦人に抱きついた。
「おヽお懐しい我が君！可愛き王子よ！今こそ妾の運は開けた。――暫しは悔しさを忍びしが――嗚呼之も全く衣子のお陰……」今迄亡くなつたと計思つてゐた前のお妃が現はれたさへ不思議なのに、たゞならぬ此の場の有様に、王様は大變お驚きになつて「一體如何した譯か？」とお聞きになる。
「あの妃は實に恐ろしい女でございます。妾を殺したさへあるに、此の可愛い王子をも亡き者に仕様と致しました。けれど衣子が黄金の針て編んでくれた爲め、折角の魔法が解けて妾等の運も開けたのでございまと」いう中にお妃は凄い顔して立ち上り「あゝもう斯うなつては仕方がない」と我と我が手で咽喉をついて、其儘果てゝ終いました。
此處てすつかり譯が分つて王様は、衣子の功をほめお母様をも迎へにやり、一所に御殿に住わせました。最も此の時には惡い妃が死んでゐたので其の魔法も解け、前の如な優しいお母様になり、末長く衣子を可愛がりましたとさ。
（評）これも西洋種です。

○新年御題の書式

明治四十二年歌御會始御題は「雪中松」と仰出されたることは前號雜報所載の如くなるが今其詠進書式幷に期限等左の如し
料紙は、檀紙、奉書、杉原紙又は美濃紙を用ふ
詠進は一月十日までに宮内省御歌所へ差出すべし
但し一人一首に限る
堅詠草但し五ッ折



裏面書式　某府縣下某國某郡市某町村住　苗字名
官位勲功爵を有する者は苗字の上に記載すべし

注意
料紙は檀紙、奉書を用ひても其の大さ小奉書程より小なるをよしとす又美濃紙より小なるものは受理せられず
一人の作歌にして幾名を用ひ又は他人の名を借りて數首を詠進することを得ず

和歌

與謝野晶子先生選



◎規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は丙種に據る。

天

あはれなる人にもあるかかにかくにすくなからざる涙ながしつ

芝區中門前一ノ十一　長谷川靜枝

地

鈍衣のみ佛あまたくらがりにすゝりなくらむ晩秋の風

靜岡縣田方郡北狩野村浮橋六五　中村園枝

人

いやたかくきづくにあらずこぼれしをおぎなはむため土を運べり

讃岐高松市西通三九九　香川育江

秀逸

◎心もち常にかなしく白雲も花も紅葉も知らぬかごとし　朝子

◎亡き母のみ魂けぶりて出づるごと霧は匂ひ山の御墓に　下總　荒登代子

◎うらぶれの我をたゝせてひろ〳〵と野はひらけたり秋晴るゝ日よ　秋田　梅澤二三子

◎わが胸の狹き小さき片隅に宅あり君の心容るべく　筑後　梧桐智登子

◎すそめぐる音無川を朝くだる柴舟戀し花かざす人　若狹　山田小濱

◎掌に萩の白露そと受けて髮なでつけぬ少女子なれば　香川　西山かず子

◎嬉のみちたる夜を嬉の滿ちたる樣に灯のゆらぐかな　大阪　順子

◎野の菊は少女に似たりさゝやかによづかぬ人の面影　土佐　宮内白ばら

◎花瓦斯のいくつかゞやく大廣間その玉の夜に見初めてし人　和歌山　橋本貞子

◎わが手にていだきし小さき人のむねこのごろ冷といよに誠か　下總　椎名八重子

◎西方の天女のごとき雲見つゝ磯松原を君とあゆみぬ　廣島　田坂芳枝子

○心今君をおもひて病ぬ日の脈に浪打ち熱上りつゝ
　　山口　片村文子

○草ふかき里の小川のいさら水夜は螢のよる瀬なりけり
　　淺草　竹内けい子

○高き家にのぼれば遠くしろがねの一列隠す冬の山々
　　大坂　白瀬花子

○亡せし子とおなじ名の子をよぶ人の聲きゝてさへ涙こぼるゝ
　　佐賀縣　交野こはぎ

○嵯峨のおく尋れてこゝに來て見れば小督が庵に秋風ぞ吹く
　　京橋　植松誠子

○鬼の手に吾子取られしと見し夢のこわさに胸のとゞろき止まず
　　相摸　藤原下枝

○秋風は君がおん頰にいつか吹く今宵わが野をしのびれにゆく
　　上野　柳澤元子

○馬ひいて廣き野原を唯一人うた唄いつゝ遠き山見ろ
　　小池いち子

○秋雨の夜夜に君かうつし繪をそとかきいたき御名よひて見ぬ
　　日本橋　松岡千代子

○そこしらぬ沼の水の面たそかれてあしの葉かくれほたるとふなり
　　府下　町田竹子

○しづやかに憂愁は走る夕風のうみに浮べる帆のかたちして
　　巣鴨　片岡晶子

○わかれては胸に沁みけり相見たるそのときわかぬもの丶ひとつの
　　府下　小林しげ子

○宵／＼の枕になるゝ風なれど荻ふく聲にをとろかれぬる
　　福島縣　城取きよ子

○渦の香霞る窓の硝子のいきばみて夕映雲の紅に熔け入る
　　下總　若杉とり子

○嵐啼くすゝきお原の一つ松小枝に寒し冬の夜の月
　　越後　植田隆子

○そよ風はよき香つつみて嵯峨の宿花紅に夜明けぬるかな
　　牛込　高橋まつ子

○目閉づれば別れにし日の浮び來て小窓淋しき行く秋の雨
　　山口縣　里の人

○身一つに人の心を集めつゝ高れのかなた月さやかなり
　　靜岡　土橋なり

○打かへし汀に寄する波の音や月に輝やく安藝小宮士かな
　　吳市　百合野里子

○夢の間に千歲經にけん龜の子の尾こそ短き常世なりけれ
　　長門　弘中龍子

○紅葉散る奥の細道秋ふけて夕日淋しき明澤の山
　　秋田縣　高橋喜子

○七重八重霧立つ中にさをしかの聲のみ聞ゆみやまべの里
　　常陸　白百合

○思はじと思へばなほも思はれて燃ゆる如くにぬかほてるかな
　　神戸市　おちば子

○我が家の在りしあたりは野となりて小萩花咲き秋の蝶とぶ
　　大分　瀬々勝子

○秋風や白萩ちりぬはら／＼と師の君思ひ窓あけし時
　　熊本市　山崎くに子

○立上る里の烟のかたなびきくるるに近き村時雨かな
　　奈良縣　笑ふ女

○只ひとりなみにうつりてくたかるゝ由井ヶ濱邊の秋の夕月
　　京橋　野田菊笑

○仰げわが七寶燃ゆる彩雲の炎の中の戀のあらゝぎ
　　千葉縣　秋子

○大空の高きをのぞみひれ伏して秋の讃歌になく夕べかな
　　兵庫縣　鶴子

○朝夕のさみしきときは人しれず君がうつし繪とりいだし見る
　　若狹　小谷よろず

○琴の音もいつしか絶へて淋しくゝ虫の音細き白萩のまど
　　岡山縣　田野上かう子

選　與謝野晶子

○花散りて春行く空を眺めつゝきかまほしきは森の夢かも　　君代　五十嵐久眞子

○空高く雲飛ぶ毎に言増す峰の紅葉ははら／＼と舞ふ　　下野　須藤翠蘭

○うつら泣く野に夕日かけ物すごくひとり尾花の風にみたるゝ　　本所　田澤とめ子

○虫の音は秋の神ゆく御輦に鳴る鈴なりと母の云へぬ　　盛岡市　四戸節子

○雨晴れて傘かたげ行くよき人がなおき秋に紅葉散るかな　　山城　山岡季子

○いと靜に木の葉落散る庭の面を限なく照す秋の夜の月　　長野縣　丸山千代子

○三日月を木の間に懸けて物すごく風吹き荒く大那智の山　　和歌山縣　谷田峰子

○月さえて尾花が末の白露をてらす光もさむき夜半かな　　埼玉　尾花子

○すさまじき風雨のしてわが心を亂すに似る君の一言　　牛込　平塚白百合



○空ちかく月を友としつま琴をかなづる音に添へる松風　　仙臺市　宮城ゆふ子

○故郷の母やみませる知らせ來ぬもみぢちりしく夕暮のまど　　羽鳥とく子

○烏羽玉の闇をどろかす時鳥誰が亡き跡を戀ひしたふらむ　　大坂　河合加津子

○露ぐもりはれ行く山の日のかげのうす明るさや鳴く鳥の聲　　下野　登起子

○つとよりて君の御手をとる剎那胸は燃えけり赤き色して　　信濃　桂子

○あこがれて月にむかひてひく琴のしらべや空にすみのぼるらん　　靜岡縣　飛安久枝

○我胸の琴線にふれし君が手の調べつきせぬ相生の曲　　上總　森峰美

○あやなくも君が目にこそふれにけれ秋風なびく庭の白はぎ　　大阪　谷川百合子

○空ろなる胸充たすべく今日もまた大路に立ちて行く人を見る　　山梨　井上玉波

○　茨城縣　はる尼女
旅にいづと父のみ墓にまうづれば秋の日さむしすぎのしたかげ
○　長門　田中萃子
巫女やゝにわが面瞬り「君つひに劍に死なん人よ」といひぬ
○　大阪　四戸政江子
とはなれや戀しき君よあゝ吾れが髮のつやあせ面かはるとも
○　なしぐさ
今更に怨ごとは身につらしなみだ涸れしをなさけ冷えしを
○　紀伊　田中文子
思ひ出の心かゞみにうつしみぬ幼き昔こひしきまゝに
○　上毛　岩田やす子
月の夜に戀しき君を思ひいてそゞろ見入りぬ故鄕の空
○　麻布　住人
ぬば玉の夜半にも夢をさましたり子を守るせめの重きあまりに
○　信濃　赤津かずえ
朝まだき白露ふみて野を行けばあへかに香ふなでしこの花
○　若狹　瀧本なみ
朔の露はれて閑寂の香りしぬさめて瞭まく命婦もあらん
○　下之關　島田豐子
天地の八百千よろづの神々よ君とゞむべき術さづけてよ
○　若狹　田中良子
いく度か胸の焰にもたえつゝうき人呪ふ音羽の瀧に
○　相模國　山本ひろ子
初日の出うらゝ昇りぬ山上に改たまる世の天地を見る
○　磐城　齋藤くに子
遠き君思ひながらに夜はふけてかたぶく月に虫の音をきく
○　神戸市　松井たま
ゆくりなく夢に見えたる面影の消きを戀いて憧れ泣きぬ
○　中津町　やま川
夕ぐれの落影長く江にをちて舟の帆の水に横たふ
○　千葉縣　吉岡菊子
亞き事の積る身丈の年増せば振分髮の昔戀しき
○　茨城　佐賀道子
無き母のかたみの鏡とりいだし寫る姿は母ならねども
○　三重縣　川原みさを
梳づるそのぬけ髮に想あらむ庭の禁苑に雨そゝぐ朝
○　德島縣　西野ひさし
谷川に眉美くしき乙女子よ擣衣すゝぐ秋爽の朝
○　三重縣　宮崎田鶴子
うさとげてまとゐする夜は月さへていよ〳〵うれし我さとの秋
○　若狹國　吉野たき子
春の雨したゝる如き脈うちぬ大理石にゝしおん手をとれば
○　栃木縣　谷田貝哲子
君戀ひて庭の小隅に佇めば月に雲あり風の吹く
○　廣島縣　賀川みづ穂
鈴がずふる銀鈴の音のまぼろしのなかに鳴るごと秋の水ゆく
○　臺北　稗貫美津子
風吹きて窓のともしび影くらく白萩ちりてくるゝ秋かな
○　滋賀　絹貞子
賤の女や草花になひ市に出て人をよぶなり朝早くより
○　青森　掛端すぎ子
我が想ふ人にしあられど何となくめとるときゝて涙こぼるゝ
○　群馬縣　飯島溪韻子
秋の露ひくう流るゝ野の夕べ神の默示か鐘なり渡る
○　上毛　喜代子
風いたくすさみぬ波のしぶく岩つめたかる世の一人ぞ汝も
○　德島縣　野菫
眞空より强き雨してものみなは水にけむるる川つらの宿
○　熊本縣　釘崎さか江
母なかせ妹なかせ身は病みて二十の秋も今くれかゝる
○　能登　花葉
吾が戀の悶語りて慰めを得ん友もなく秋の日暮るゝ

○　熊本縣　高崎春江
あゝかくて思ひ亂るゝこの宵を村雨ぞすなる地球の上に
○　神戸市　萩原秋子
戀ひに涙するかや天宮は月暈ぞしぬ戀しき日かな
○　三河　天野てる子
彼の森に天の女神は宿りしかこがらし起る冬の調べよ
○　遠江　長岡芳子
月見つゝ蟲の音聞きて彷徨ひぬ訊ふつ風の寒き夜なれど
○　京都　細尾露子
暮ゆるう野寺の鐘は霧に消えて秋雨寒し夕ぐれの窓
○　三重縣　山村すみれ子
木枯の風ひたかよふたそがれを野の鐘空に高くひゞきぬ
○　大阪　高間もと子
果てもなき大平洋の荒波に人のみ名よぶわれは乙女子
○　伊豫　曉子
たのしげにほたんに遊ぶ蝶の身ぞとはにあらまし常おとめにて
○　靜岡縣　小長谷良子
風そよぐ利根の岸べに雁おりて舟一つかへる夕となりぬ
○　駿河　泉元子
ゆら〳〵と冷めたき霧の流れくる荻の下に水仙咲きぬ
○　常陸　金塚ひと子
涙頂に泣きしかの日の涙とも覺えて淋し秋の夜の雨
○　大阪市　辻廣子
振觀れば夕闇越えて遠き灯はわが胸さすとひたはしり來る
○　兵庫　杉山春翠
何となく見る人ごとに戀しくてほゝえまれぬる故里の道
○　蘇山子
戀ふる君いかなる夢やおとなひし病忘れて笑ひますかな
○　栃木縣　千葉奈津子
今の夜の月のひかりのさやかにて西より北にわたるかりがね
○　布哇　上土井定子
雲とけて谷の小川に水あふれ芳蘭の香のたつ日となりぬ
○　備前　鶴美子
白菊や君とうれしきおもひ出のかず〳〵ゑまむ神無月來ぬ
○　備前　江見愛子
よわき故なさけあまたに負ひ疲れのがれむおもひ道もとめけり
○　神奈川　小林英子
片足はきざはしにしてためらひぬ妙へなる調べかき消すも惜し
○　靜岡縣　野田早苗
夜なく〳〵夢に入りくる小さき蝶の魂と思ひて君を見るかな
○　大阪　紅女
源平の船の戰ひ忍ばるれ亂れ〳〵て散る萩見れば
○　上毛　岩田せき子
おもかげに見し御姿はたそがれて雲の彼方に消えつゝぞ行く
○　佐世保　鈴木結子
澄わたる月を眺てもの思ふ心はしるや鳴く虫のとも
○　甲斐　矢壽子
村時雨たゝける門の戸あくれば待ちかれしごと月は入り來ぬ
○　相模　鍋田美代子
のろはるゝ我もかからむ只一つ熟さぬ柿の音なく落ちぬ
○　美濃　村井かれ
秋の日を落葉掃きつゝ小女子と唄を歌ひて夕月を見ぬ
○　岩手　富士根小枝子
いと切になげきし後はおほらかに笑みてうけたり呪ひの毒矢
○　大阪　鈴木房子
一やうに老い給ひたる白髪人御堂につどひ禮拜すなる
○　横須賀市　登喜子
山を抜き谷を置つて行く人を呑まんとすなる木がらしの風
○　米澤市　釜屋まさ子
森の路なにか追はるゝ思してすくみ心にひた歩めども
○　大分縣　志手峯子
秋はれや柿の實赤う照る村に吾は君みてたゞちに戀ひぬ

和歌

夕暮の鐘にくれゆく秋の野やひかるゝ牛の遠く聲する
○ 宮崎　下川菊子
よき君よ何なればかく吾をのみ苦めたまひ微笑みて居る
○ 福井縣　片山千里
朝ぼらけあわたゞしくも蝶いくつ舞ひ出でにけり白萩むらを
○ 山口縣　吉田美代子
旅人の手さへ染むらん掬びゆく岩の清水にもみぢちるなり
○ 常陸　りう子
秋姫は野にまばら咲く秋草の寠れ姿に雨降らせけり
○ 福岡縣　白石靜子
栗の實の屋根うつ音に目さむれば我世顔なるこほろぎのふく
○ 黃　露
戀ゆへにものをにくみぬ夕風も砂の丘も白萩の野も
○ 滋賀縣　若井菊枝
うたがへばうたがふほどにそれかとも思ひてあらぬまぼろしをうむ
○ 美濃　飾島みゆき
病む人の黑髮ぬけて落つること秋の柳の病葉散るも
○ 京都　木俣津夜女
君故にわれはつかれず君故に我れは慰め得つゝ日送る
○ 下野　栗原くに子
夜を寒みれ覺めの床に衣打つ音こそ響け旅の身にして
○ 山梨縣　鹽田美津子
鐘の音は秋の梢を戰はして地に敷くが如と響き渡りぬ
○ 下野　瀧澤秀子
秋のくれ靜かに禪してばせを葉の破ぶれしかげにこほろぎの鳴く
○ 千葉縣　山本きかど女
公孫樹並なる御庭の燈籠に灯影も殘る朝月夜かな
○ 陸前　小野寺美津子
松が枝の露にかゝやく月影や秋涼しき秋かぜぞ吹く
○ 羽前　村井とく子
○ 信濃　駒澤ひろ子

夕雁の行衛はいづこ懷かしき君ます方へ啼きてゆくかも
○ 陸前　沼倉　幸
人思ふ昔なりせばよべの夢如何にかこちて今日暮しけむ
○ 上野　大沼染子
鐘きけば此の世を常に怨じたる幼なき戀の記憶もうかぶ
○ 長野縣　柳澤数子
秋の夜や去にける母を思ひてはいと疲れかれつ長夜と云ふに
○ 駿河　野木德子
駿河なる富士の片里秋たけて雁の聲などかなしかりけり
○ 福岡　菊の露
初秋の袷の袂うちふりて朝の野菊を見るがすがしも
○ 栃木縣　溪流子
くさむらに置く露さへもいと紫し枯野となりし古城のあたり
○ 小山しげ子
住みなれし古里去りてはる〴〵と東の空に秋の風吹く
○ 耶村坐子
面ふせてなげける少女にましろなる野菊ゆらぎて森は夜となる
○ 麻布　吉田花垣子
菊の園籬の香あびてさまよひぬ初めて君と相見し月夜
○ 南豐　藤の家瑠璃子
詫び住の窓の庭月さえてなくくよ外山にさたしかの聲
○ 群馬縣　藤橋君代
捨られしわらし小靴にしろ〳〵霜見えて馬車はせくるも秋の朝まち
○ 駿河　山縣梅園
有明の月の光におく霜の白かりぬべしふる里の橋
○ 出雲　久和子
雪洞の薄き光の菊の園振袖きたる七少女かな
○ 奧市　碓井済區
思ふまじ嗚呼思はじと思へども面影みれば又おもふわれ
○ 福井縣　北利子
窓押せば海原渡るのほとりの百千鳥いとたのしげにさへづるなれど

○　宮崎　日野
朝の月つめたき君のみこころのさまに匂へり秋草の原

○　日向　水村　豊子
大淀の夜の流れはほろほろと月かげてらす水盤の面

○　日向　河野　ほしみ
五重ほどかされたまへるおん襟のおもかげにして菊しろく咲く

○　長崎　江副　女子
たそがれの、沖の方より歸りくる帆のなき小舟神の乘らずや

○　仙臺　古川　廣子
永劫に咲く花はなきかに吾一人戀に惱煩れありぬ二十を

○　大坂　土橋　仙花
月をあび森の小道に立すめば何處ともなく笛の音のする

○　粟　水
百ゝ草の一つ緑も色褪めて次々枯るるさびしき廣野

○　大隅　石崎　芳子
戀人と手を取りながら語らばや人なきこゝに此の月を見て

○　大坂府　金田　香雲子
去年の秋別れし君のたよりなし今は何處のたが手によるや

○　下關市　島田　豊子
待ちわびて相見る折のうれしきもわかれ思へはかなしかりけり



咬日

青森　松尾ちよ子

○　近江　金田　花香
よすがら學びの文の友なりやわが庵近く鳴く虫の音に

○　京都　猟いく子

たそがれの空高うして狙せまき工夫長屋に黄菊の咲きぬ

○　兵庫縣　檀きみ子

月しろうしらぎくかをる窓によりて物思ふとき雁なきわたる

○　山城國　吉川磯子

秋虫よ今宵は泣くな泣けばきく聞けば亡き母偲ばるゝ故

○　西多摩　田中ます子

あな戀しあなあな戀し君が家の垣根のもとの白百合の花

○　大阪　近藤ます子

眞砂路に紅葉散るなりやよや此島の島守り朝清めずな

○　相模　野島里子

淡き影と白き落花と鳴くむしと冷たき風とわくら葉とわれ

○　静岡縣　済子

思へよと虫の音にそり月すみぬ君の御ゆめはこよひ如何にや

○　秋田縣　萩原とよ子

いざ來ませ涼風わたるわが里へ天の川みる板橋ゝ上

○　茨城　初澤きく子

誰が採る山葡萄の子の蔓引いて筑波小女は霧に唄ひぬ

○　山口縣　深山露

憂き事も樂しきことも語らひし友に別れて秋のさびしき

○　越後　はな香

はら／＼と桐の一葉のおときゝぬもの悲はしく人思ふわれ

○　山口縣　萩てる子

奥山に千草取りにとふみわけし少女入りしなるかやこの白兎

○　千葉縣　平井まこと

晩秋や谷の眞澗に灯ともして古き琴ひく神もあるらむ

○　三河　鳥居ふさ子

くさ／＼の菊の白露ふみわけてこなたにくるは君にあらぬか

○　尾張　成田いし子

青葉こし新月見ゆる家の庭に湯浴る人の顔美しき

○　兵庫　新田嘉代

鳥なく森に夕日の影落ちてさびしくちりぬ秋草の花

○　横濱　蔭島あい子

まぼろしの影とも知らておひゆきぬ花野の露の霧の朝

○　豐後　さくら女

雁の啼く都の宿りの初聲は家にいませる親思はしむ

○　静岡縣　静山

けふもまたつらしと思ふ夏の日の夕がほ棚に風そよぎきぬ

○　下總　越川づれ子

人の手にすくひえられぬ病して我れは歩みぬ母のみ前に

○　千葉縣　關紅萩

朧々と風すさぶ窓の外は星の光の冴えにさえたり

○　入戸町　西村みや女

秋草の繁げれる中を唯一人我が想ふ子はうなだれてゆく

○　赤坂　藤崎里子

黒髮の一條ごとに冷玉のまろぶと秋の夜なれば思ふ

○　栃木縣　惠女

夕まぐれ松風さわぐ丘の上に海の白帆の數よみてゐぬ

○　大坂　田中禮子

究の神に取捨はれて我は唯闇てふ壁に悶死せむ

○　淺草　鏑木幸枝子

我は今語らふ人もなき夜をなぐさめんとや虫のこゑ／＼

○　濱田　小松原總子

いたづらに草のみ伸びてわが宿の庭に淋しき秋海棠よ

○　岩代　笠岡松江

夕鐘はいともさびしき音たてゝ母と里居の家にひびきぬ

○　熊本　中山ちふ子

遠の國に秋のみ神の袖ふれてこぼれぬるかなしら萩の花

○　肥後　愛甲辰子

秋こしと人はかこてど我嬉れし月よき國の夕暮をめづ

○　茨城縣　荒木利喜子

秋の夜の棕櫚の葉擦にうす寒き心地おぼえて庭をあゆみぬ

○美くしき立田の姫がみかざしの玉とかも見る秋の夜の月　大阪　貿島文子

○亡母に手向の菊も早や枯れて御墓邊白く初霜置きぬ　水戸上市　山田やす子

○わくら葉のはら／＼散りぬ秋の夜なひとり淋しく病むなる窓に　水戸市　北村花友

○たのまれぬ色と知りつゝ朝顔の露のひぬまをめでにけるかも　矢名

○いかなれば思ひたえにし君なるを問はず語りに名の出づるらん　熊本縣　茅會[illegible]子

○このもだへ誰に明さん術もなく今日まで過ぎぬ二十四の春　水戸　重子

○我なみたさとり給はぬ冷やけきみこゝろに似る初冬の風　大阪　田中れん子

○うぐひすのしばなくこゑに夢さめて窓押しやれば春の日さしぬ　矢名

○きり／＼す小夜きれ／＼に夢をなき小萩に雨ゝ野末の庵は　大坂市　花子

○虫籠を手にもつ君が振袖になよびて咲きぬ秋草の風　新潟縣　長谷川さき子

○いろ／＼の落花しとねにわれ借りておぼろ月夜な夢に入らばや　大坂市　よしの

○車井戸から／＼なりぬ秋霧の隅の方なるあけぼのゝ宿　岐阜縣　日野歌子

○秋の月すみ渡りたる田のくろに誰を待つらんかがしの若子　諏訪　加藤芳枝

○おく露にやどれる月のなつかしき夕ぐれに吹く萩の上風　高知　石川たけ子

○身ふるひぬ火となりやおて氷ける若き男の子のなを見し故　山城　八田文子

○虫の音に涙うかびぬ今夜また亡き人の影思ひうかべて　神戸　波多野松枝

○小夜しぐれ庭の木の葉におとづれてかなしき人の袂ぬらしぬ　香川　松江

○天地に二なき戀しきその人の聲に似たりあかつきの風　下総　梶山秋影女

○まなこ今静なるなでしこ見つめつゝ寂しき心否れとあはれむ　信濃　太田喜志子

○いまはたゞむくろのごときわれなるに何故長き黒髪ぞそも　下野國　梅澤百子

○一葉散り二葉こぼるゝ桐の葉よ世を秋風のさそふなりけり　長野　津金泣月

○今沈む秋の夕日を背にうけて遊子は歸りぬわかき妹がり　相模　山本文枝

○我似ずやするどき鞭に重傷負ひ夕暮野路になげく小羊　熊本市　宮崎幸枝

○すゞ風につれてきこゆる野の虫のこゑおもしろき夜そおはしけり　福岡縣　牛尾愛子

○今君を惡魔とよばん我が胸の玉をうばいて背きし人よ　伊豆　うてな

○風さむき深山のほこら今日も又人一人こず落葉にくれぬ　埼玉縣　岡本みどり子

○雲遠き古巣したひて五位鷺の鳴く音を聞けば古里戀し　山口縣　松根静枝子

○石に似し我心とも知りまさで戀ひ給へる人もありけり　根室　白露

○何故にやせしと君の問ひしときたゞ口ごもり涙おとしぬ　奈良縣　元林白[illegible]

○吹き送る風のあひだにきこゆなり御寺はいずこ秋の夕鐘　上田町　田村あい

○父逝きて見また逝きてわれひとり常世の秋にあひつゝぞある　鳥取市　上山八重子

短篇小說

小栗風葉先生選



▲規定　純潔清新なる短篇小說を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以内とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

天

○妹の煩悶

駿河清水港
向島編知方　泉元子

休暇になつたら直ぐにもと思つたのが、彼や此やと溜つた雜用に半月は過ぎて了つた。八月の十六日と云ふ朝、豐子は五年振て兄の住居を訪れた。兄は既に十年前師範學校を出て今は某る町の小學校に主席訓導を仕てゐるのである。豐子は此の春女子師範を出たので兄の郷里の小學校に勤めてゐる。

停車場から二十町許、熱く燒けた砂礫路に苦められた豐子は、赧く火照つた汗の顏を拭き〳〵、辛と探し當てた兄の住居、松原を前に控えて、背後に微な浪の音の聞える三軒續の眞中の格子を懷かしい想にそゝられる樣な氣持て開けた。

去年の秋產れた女の子を抱いた姉が、直ぐ出て來て迎へた。

『まア大變ご緩りでしたのね。もう毎日皆で待ち暮したのですよ。』

と、團扇を俯め、一本は自分が持つてバタ〳〵と、豐子の汗に鈍染んだ襟の邊を、側面から煽いだ。

次て兄も出て來た、

『尙と早く來るだらうと思つたのに、……阿母樣、丈夫かね？、お前も。』と勢の無い眼で妹を見た。

『え難有う、皆丈夫です。此方でもお變りなくつて？』

と云つて豐子は凝然と兄を見た。懷しさが胸に込みあげたのである。がその眼に映つた兄の樣子は、大變變つてゐた。

少い髯が、日陰の草のやうに弱々しく、耳の下から頤にかけて、二三本づゝ抱き合つた樣に伸びてゐる。頰骨が突き出て、どんよりと黃色く濁つた眼の睫毛が妙に喰付あつて、泣いた後の樣に慘々しく見える。神經衰弱とてもいふのかしらんと、豐子は思つた。

『兄樣、何樣かお惡いのぢやなくつて？』と訊いて見たが、『別に何處も惡か無い　何故な？』と兄は元氣の無い聲て云つて、茶を啜つてゐる。

『然う？、ても何だか……』を云ひかけたが、姉に氣を置いて默つて了ふ。

『餘りね、家の中に引込んで、本と首つ引きばかり爲てゐるもんですから、始終ゝ、はき〳〵しませんのよ。些とはお出なさいていふんですけれど、私の云ふ事なんか聞いても呉れませんから困つて了ふんですよ。』

と嫂は笑つて、

『如何です豊子さん、一凉みなすつたら、海へ行つてらつしやい。此からが丁度好いのですよ。』と午後三時頃の日脚を見上げて、再た團扇の風を送つた。

* * *

夕方豊子は、兄の机の上にあつた新刊の職員録をそ



つと見た。兄の學校には十二三人の職員がゐる。兄は其中の主席だが月給は廿と二十四圓であつた。

豊子は職員録を投げやつて突俯した。

自分は今年出た許りで十三圓しか貰つてゐないが、兄は既う十年になる。年歯から云つても三十五、それも男！だのに僅た……と思ふと既う泣きたくなつた。兄が師範を出た當時、子供であつた豊子は、兄は偉い人に爲つたと思つた。實際中等教育を受けた者は當時村に兄一人で、村中の若い男女は皆兄の偉くなつたのを羨んだ。其時の嬉しい想が今まで豊子の頭に新しく刻まれてゐた。それが今

圖らずも拭つた樣に消えて好い夢から醒めた時の樣に萎頓して終つた。何だか欺かれてゐた樣で口惜淚が頰を傳つた。恨めしくも思つた。

兄が恨めしいのでは無い。兄の境遇が恨めしいのである。引いては自分の境遇も然うで、就々小學敎員といふ者が可厭に爲つた。兄の出て來た其女子部に入れた時の狂喜は、今煩悶厭忌の果と爲つた。

可厭だ。元氣の無い兄の顏を見るのさへ可厭に爲つた。豐子は後半月遊ぶ意で來たのであつたが、急に翌朝歸り仕度に爲た。兄は呆氣にとられてゐた。娘は何か自分の仕た事でも氣に障つたのではないかと、眼を潤せて止めた。然ど豐子は遂々剛情張つて兄の住居を出た。

停車場で汽車を待つ間も、孑然と考へ込んでゐた。

「あら、川崎さんぢやなくつて？」と鹽瀨の袋に入れたバイオリンを下げた高襟な女が、不意に豐子の前に立つた。豐子は驚いて仰ぎ見た。

「あ、山梨さん？」と其眼は光つて、相手の姿を見あげ見下した。

「暫くてしたのね！　お珍らしい處で……貴女どちらへ？」と懷しさうにすり寄つて山梨さんが云ふ。

「一寸此地の親戚へ……、貴方は？」

「私、再た是から東京へ歸るのよ」と一寸白い齒を出して笑つた。丁度西行の汽車が來たので、豐子は挨拶もそこ／＼にして乘つた。

そして前よりも尙ほ頭を低く／＼垂れて、小學校時代の友、今は音樂學校に居る山梨さんの幸福な境遇と儚い日の下に産れた自分等兄弟の境遇とを、就々思ひ比べて、心臟が煮えくり反る樣に獨り苛々した。（完）

（評）兄の爲効無い境遇を見て、自分も兄と同じ敎育家にと志してゐた女子師範の生徒が、急に自分の前途を味氣無く思ふと云ふ筋、此女主人公が一步轉ずると物質界の虛榮に憧がれ、精神上の墮落に赴くのだ。是も現代女性の煩悶の一つだ。書振も相當に調つてゐる。

地　○一夜　　草村螢子

靜かに夜は更けたけれど、まだ宵のやうなこゝち。勝手では明るく燈をつけて、蜜柑を撰りわけてゐるのである。

折々つかふ鋏の音も、ころ／＼と板間を轉がる音も夜の靜かさに殘らず聞えてくるけれど、夢見ごゝちに机にもたれたお琰には、たゞ「蜜柑を撰りわけてゐる」と云ふ感じしか無かつた。折々娘らの笑聲に、はツと我に歸つては、また何時とはなしに夢見るやうな心

ちになる。

草色の机かけ、濃紅色の肱つき、美くしい葉書帖、眼の前にひらいた書物の白い頁、それらが乳色の洋燈の光に、ごた／＼と混つて、おぼろに眼に映るばかり南國の晩秋の夜は、暖かくまた靜かに更ける。

何事をも考へてゐないやうなお瑛の頭にも、ある一筋の連續した考へはつゞいてゐた。

「まだ／＼昔は、百人近くの撰子でして、何日も／＼かゝつた、何しろ今の大橋屋のあの山も、瀨戸屋のあれも我家のだつたのだから」と、さつき母が話した言葉を、お瑛はいかにも哀しく感じた。そして今も尙ほさうであつたなら――とすぐ考へた。そんなだつたら母も、自分の上京をすぐにも許して呉れるだらうにとも思つてみた。けれどもそれはもう考へてみるまでもないこと、お瑛は母を、哀れな人だと思つた。

お瑛の上京、それは久しい以前からの話である、女學校を卒業たら、すぐお瑛は上京するつもりでゐた、また出來るものと思つてゐた。

「東京へ出て勉强も好いが、金が要る」お瑛はこの「金がいる」と云ふ言葉に泣きたいほど哀しかつた。お瑛はさう云ふことは一寸も考へてゐなかつたのだ。

お瑛は母を哀れな人だと思つた。金のことを考へる母を哀れんだ。けれどそれでお瑛は滿足は出來なかつた。そして「それでも何卒か」とはお瑛には云へなかつた。母には物も云はぬやうにした、嫂にも笑顏を見せなくなつた、嫂の子も顧みなかつた。兄は無口、一家の中は冷めたくなつた。お瑛は氣の毒な思ひに堪られなくなつたけれど、それでも此方から折れて出ることはどうしても出來なかつた。

蜜柑摘にも勿論出なかつた。秋晴れの緣近く、裏の蜜柑山からうら／＼と聞えてくる歌を聞いてゐると、淚がとめどもなく流れる。

かたくなに、好物のその蜜柑も、皆と一緒には食べなかつた。蜜柑摘が初まつてから、皆は忙しく働き出して、お瑛は手を出さない所から、皆とは除物にされだした。お瑛のことは忘れられたやうになつた。摘子撰子で家内は賑やかになつた。

お瑛は腹立しくて堪らず、泣いた、淋しくもあつたどうしてゞも上京して見せる、誰が／＼母や兄の世話をうけるものかとも思つた。

また一頻り勝手では笑聲が起る。夜はもう十一時にも近からうか、風もない雨もよひてあらうとは思つた

か、障子を明けて見やうともせぬ。物憂くて、頰にかゝるほつれ毛も、うるさいとは意識しなかつた。寢やうとも思はなかつた。明るい洋燈の光をうけて艶やかに光る黄金色の蜜柑を山のやうに積んだ前に座つて、忙しく撰りわくる勝手の樣が浮んで來た。小さい時のことである。

『孃ちやんは防害るから、除いてお呉んな』と云はれるのにも構はず、みんなの中に這入つては、まぜかへして、仕舞には母の膝を枕にして眠つて了ふ。

お瑛はその昔がなつかしくつて堪らなくなつた。よく山へも出かけて行つた。お瑛は小さい自分の姿を思ひ浮べて、思はず微笑がわきのぼつて來た。

と、次の間で、寢てゐる兒のむつがる氣配がして、やがて嫂の這入つてゆくらしい。

「もう何時てせうなん」

添乳の嫂の、籠つた聲を聞いたとき、お瑛は、

「誰がお嫁などにゆくものか」

と呟やいて、顏を上げて、おくれ髮をかき上げた。

（評）世の憂苦勞を知らぬ少女の單純な胸に、我家の衰微を思うて一脈の哀愁を覺ゆる其心持や感じが、如何にも少女らしく出てゐる。結末の嫂の聲を聞いて、誰がお嫁などに行くものかと呟くのも面白い、緻つてゐる。

人 ○舊師

大阪　中野妙子

私は母校の門をくゞつた。もう時間後とて生徒は大方歸つたが、下げ髮の二三人とすれ違ひざま「それは靑木さんは田中先生の妹さんてすものねえ」とひやかし氣味、一人は『隨分よ』と輕くにらんでホヽヽと嬉しさうに笑つて過ぎて行く。

玄關に田中先生が入らした、お叩頭する『御變りありませんか』先生は被仰る『はい、相變りませず――』

『私は相變つたから寄り付かなかつたのかと思ひました』『左樣で御座いましたか』冷かに答へる。

先生の手に目を注いて『御寫眞てすか』『はあ、今生徒から貰つて』云つて見せて下さる。今すれ違つた娘だ

先生も相變らずやつて入被ると思つた。

『まあゆつくり遊んて被在い』づん〳〵敎員室に這入つておしまいになる。

姉妹とも思つて永久交際ふと約した先生の、あの冷やかな御振舞、ふと二年前を想ひ出した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

試驗の點調べて休業の時だつた。私は用が有つて學校に行つた、田中先生が矢張りこの玄關に被在つた。私

は嬉しさのあまり『先生』と叫んて飛び付いた。『お丶梅さん』とは被仰つたが稍迷惑らしい色を額に表はして被在つた。

私は田中先生の所謂デイヤーてあつたので、友達から田中先生の妹さん、花チャンなどいはれるのを、此上なく嬉しく感じて居た。其日も先生に會へるのを嬉しく思つて來たので用が濟んで歸る時だつた。玄關に立つて居たら、田中先生が歸るとて出て來られた。同級の松野さんを連れて。私は此時、ムラ〳〵と疑惑の心が涌いて、松野さんをキッと見た。先生は晴れやかな調子て『木村さんさよなら、木村さん』と力ある聲て笑ひながら被仰つた。其瞬間私は此上なき侮辱を與へられたやうに感じて、心の中では憤怒の焔が炎ゑたつた。其答をし得ないで先生と松野さんと肩を並べて行く、姿を見てハラ〳〵と悔やし泪を落した。其後文通もへつた。以前の如く、お可懐しいの、慕は



うしろ姿　淺草　幸枝子

しいのといつも嘗くけれど、心の中の疑惑は絶えなかつた。

卒業してからは全く先生熱もさめ果てゝ、極りきつた時候の挨拶を時々。

其後松野さんとは時々往復する。田中先生から御便りあつて？」と態と聞くと「貴方ぢやあるまいし」と云ふ

「まあそんなに勿體付けなくつたつて――」一寸なぶると、松野さんは美しい眉を落して、「實は此頃ちつとも御手紙下さらないの」と細い溜息。

以前は此人無くばと思つて不常も猜疑の眼をもて接して居た人から、こんな言葉を聞くと、何だか自分が勝利を得たやうな氣がした。

そしてまた自分を思つて、同情した。

聞けば、先生のディヤーの寫眞は、大きなブックに三冊もあると云ふ。

（評）選者などには珍しい取材である。女教師と女生徒間に斯ういふ一種の交情のある事は聞いてゐたが、女生の方の心持は是を見て畧ほ解する事を得た、面白い。筆もキビ／＼してゐて讀心地が好い。

秀逸

○姉と妹

羽後　菊地りう子

一昨年の秋に陸軍の大尉に嫁いて仙臺に行つてた悦子が今度夫の政治が旭川の聯隊本部付になつたので今月中には一緒にたゝなければならぬと云ふので、二十日の休暇をとつて夫と二人で酒田にある悦子の實家に二週間許り逗留する事となつた。旭川に行けばもう暫くはあへないといふ事で、酒田から二里許り離れた新堀村の農家に嫁いてた姉のお信も漸と一週間の暇を貰つて、今年三つになるお光といふ子を背におぶつて二里の道をてく／＼と歩いて來た。僅二里より離れては居ないけれどやかましい姑をもつたお信は實家に抔歸る事はめつたにない、其で來る時も今度は一週間ゆつくりと居て、久し振で悦ちやんとも世帶の苦しみ抔も語り合う、噫私の彼の節絲の袷、彼ももう柄は私にははてになつたし、どうせ置いても着ないから悦ちやんにやらう、其から縞モスの羽織、彼も入らないから抔と多くもない中から三四枚はてなのを撰り出して姑には內所でお光のおしめぶろ敷の中に包んでポタ／＼流れる汗を拭ひ乍ら大いいてふの木のある玄關前迄來るとそこに黑くぴか／＼した長ぐつと立派な表のついた、はてな女下駄とが揃へてあつた、お信は噫悦ちやんのだな、其ても仙臺抔は如何に奢る所か、私になんか下駄なんか見た事もないのにと思ひ乍ら、勝手の口

から入ると飯たき婆がにこ〳〵しておや新堀の奥様がござしたと奥へ走つて行つた。と今度は母が出て來て「おゝお信か、よく來た、丁度今は政治樣も宅に御出ての所だし、直ぐ座敷へ行つて御覧」といふ。お信には何故か政治樣も宅に御出の所だしが妙に胸に響いたが左程氣にもとめずにお光を背から下してずん〳〵六疊迄來るとドッと陽氣な笑聲が次の座敷から聞えた、相變らず悅ちやんは快活だと思ひ乍ら障子を開て入ると悅子が「おや！姉樣よく〳〵」と團扇など進め乍ら頭をさげる、「今度遠くに」と云ふのを直ひきとつて「ゑ旭川の方に、ても四日に行かれます物ね貴夫」といふと今迄だまつてた政治が「むゝおちきな、どうです姉樣いらつしやいませんか御一緒に實は悅の身躰が少し重くなつた物だから困つてるのですよ」「ハヽヽ」と笑ふのを悅子はわざとらしくにらんで「あら、ようござんすよそんな」。お信は此人がまあお腹が大いのかと驚き乍ら「さう、まあお目出度う、何はいつ？」「いやなうそはつかしーと袖て顔をかくすのを政治はまだ子供だと云ふ風に笑ひ乍ら立つて「おい、悅ちやん、僕其迄散步に行くからね、彼白の浴衣を出してくれんか」悅子は顔をしかめて「おや貴天お一人て？さう彼大かばんの中に有ますからね、勝手にお召し遊せ」と云ふ。お信は驚いた。私なんか云はない事迄先にして置ても叱られるのに——。間もなく着換へた政治は「姉樣一寸失禮、悅ちやん直歸るよ」と云つて出ていつた。と母が到來物だといふ梨をむいて來て「政治樣はどつかにお出てかへ、さあ悅ちやんおあがり、お信もさあおたべ」と云つて置いて「先刻は悅ちやん仙や花に迄あんなにして下すつてすまなかつたね」「否其の心許り姉樣明日お芝居に行きませんか」。と母が「お芝居、いゝねお信お前お供したらどうだい」と云ふ。お信はいくら大尉の奥樣だとて妹にお供杯とは母樣も餘りなと不快に思ひ乍らも温順い質丈に何氣なく「私餘り芝居は」と云ふと「噫姉樣はお好ぢやなかつた」とさも〳〵無趣味なと云ふ樣に苦笑た。其中に仙や花もぞろ〳〵入つて來て先は杯と、お信には何とも云はずに悅子の傍にひつついて居る、とお光が膝から離れて悅子の後に立つて美しい單帶を見て居る何とお行儀の惡いとひきよせ乍ら悅子の姿をみると髮はハイカラな廂に巾の廣いリボン、着物だつて如何しても十五六圓はしたかと思はれる見た事もない品。噫私杯嫁つてから五年になるが着物なんか一枚も買つた事もないのにとつ〳〵

思つた、而して私抔が嫁く時には只親の云ふ儘に嫁けと云はれた所に嫁つたが悦ちやん抔は、初から手紙のやり取をして居たとかで母抔は大變怒つて親でもない子でもないと云つたのを私が中てとりもつて漸々やつたものを――。其に、今と云へば！下女から母迄皆悦ちやんに許り妙につとめる。嗚何ても金さへあつて實家にてもどん〳〵つぎ込めば親から迄、つとめられる物か知ら、其なのなら私だつてもつといゝ所に嫁つたものを。嗚つまらない！とお信は來る時に樂しんで來た心がめちや〳〵になつて了つた。其から三日の間悦子は毎日々々見た事のないさは〳〵した着物をきて一時間もお化粧をする。お信は毎朝お光を背つたまゝ御飯の仕度を手傳ふ、其ても母に「お信悦ちやんや政治樣にお給事をしてね」抔と云はれる毎にこんな事して一週間も暮しても何の面白い事もない、それよりか早く歸つて夫の綿入ても縫はふとお信は四日目の朝。悦子のとめるのもきかずもつて來た節絲の袷や羽織抔も元の儘におしめふろ敷の中に入れてお光を背つて實家の門を出た時にはさすが寂しい妙な心地もしたが自分から、今度は實家に來たい〳〵とも餘り思はずに落ついて仕事が出來るだらうどうせもし實家は私の家ぢやないのだから抔としひて思ひ乍ら又スタ〳〵二里も歩いて「おゝ早いの」と珍しく笑顏の姑に迎へ入れられた其時からお信は自分の家はこゝ、眞實こゝより外にはないと思つた。

（評）妹思ひの姉が妹を訪れて行く、妹は自分より幸福であつて、實家の者にも自分よりチヤホヤ言はれる、それを見て急に不快になつて、妹も母も實家も皆もう自分の味方では無いと感ずる、如何にも有りさうな事だ。文章の蕪雜を恨む。

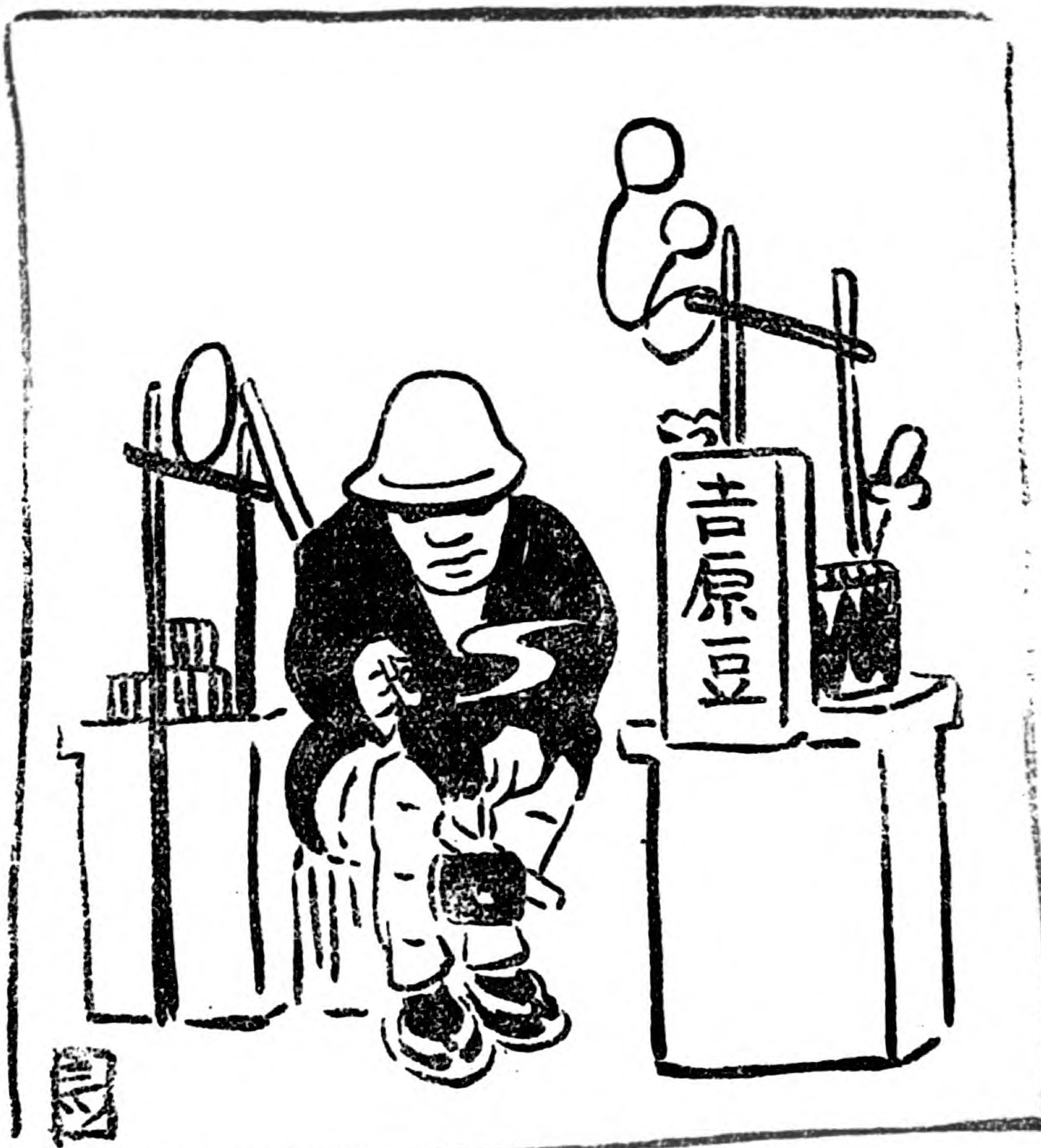
○秋晴れ

伊藤曉子

御主人を玄關に送られた滿子さんは、いそ〳〵と入つて來られ乍ら「さあ〳〵、ますみさん、こちらへ入らつしやいよ、夕方までは私達ちの世界ですから」さも氣がのんびりとしたと云はぬ計りに先立つて廻緣傳ひに導かれる。私はだまつてついて行つてすゝめらるゝまゝに坐についた。其處は四坪計りの庭に面した八疊の室、初秋の日が心よく椽先にさして、塀ぎはの紅芙蓉の花がポテリ〳〵と敷石の上や雪の下の葉の中に落ちて居る。町はづれてあるから極く閑靜で時折かすかな梭音がひゞいて來る計り。立ち上ると遙か南の嶺のうす紫に霞み渡つて居るのも塀ごしに見える。喧擾になれた私はもう夢の樣な心地て「本當に靜かなお住

居てす事。こんなだとお仕事なんぞは忘れて終う位てしよ」満子様の御手から生後一ヶ月になられぬ愛らしい赤ちゃんを受取り乍ら、かう云ふと「忘れるのか、どうか唯もう譯もなく日がたつて終ひますのよ、消極的な人間のお揃ひてすから、ホヽヽヽヽ」と淋しく笑はれて「主人もねえ、もう永遠にこヽて静養するんてすつて」（此家はつひ一ケ月計り前に成た新邸てある）憶か加壽子であつたか、私が満子さんから結婚のしらせ状を受とつた日

吉原豆　　淡城　　村方靜子



のあさ「その人はねえ、肺結核よ、金持ちのくせに慾ん坊てね、それに先の家内の形見子が一人あるんてすつて、満子さんては宜すぎるは、欲しい事よ」なんて忌々しげに語られた事があつたが私はどんなにか心細いてあらうと人しれず満子さんの今の境遇に同情して上げて居る。母なくて生ひ立つた満子さんは「悲しいけれども何事も運命てあるから服従せねばならぬと云つた風な考へをもつて何事にも堪えて來た。てあるから決して取みだ

した風などは親しい私にてさへ見せた事がなかつたが其心の中の苦しみを知る私は人一ばいの同情を持つて時折此家を訪れては語つたり語られたりして居る。私が女學校へ入學したのは恰度十五の春、隣りの机に居並ぶ滿子さんはもうとつて二十才の女ざかりであつた。光子樣は歌がお上手詩がお上手、未來は天晴一かどの女詩人にと自らもゆるし友も先生も許して居つたが周圍の事情は遂にそれを許さなかつた。唯一人の老父の安心の犠牲たるべく親戚のたれかれの說諭を容れて、卒業の翌年二十五の夏初めに此家の二度目の夫人として向へられたのである。私は滿子さんの終生獨身てと決心した理由をもよく知つて居る。滿子さんはその生母の最後の病氣が肺結核てあつたのを如何計り氣にして居たかしれぬ。それが今は同病にやせさらぼうた人の妻！ほんに悲慘の極てある。

やがて女中が茶を進めに來た。二人して赤ちやんを遊ばせ乍ら四方山の話しに餘念もない。ふと滿子さんは思ひ出した樣に「あのう增美さん、宮武さんは、如何して嫁らつしやらないの？」「でも私結婚なんて何だか氣が進まないもの」私は大變はづかしかつたけれどもつい思つたまゝを云つて終つた。「そうね、だけど何うせ一度は……」滿子さんは云ひかけて又思ひ直した樣に「それもそうだわね、私なんぞ父の爲めにと思つた當時こそ一種のほこりもあつたけれども年一年とつまらなくなつちまつて……ほんにね、處女時代はどんなにか樂しかつたでせう」しんみりと云つて御主人そつくりの赤ちやんの顏に眺め入られた。セルの單衣の上に秩父縞の羽織を引つかけた奥樣姿がいかにも上品に、しかも淋しく見受けられる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今年五つになつた白エプロンの謙ちやんは、片手におもちやの自轉車を持つてニコ〳〵と笑ひ乍ら入つて來た。「やあ北村の姉ちやんが」うれし相に云つてチヨンと頭を下げてお辭儀をする愛らしさ。椽側の柱をクルクルとまひ乍ら「僕北村姉ちやん大すきよ」などゝ云ふので、「そら、姉ちやんも謙ちやんが一番すきなの」と笑つて見せると默つて三日月の樣な眼して頰笑んで居たが、やがて滿子さんの方をふりかへつて、「おつかさん、僕北村の姉ちやんの子にならうや」「えゝおなりなさいとも赤ちやんも一しよにですよ」かう云ふと「それはいや」余り明瞭云ふので「何故」つて問ひ返して見た。

謙ちやんは顫えんだまゝ何も云はぬので、滿子さんが引きとつて「ホヽヽヽヽ下が出來て甘へられないものですからね、赤ちやんを他所へやるとか何うとか何時も云つてますの、惡氣は一寸もないんですけれどもね――この子も女だといゝと思つてましたけれども男でしたから今の内何處かへやつて終はうと思つてるんですよ」それから自分や赤ちやんに何は捨ておひても謙ちやんの爲めには代へられない事や、謙ちやんに對する苦しい心づかひなど、何時になくしんみりと語られた。

何れかと云へば弱みを見せるのが嫌いてあつた滿子さんも近頃はめつきり沈んで終はれた樣だ。あれ程の文才がありながら不幸に生ひ立つた人は不幸の中に埋れて終うのだらうか、それよりも悲しいけれども仕方がないと云つた樣な態度が一層哀れてあると、かう思つて居ると、ふと滿子さんはこんな話しはもう止そうと云つた風に、青い高い秋ばれの空を仰いて「オヽいゝお天氣何處かへ出かけたい樣ですね」

蜻蛉が高く低く庭中をとびまはつて紅芙蓉は依然ボチり〳〵と散りおちて居る。

（評）舊友の進まぬ結婚をした、其境遇と其心情とを思ひやると云ふのだが、どうも充分に出てゐない。謙ちやんと云ふのは先妻の子らしいが、それに對する心づかひと云ふものも、今少し切實に描いて欲しかつた。

○三面記者　実踐部　初澤さく子

安藤先生がお隣家へ下宿遊ばしたのは去年の暮て、お正月も最う五六日に迫つた寒い忙しい頃てした、田舍の小町とは申せ、目拔の塲所の狹苦しく、お隣家と妾宅の間は僅に雨落の溝があるのみて、窓と窓とは手が屆く位てありますから、お隣家へ下宿なすつた方があるとは其日の中に知りましたが、此町にある新聞の三面を受持つ安藤さんと申すとのみ、二ヶ月計りの間は其姿さへ能くは知らないて居りました。

以前は大抵開け放してありました丸窓が、其後は何時も閉め切られて、夕方になると窓障子にぼんやり洋燈の光がさして、本箱の影らしい黒い物が寫りますと低い冴へた讀書の聲が聞えますが、それが毎夜十一時頃まて續くのてした。

お隣家は私共と同じ此町の士族て、夫に先立れた五十近い叔母樣の一人暮し、小間物を商ふかたはら家が手廣いので、會社や銀行に勤める方を下宿させて居ります、初めからてはもう七八人も變つたてせうが、今度

のやうに勉強なさるお靜かな方はありませんと母も大層感心して居りました。

梅の花の咲き初めた頃でした、私は雨落しの隙間から流れ入る暖かい光を浴びて編物をして居りますと、珍らしくお隣家の窓から若い女の聲が洩れるのです、聞くとはなしに耳をそばだてると

「母もどんなに喜んで居りますか、最も人の來る度毎に新聞を振廻して居るので御座います、何も出來ませぬ私をあんなにお賞め下すつて、眞實に何と御禮を申上げて宜しいやら、是れはほんのお印までゞ御座いますが何卒お納めなすつて……」

「待つて下さい、貴女が其の、今日の新聞に書いた娘かゞみの御本人なのですな、それで御禮に出たと云ふのですか、それは甚だ迷惑です、僕は投書に因て書いた迄で何も御禮を受ける筈はありません、いやそんな物を戴いては僕の體面に關します」

「誠にお少いですが、折角何したのですからどうぞ……」

「贈呈の多少を言ふのではありません、僕は瘦せたりと雖も、其樣な物を貰はふと思つて筆は執らんです、何卒お持ち歸りを願ひたいものです」

其聲が凛々しくも亦高かつたので若い女は何れ改めてと稍々慌てゝ驚いたらしく歸つたやうでした。

私はそれ以來、其人格の優れてゐなさるに感心して折あらば何か敎へて戴かふと思つて、母にも其旨を話しましたが、幸ひに其家の叔母樣がとりなしてくれましたので、桃の花が綻び初めた頃、英語を敎へて戴くことになり、先生と呼ぶことになりました。

母に連れられて初めて奇麗な先生のお部屋に上つた時、お顏を泌々拜見した時、私は私の永い間相像してゐた先生と、目の前に微笑まれた先生とが、聊かの相違もないのに驚きました、瘦すぎた色の少しく靑い髮の毛の黑く長い、如何にも神經質らしい文士らしい、お顏付、早稻田大學文科の出身で今年廿五歲とは後に聞き知つたのでありますが、戲談も申されず、時偶淋しく微笑まれる位で、何となく威嚴のそなはつた、其くせ親切のお方で御座います。

新聞社の方は毎日十時出勤で遲くも五時にはお歸りでした、權門に恐れず、凡夫も卑まざる御性質で、友達なども自ら求めるのはお嫌ひと見え同僚の方々でさへ珍多にお見えになりません、併し先生は結句それが幸だとお云ひなすつて、朝夕公園を一週するの外は、

超然として讀書に餘念がないのです、私がナショナルの三から敎へて頂いて四も最う餘す所十頁許りになつた九月の初めです、先生は風邪の氣味だと打臥しましたが僅五日ばかりの間にめつきりやせ衰へて、平生てさへ細かつた手足は丸て糸のやう、私はいたく〱しさに幾度泣きましたか。

「綾さん、僕はあなたに感謝の辭がないてす、毎日同仕事をしてゐる同僚てさへ見舞に來てくれぬに手厚い毎日の御看護僕は忘れんてすよ………

……」

と其度毎に先生も泣くのてした。



繪　神戸　香園風

それから三日目病勢々重く、先生はいよ〱水戸在なる御實家に歸ることになりました、雲の多い朝、二等室の窓から青い顏を出して、

「綾さん、哀しべきは三面記者の境遇てすね、此町へ來て既に一年、自分から求めない爲とは云へ、貴孃より外一人の見送り人もないこの樣はどうてす、併し僕はあなた一人の知己に滿足して一日も早く全癒して歸ります」

沈痛にかう仰有つて微笑みを洩らされたとき、妾はうら悲しい思が胸に滿ちて泣かずには居られませんてした。

（評）此の作は小說と云ふものを始めて試みられた人のださうだが、それにしては好く出來てゐる。文章は癖が無く、此調子で進まれたら有望であらう。

○歸途

日本橋　三井陽子

私は社の仕事も漸う終えたので、小さな風呂敷包を抱え、草履を日和下駄に履き替へて、裏口から外へ出た。一日机に向つてペン計り動かしてゐる私の身には、此の夕暮の重い冷たい空氣を吸ひ、そして紅い々々夕日の空を仰ぐのが何よりの慰藉となるのである。

大通りへ出た時分にはもう街は薄暗くなつて、黑い人影が兩側の道をウヨ々々歩いて行く。私は煉瓦造りの洋館の横を右に折れて、大きな行燈に太い字で講談師の名を書き並べた寄席の前を通り　砂利の敷いた道を一町半程歩いて、店の明るい下駄屋の横を曲つた。

「一今ぉ歸りなの」と、角を曲るとイキナリ聲をかけられたので胸がドキッとした。それはお向ふの松井さんの奥さんであつた。君ちやんを伴れてゐる。

「どちらへ」と私が聞くと、「一寸、お湯へ行つて參ります」と柔しく言ふ。「そうですか、行つてゐらつしやい」と言つて二人は視線を合はせてニッコリした。

私はあの奥さんの事を思ひ出した。君ちやんは、奥さんの子でないと云ふ事は疾へに近所の人から聞いてゐた。けれ共奥さんは君ちやんを世間によくある繼子扱ひなどはした事なく、眞實の我子のやうに可愛がつてゐる。主人の松井さんは京橋の或る會社の書記をしてゐるとかである。瘦せた背の高い口數の少ない人である。私がいつも朝窓の障子を開けて掃除をしてゐると松井さんが格子を開けて社へ出て行く、其時一寸私の方を見て帽子を取つて丁寧にお辭儀をする。松井さんは洋服を着て出て行く事もあるが、大低和服を着て行くのが常である。松井さんの先の奥さんは、君ちやんの二ッの時亡なつたとかて、それから直ぐ今の奥さんを本郷邊から貰つたのだと云ふ事である。私はこんな事を頭に浮べ乍ら暗い町を歩いた。駄菓子屋の店前に、見知らぬ女が腰を掛けてゐる。そして力の無い眼を町の中へ向けてゐる。髮の毛のちゞれた、額の廣い、私は直ぐ房州邊の宿屋などにゐる女を思ひ出した。あの女もキット流れ流れて、こんな所へ來たのではないかと思つた。

醜い女は欠伸をした。私は無作法な無教育な女だと思つた。あれでも一箇の人間として生きてゐるのだと思つた時、私は何か知らず襲はれるやうな感じがした。藥屋と瀨戸物屋の間の横町へ曲つて五六間行くと、田中と瓦斯燈に書いた家から細い女の泣聲が聞える。たまに男のシンミリとした聲で何か言ふのが聞える。立聞きなどするのは惡いとは思つたが、つい女性のある一種の好奇心に引かされて、私は窓の傍へ寄つた。暫く聲も聞えなかつたが、急に女の聲で「貴方、あんまりだわッ」と言つて、唐紙をピシャンと荒々しい音をさせて、しめた。あとは沈默……。

私は事情は知らぬが、あの女の口振りて、女の嫉妬心と云ふ事が頭に閃いた。私は黑板塀に添つて歩いた。そして歩き乍らも女と云ふ者はどうしてこう弱いのだらう、と自分の境遇やあらゆる世の中の事を考へ出して、どうしても女は弱者だ、と叫んだ。格子を開けて「お母さん、只今」と私は言つた。

「大變けふは遲いんだねえ」と、奥からお母さんの聲がして、入口の障子に小さな丸髷の影が映つた。

（評）一種の寫生文である、小說としては統一が無い。而して「歸途」と云ふ感じは能く出てゐる。

日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以內、用紙前同斷、一人一章限り、投書締切毎月十五日、懸賞品は乙種規定に據る。

天　○下女日記

鳥取　上山八重子

十月十一日　日曜日　晴　朝露を踏んで水を汲みに行くと、脊戶のかたへの袖垣によろ〳〵と朝貌の末の花が見える。臺灣種とかて一時は旦那樣の御秘藏のそれであつたが、今はもう半ばかれて、葉かげの蕾は開きもえせずうなだれて居る。さらでだに短き花の命を此のまゝ萎ませんは何程か口惜しかろと、フーと妾が溫い息を吹き入れると、柔かい花瓣は靜かにゆらいで僅かに笑む、なか〳〵に哀れが深い。

十時過ぎ小春日の暖さを昨日故鄕の母よりよこせし新らしい袷の脊にうけつゝ、お孃樣の御供をして敎會に行つた。

午後、坊ちやまの御客樣五人、庭の苔ふみて其まゝ椽に上られるので、折角淸めた斗りの所に小犬のやうな足跡が點々、併しキャッ〳〵と笑ひさゞめいて樂しみに餘念なきお姿を見ると、そゞろ家に殘せし小さき兄弟が忍ばれて、今頃如何してと案じられる、先日送つてやつた鐵砲は破さずに持つて居るかしら、母の手傳をしなくとも邪魔にならないやう仲よく遊べかしなど思ふ。

夜、奧樣のお襦袢を仕立上げてさて虫の聲みだるゝ窓に二十分間程手習ひをする。お孃樣が時々お敎へ下さるのでおかげで手紙も人に賴まず書けるやうになつた、「お町坊は奉公に上つてから、エラ學問になつただ」と、與平爺が云ふとか故里のたより、禿筆かんで月にひとり笑まれる。

（評）わが家の弟を想起するあたり、感情深く、おのづと淚ぐまれぬ。

地　○事務員の一日

大坂　鈴木房子

十月一日　朝から職人風の人が澤山爲替をくみにくる、國に殘した妻や子に贈るのであらう、嬉しさに頰が輝いて居る、貯金も中々多い、いつもくる車夫が又預けに來た妾はこれらの人の貯金の增へて行くのが樂しみ、無趣味の仕事であるけれど、爲替を受取つた親や子の顏を想像したり、最多くの人の便利をはかる、大なる事業をして居るかと思ふと、嬉しくて仕方がない

九時に小包の一號便の取集めがきた、これから晝まで

は實に騒がしい、何係、々々、と云ふて澤山あるので
はなし、窓口二つの三等局だもの、「五圓出して下さい。」だの、「一寸爲替を。」のすきまなし。

午砲が鳴ると、ブー、、、。紡績の笛が聞える。

午後は暇なので、二葉亭さんの浮草を讀んだ、外國語の讀めぬものはこの先生が賴みてある、作の趣を味へるだけでも嬉しいと思ふ「國へ歸るのですから、皆出して下さい。」何處かの丁稚が通帳を出す、中島さんが、おきまり文句、活版刷にしときやよい。と仰有つておかしくなつた。

四時近くなる、中島さんは小包の數を呼んで被居る、窓の前には頭が幾つもならんだ、突然、「小包四時にまにあひますか。」と息せき乍ら尋ねる、「あひます。」と云ふと、忙しげに有難う、を幾度も繰返した、一しきり騒がしい、算盤や日附印の音に、爲替貯金係のまどは閉つて、五時過ぎには悉くかたづいた、澄んだ空に乳を流した雲が、黃金色に染めると早室内には灯がつく、裁判所から澤山書留郵便を持つてきて、受取は後程と歸つてしまつたしばらくはもとの騒しさに返る、お内から薄茶を下さる、せわしい中てゆつくりとかまへて茶をすゝるのも好いものてある。

書留は間もなくして了つて、七時の十四號便に渡した。妾の一日は斯して暮れた。

（評）永くかゝる心を以て凡ての事に當られよかし。

【人】

○日記の一節

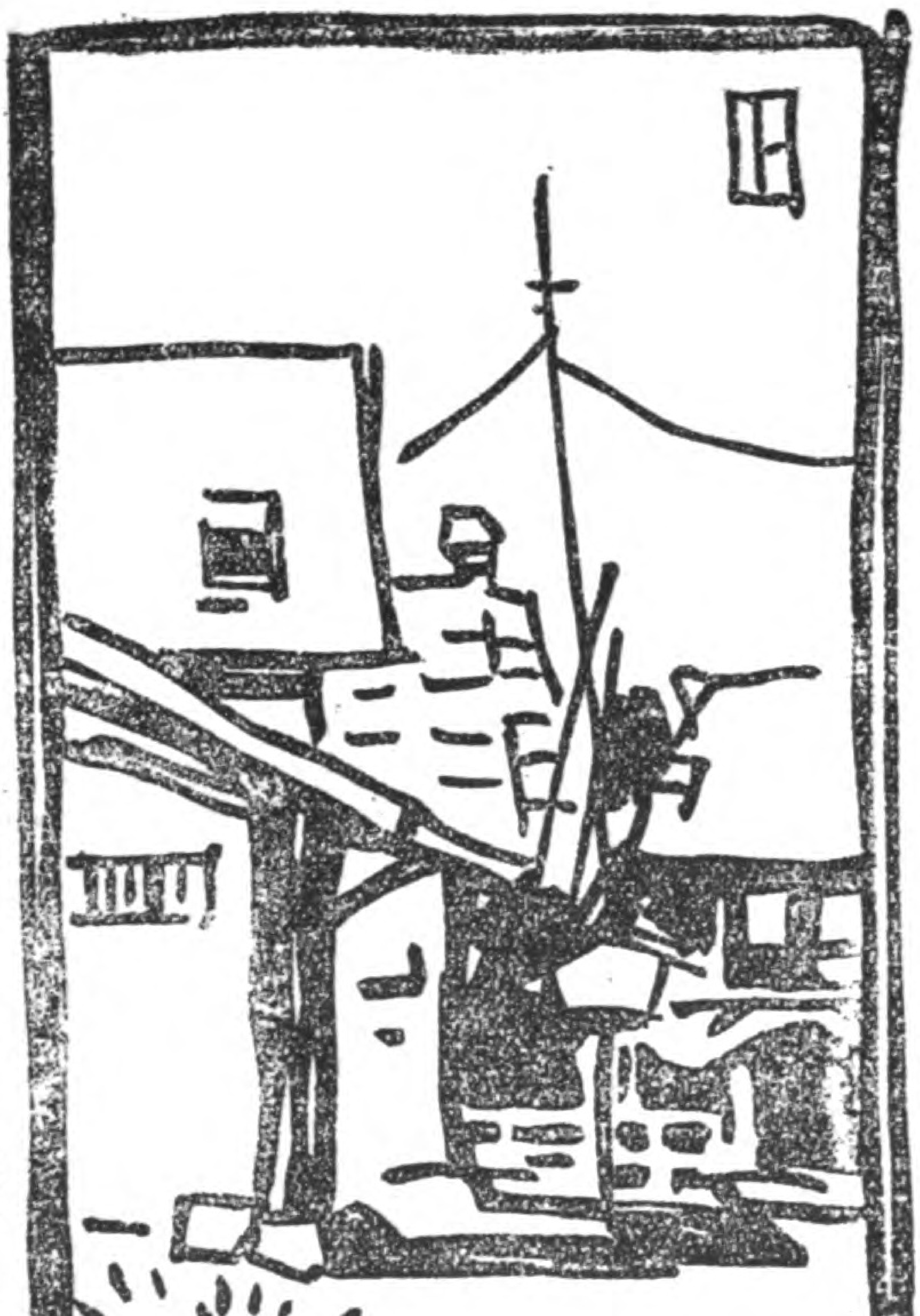
大阪市　波奈子

十月十日　ヤー鳴がと村童が騒立て居る蘆江の漣に夕日が沓いて、齒にいゝがと恍惚と見入つてゐた、釣瓶落しの日脚は容赦なく向ふの山の背に落ちて、夕鳥が寂しく啼出したので驚愕して歸る、長いお使だ事と、母樣が莞爾した。賑かな晩餐がすんで一時間もたつとブーン〳〵と糸繰の音が聞ゑる、もう婆やはかゝつたよ、さあと母樣がお仕事にかゝる、妾も針箱の蓋を開ける、と讀さしの女子文壇が突つ込んであつた、皺をのして一寸開いて見ると、甚ざつと眼を通して置いた美文欄が出たので、始めの一行を默讀と知らず〳〵眼路が進んでつい一頁もすぎ次の頁に亦瞳が据はる、母樣がクス〳〵お笑なさるのにはつと頭を擡げると、花ちやん亦持病が出ましたね、淸お醫者樣へ走つておくれと莞爾しながら針の手はずん〳〵動いて行く、呼ばれた下女が赤い臉を磨つてヘーと頓狂な聲を出す、瞳が縱橫に動いて居る、おや淸も病氣が出たねと、母樣は手を休めて一寸縫目を裏返して見る、淸がお嬢さんですかと五分間も過つてから枯聲を搾つた、思はずもおかしいので笑ふと母樣が一所になつてお笑なされる、笑はれた淸がぷり〳〵しながら針に糸を通す、澁い眼ては什麽しても通らないと見ゑて、譯の分らぬ事

を呟きながら時々盗眼をして居る、花ちやんどつちが早く綿が入るか競爭しましようよと、母樣は眼覺し時計を斷板の向ふぺりに置かれた妾もハアと負ん氣になつて縫ひ始める、三人が無言て縫物に親しむと、家の中は寂然閑として、伏戶から、弟や妹の寢息がもふお休みと洩れて來る、庭の千草にすだく虫の音が耳の底に澄切つて、時計のチクタクが長き夜を分秒に刻んて更けて行く、お淸は亦坐睡をはじめた、面白くお仕事が運んて、眞に心地のよい晩てあつた。

（評）心地よきはひとりその「夜」に限らずこの筆のはこびもまた。

町の一部　陸奥　立花とも



秀逸

○八月の日記より

小石川　三宅恒子

木の葉や敷石の濡れたるに雨かと點頭かるゝ計、細き〳〵雨なり。時樣よりみ文に、基樣嫁ぎ給ひしと。先頃迄テニスよセンタボールよと騷ぎませし君、我と同じき十八にて在すを早暖き父母の慈愛の翼より離れ給ひしかといたましう、浮世の海は浪荒しときくものを か弱き御性のよう漕ぎ分け給ふべきか？名を更ふるべきそは女の運命なりとや？かゝる時只運命に笑みて、我身をにえとしつゝ他の樂はかりなば……さはれはかなきは小女の行末ならずやは。優しき父母兄弟に別るべき寂しき日の我にはとはに〳〵來ずもがなとぞ祈らるゝ……夜、時樣に返し認む。出さゝぬ中は肩重き心地するに急ぎて……

（八月十三日）

朝まだきより蟬の歌かしまし。昨日に似げなき晴なり。今日は暑かるべし。赤きたすきに、姉樣かぶり、梧桐の葉影に日光さけて洗濯す。鏡の如く澄みし青空に雲の峯白雪頂きし山の姿さながらと仰ぐ間もなう、

しづれては夏野に笑める白百合の如く、分れ散りては牧場に草はむ小羊の群かとも見ゆるよ。奇しきは雲のたゝずまひかな。うつろひ安き世の様によくぞ似たりな—夕ゆあみし終へて今朝あらひし浴衣と更ふ。わけて心地よし。以後、何事にまれ、なし得る限自つとむる様心掛けなん。かゝる樂しき報あるものを…只手の皮すりむきしは例の兄の御口恐ろしければ隠して置く。月消し。わざと燈けせば月光あびて木々のけぢめもいとあざやかに、壘に松ヶ枝ゑがくも嬉し。妹のいざなふまゝ、涼風に袖はらはせつ、虫の音に興がりて共に庭をさまよふ。あはれ、今宵をいかなる様して、如何なる思に在さんと嫁ぎし友の上のみ忍ばれつるが、御幸多くとひたすらに祈りまつりき。（十四日）

（評）大佳

夫待つ夜（日記の一節）

滋賀縣　若井菊枝子

秋も半ばとなつた。風の戰ぎ水の流れ、まア何といふ淋しい晩だらう。一昨日お出ましになつたんだもの、今晩は乾度お歸りなさるだらう?。昨夜と思つて居たのがとう／＼お歸りなさらなかつたんだから……ピーと滊車の滊笛が耳近う鳴る。アツ、あの滊車か知ら?。暫時すると門前に下駄の音——針持つ手を止めて、ランプ片手に立とうとすると、下駄の音は通り越して終ふ。鈴虫が軒端に近う鳴き出した。又しても下駄の音——、耳を澄して立たう／＼とすると、憎らしい、これも又通り越して終ふ。風がすうつと戸の隙間から這入つて來る、ランプの灯が消えそう——、十七日だ、夜は更けてゆく——、ピーと滊笛の音——、今度こそあの滊車でお歸りか知ら?——先刻頻りと玩具をいぢつて居た美ちやんはとう／＼飽いたと見へて寝て終ふ。長火鉢に懸けてある鐵瓶の口からプー／＼と湯氣が立つて、チン／＼と沸騰して居る。九時が鳴つた歸らぬ。十時が鳴つた、未だ歸らぬ。あゝ今晩も歸らぬのか知ら?。遠くに聞こえて居た砧の音が止んだ、隣の爺さんが米を搗く臼の音も歇んだ。何處からか戸を閉める音が聞こえる。時計は今十一時を打つた未だ歸らない。——あゝ、とう／＼今夜もお歸りなさらないのだらう?。針箱と縫ひさしの衣とを隅へ寄せて外へ出た。

澄切つた大空に、十七日の月が銀の様に冴へて居る。しつとりと降りし露が白々として水晶の様に光つて見える。隣の庭から我が家の方へ、金木犀が夢の如うに香つてくる——。夜は闌けた。虫が鳴く、颯々と竹籔から吹いて來る風が肌に泌み入る様——。

柴折戸を閉めて家へ入る、油が盡きてランプの灯がじゝと音を立てる。眠り熟して居る美ちやん傍へ這入つて眠る。

静かな外には折り／＼犬の遠吠が聞こえる。

（評）其々のうち妙味あり。

○土曜日の日記

神田英子

未明電報がくる。大抵は見當が附いて、居るので、私は福袋でも明ける時のやうな心持て開くと。果して？イヤウマレタと、…目出度い文字。さあ男か、女か、小兄樣が、きつと男だよ男だよ。と、私の顔を見て、笑ひ作らおつしやる、私だつて、前から男だと可いと思つて居た。併し今、小兄樣がかうおつしやつた此場合。何だか私もと云ふのがいやなやうて、いゝえ女よ、女よ。と、さからつて見る。さあかう云つた以上は、兄樣に勝ちたい。是非共、女であつてほしい。三時間の授業の、終へるのも待遠しく、息せき切つて戻るとすぐ、母樣と二人て、水あめだの柔かいお菓子だの、姉さんに持つて、とにかく、赤ん坊を見にゆく。御あい障子を明けると、伯母さまが出て入つしやる、何だかさつもしない内、男？女と？伺ふと、ホヽヽと、お笑ひなさる。室へ行くと。姉樣は、床の上に起きて入した。赤兒は女、！あゝ私が勝つた。やつと安心した。其事を御話すると、さうだらう。此方はわざと知らせなかつたんだよ」と、大兄樣が笑つて入した。兄さまには勝つたし、矢張り女ても可愛いゝ。けふからは伯母樣になるのだもの。おさつ箱かふへたから、兄さま等とけんかしても安心なもの。大兄樣が、「これても文がけふから、ママになつたんですからねえ」ハツハツ…と笑うと、ほんにねえ。早いもんさねえ。と、かたみがわりに、姉樣を見るので、姉樣は大切そうに、抱いた赤兒の顔を見い見い、恥しそうに笑つてばかし入つしやる。家へ歸ると、小兄樣が座敷に一人て、寢そべつて居る。私いきなり、女よ女よと、さけぶと、むく〳〵起き上つたが、それでもだまつて居た。赤さんへ何か祝物をと思つて、途中でその材料を買つて來た、白チルのふちへ、紅リボンてひだを取つて、あつさりとぬいとりした、ベブロンを作る。夜の二時頃まて起きて居て。…自分ては、非常に上出來のつもりだが、まあハイカラだなんて、冷かされやしないかしら。…

（評）誰がみても都のしかも神田あたりの人の筆とみゆべし

○妻の日記

本郷千代子

八月二十九日。今朝は朝顔が澤山咲いた。お納戸色の台咲、牡丹色の獅子咲、白の切咲、紫の牡丹咲など、とり〳〵に露を含んてそれは〳〵美くしい、日頃の御自慢も無理が無いとほめて上げると、夫は滿足そうにニコ〳〵として居られる、間もなく七時が打つた。此儘一日朝顔の前に立ち盡して居そうな夫を「もう時間てすから」とせき立てゝ、やうやく八時頃玄關へ送り出す。暑いのに毎日御苦勞な事と、丁寧に頭を下げる

と、夫は相變らず機嫌よく出て行かれる。
九時より琴の稽古に行く、七福神を始める、なか〳〵むづかしい、十一時頃歸る。豐が突然飛んで出て「奥樣、玉が物置へ子を生みましたよと」眼を圓くして居る。ソト明けて見るとまア可愛らしいのがゴチャ〳〵と四ツ、未だ眼も開かないのがミイ〳〵となき乍ら親に縋つて居る、早速蜜柑箱へ綿を敷いて入れてやると豐は珍らしさうに覗いてばかり居る。
午後から豐を相手に夫の袷を解く。處へ「叔母さん」と可愛らしい聲がした、君ちやんだ。母樣が亡くなつてからは叔母さん〳〵と云つて每日來る、幼心にも淋しいだらうと思ふと可哀想で、けふもお父樣に買つて戴いたと云つて裸體の人形を持つて居るので、着物を縫つて上げると喜んで歸つて行つた、其後姿がまたなく哀れてある。
五時夫が歸つて來られた、「腹がへつた」と大聲にどなられた。豐と二人て笑ひくづれた、猫の子をお目にかけるとお前も早く生めと仰る、豐はお勝手でクス〳〵笑つて居る。
夜、夫は去年の朝顏の種袋を出して一々調べて居られる、其手付が面白いので「富山の藥屋が宿屋へ泊つた樣な騷ぎね」と云ふと皆笑ひ出した、處へ水戸の弟から手紙が來た、中學へは入つてから厭に六ケ敷い事ばかり書いてよこすので夫は笑つて讀んで居る。
十時が打つた。例の越中富山をソロ〳〵仕舞始める。
明日は日曜で上野の壽會を見に行く筈。
星が冴えて居るから明日もキット御天氣。
（評）氣六ケ敷かるべき姑男を持ち給はぬ氣樂な生活羨やましとおもはるゝ方も少なからぬなるべし。

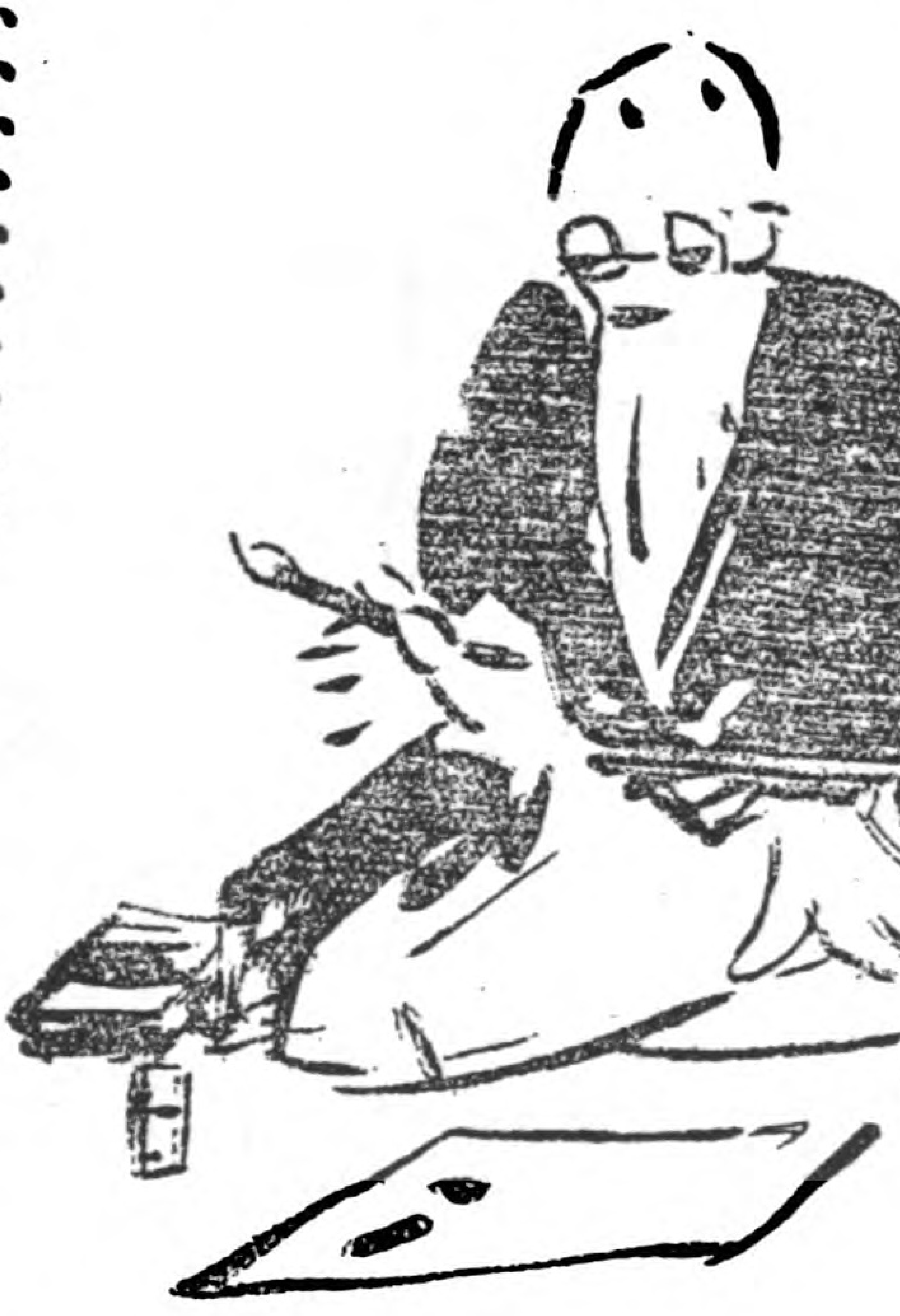
○事務員日記の續き

尾張　成田いし子

九月廿九日。曇つた嫌やな日である、中秋の冷たい朝風が室内を流れて肩の邊りがなんとなう、うすら寒し、昨日迄は影も見なかつた休息室の大火鉢は今朝はなつかしくも炭火が一ぱい埋られて居る。づらり火鉢を取圍んだ六人の事務員――折柄見へぬ主事の攻げきに飛んだ花咲かせ。九時心付いて擔當機械に付く、時をも措かず、受信が三つ、然かも死報――妙な日と思ふ。
午後。閑なるまゝ階下へ行く。折柄下り二號便の到着に、友よりの文や來し――と當もなきに胸のみおどらせつ、氣の毒がる原さんの手より日附印を借りて自ら押印す、封書、ハガキ、雜誌、見落さじと一々注目し行けど百餘通の總てが他人の名――遂に我名を見出し得なかつた刹那の寂しさ、『曇つた日は嫌なこと、』とてれ隱しに笑つて見る。
　發信、二十二。受信、廿五。
三十日。すが〳〵しき迄晴れたる日なり。空氣交換の

目的にて西窓を明く。つと流れ込む外氣のなかに得知らぬ香混る、大方枇杷の花の香ならんとひとり、うなづき置く。十時、送信器を手にしながら、ふと思ふ。今日はたしか新任者が來る筈、まだ養生所のぽつと出自分の爲には却つて厄介だけれどそれでも女子の連れが出來ると思ふと嬉しい。午後、お父樣に連れられて未だ吉村さんはまだまがれつとの先を時色のリボンて結んだ可愛らしい人、局長から各員へ紹介せられる時血の垂るやうな顔をし無言つてお辭儀斗りして居られる、どんなに氣まりが惡るかつたらう、當時の自分を思つて妾は少なからず同情した。明日からは自分と椅子を並べるのである、と思ふと何やら嬉しい氣がする。發信、二十三。受信、廿二。

（評）佳作、



隱居

水戸 北川うめ子

○家庭日記の一日

大坂市 井上静江

七月六日晴天四時起床毎朝五時半頃なれど此頃貳番茶にて早きなり、下女は茶を蒸し私は蠶に桑をやる、弟妹等は七時登校す、私は前日の洗物に糊附八時半又桑をやる今日は大工一人茶仕人桑畑の日雇都合三人の日雇なりなか〳〵いそがし十一時晝飯終り凡そ一時間許り休みゆゑ何か讀む物がなと思へど何もなき爲誠に淋しかりき、茶を呑み一時頃より蠶のしりかゑをなす折しも大ぶん強き地しん起りぬ、皆々驚く中にも突然の事ゆへ下女手に拭巾を持ながらくる〳〵廻ながら表へ出たり。其の時の面白さ其れより私と下女藪見廻りに行今年はわづか貳千五百十一本より出ず、去年の帳見れば五百本程劣れり歸りは草百合月見草などの花取歸りき、夕景には出入の者よ

り鰯と云ふ魚もらふ母上御氣に召たるか喜び給ふ、七時夕飯終りたり。

夜は京都伯母様への手紙書く九時半床に入る。

今日の出足布巻拾錢　下駄直し三錢五厘也。

（評）飾らぬところうれし、趣味なしとて捨てがたし。

○ものずき日記

越後　飛鳥女

十月十一日。日曜の樂日を幸ひと、友の君達打ち連れて遊びに入らつしやつたので、はからず小集の談話會が開かれた。皆さんは師範學校出の方、深窓の私は恰度新潮の匂ひをかぐ様な心地がする。私は料理の失敗談杯をする。

晝飯後、あの好奇心の君子さんの發議て、皆が幾人の子を持つかを試めして見た。夫れは一厘錢の裏面に文と云ふ字の書いて有るのに、自分の髮の毛一筋を其穴へ通ほして縛ばり付け、毛の所をしつかり持つて、緒口に半分程水を入れたのへ一寸錢をひたし、直ぐ引き揚げて其水の面へ下げて居る、と錢は振るひ出して緒口のふちの彼ち此ちへ打つ付かる。音一ッが子一人の積り。先づ私が第一番に試めした、カチンカチンと僅か二ッ。物足らぬ想ひに君子さんのを見て居たらまあ澤山、十二。次が玉子さんが七ッ打つた。夫れから、花子さん、一生懸命に幾度繰り返へしても駄目。錢はぢッとして居る。平常は嫁など嫌だの、子持ちは面倒くさいのと被仰る癖に今日斗りは、あらぬ方向ひてホロリと氣の毒げに見ゑた。

折柄冷やつこい風が吹いて、庭の栗の裸か實がポロッと落ちた。弱々敷い虫の音が哀れげに聞ゑる。

（評）興味あるすさび哉、

附言、

今回集まつた日記文の原稿は總計百三篇てした、定規外の文や、文字の亂暴なのは一篇もなかたのは非常に嬉しく思ひました、今回掲載の文は孰れも優り劣りなく入賞の三篇を別にするのに困難しましたが然し規定の如く入賞の分を選ばなければなりませんので兎も角三篇を分ちましたが出來ばえが特別に他の文よりいゝといふのてはありません、皆々いづれもよく出來たのです、

扨て昨年私が日記文の選者となつて以來いつの間にやら一年たちました、諸子と因緣が深くなりましたこと故、來年から日記文の選者をやめても、日記文や美文て添削して欲しいと思ふ方は私の處へ直接、郵便て御送り下さいば添削してあげてもよう御座います、但しその際は返信料の切手を御添への事、私の住所は

本郷區駒込富士前町五十五

中村春二



新體詩

横瀬夜雨先生選



凡て振假名をつくること
懸賞は乙種の規定に據る

天

○霧

備前　江見愛子

神無月の霧白し、
鳴子の綱うな垂るゝ、
綱に縺るゝ狹霧は、
海越えて來しや、懷し、
四國の海こえて來しや、やよ、
神無月の霧白し。

籾燒く、野の香よし。
煙罩めて霧は搖る。
川添楊、火葬場、
軌道越え、また移る。
白楊の學舍に通ふ、
子等の胸抱きて、其儘に、
神無月の霧移る。

神無月の霧晴れぬ。
松林行きはとかり、
競馬場の方に、僅微、
籾やく野の香よし、其朝
――海越えてカード來たれり
外國の都の書のカード、――
朝霧にほのぬれて。

爽朗一白

地

○迷夢

麻布　三浦美沙子

去りゆく人をしたひて
石となりしは聞きたり
見えざる影を思ひて
病むはかなしき宿世や

取らんとすれば消え失すゝ
虹の橋の類ならず
あけぼの尾を曳く夢路の
果敢なきに似てしたはし

追憶に似て力あり
常に心をつかみぬ
寂しく、しかも、暖かく
戀ふる心は絶えせず

永久の床なるわが墓の
影とも云はゞうなづかる
醒むる期なき夢追ひて
かくて廿の春もたけぬ。

石にたとへ虹にたとへ夢にたとへ追憶にたとへ墓にたとへて見えざる影をうたふ、技巧圓熟、夢の歌を聞くが如し。

人

○『逝く春』に添へて

東京　のむら光子

十八の若き年に再撮りし我かげを君に參らす若やげる春の日ゝおもかげに比べたまはゞ秋の色はこの上にこそさし侍らめ。『逝く春』に添へて、謹に捧げ奉る歌。

和胸に春咲き――珍花の
やがて散る運命とは知る知るも
いま音もなくくづれては

つれ〳〵の手ずさみに
散りし葩そと組めど
色のみは濃き紅に染まりつれ
通ふ息吹のなければか
萎れしまゝに香もあらで
以前の姿に似ざるもの
あゝ其かみの若き日の
青春き血ゆらぐ我胸に
ひろごり咲きし美し花！
時日のちからを、おそれずして
紅の頬を秀眉を
誇りとなしし十八の
幸なる春の逝くを悲しむ。

この君、何故に春の逝くをかなしむか。選
ふなかれ、少女もと涙多し……。

秀逸

○運命　岩代　梨花

（小枕に與へたる）

病みてふた月厩戸の駒も肥えゆく秋
なれど身は瘠せたりな小枕に、
數へし夢の繰り言を
看護の人にきかる迄。
忌まはしの藥の香室にみち
自然に、脱けてころがる寶玉入りの
指環飾りし右手の指、
視まもる夫の面にも
秋の、憂愁の雨白く、
黑きは夜半の風ならむ。
風に觸れてか吾乳の、
色は少女のものならず。
よろこびて、ざくろを拾ひし曉の、
夢も今はた消えぬるに、
暗黑き悲しき想をば、
見せじと埋む夜着の襟、
むかし處女の髮の香を
今病む床に戀ひ慕ひ、
奇しき運命に涙かれぬる。

鐵魂

○鶴ヶ城に上りて　東京　保科たへ子

天鵞草をよこ切りて
綠は土より剝がれけり
露原の露かれて
秋ふかくなりけらし。
堀の水あを〳〵と、
菱採るや舟も行く
風は石垣の蔦をかすめて
松の上にひときつゝ
磐梯岳は、夕けむり
朝の煙を分かねども
龍膽の花の紫よ
飯盛山の淡きかな。
天主をおほひて立ちたりし
鶴の翼の燒けてより
亡びし家の俤は
荒れたる國にのこれりや。
恥かしつらし二十年に
一つ足らざる年まで
館にありて名のみは
會津の姫と呼ばれつゝ。
あすよりは何國の人か眺むらんと
女すら泣きける月は殘れども
壁にうつしゝ歌も字も

石諸共にくづれけむ
見上れば見下せば
秋の天高くして
いはし岳の
烟は草の上を這ひ行く

「明日よりは何處の人か眺むらむなれし大城に殘る月影」げに兵火滅してよりすでに四十年、古城草茂りてまた笛の聲を聽かず。「亡びし國」といはずして「亡びし家」といふ疑ふらくは君は保科家の人にあらざるか。

おはり

○逝かんかな

岡山市　豊子

大阪　木村春江子

百日紅まつかに咲いた
山寺て
「人は死んてから何う
なるのときけば」
「赤裸となるまでぢや
といふ
「未來とは」？



「むかしの人の居る國てそ
こにはそちの妣も在る」
ともすれば、ひざにものり
し七つ兒の髮はのびしを祖
父君は
鸚鵡死したる雨の日に
雫にぬるゝ籠房の
うすむらさきの寂しらを
われに殘してゆきましぬ
大和は霜の早き國
風寒うしてよき人の
やゝにへりゆく秋なれば
母さへ在すときくものを
「逝かんかな」いて
ほろ〳〵と木犀の花のちら
ぬまに

『昨日から響文掃てまちは賑やかてすけれど、軒から軒へと吊した美しいきれを見ると子どもの事が考へられてなりませぬ』君にこの傷心事あり、その詩哀音切々たるもむべならずや。

○關どころ

信濃　太田喜志子

見返れどたゞ―涙に曇る野と山と、
思ひに古りし沼とのみ
おぼろかに光りて見ゆれ。
かゞやかの君と云ふ國慕へばこそ
かよわき足に似もよらぬ草鞋は穿
きしが白足袋の、
爪先見ずや血のにじむ、
かくても泣かず怯れずに
荒山道は辿りしを
あゝつれもなき關守―――。
其の日は肩にもだえなかりし、
旅の包の―――今に覺ゆる重み故に
重み故に、
血もたばしらん　瞳に見苦しう
たゞ彼處をと、喘ぎ〱、
かつゑし咽喉に一ののぞみの
清水すら涸れはてて
悲しうも零落れにけり
（など手形もたぬしれ者よ）と
嚴かや關守ハ、澱たる聲に、
身の血は、凍え、魂は怯えて、
倒るゝ如くひれふせば
胸は初秋―――夕の野路の
冷たき風の吹き通る。
はて遠き人の生の、
旅は困難しと氣づかひし、
母をぞおもふ關、にかかりて。

夜をこめて鳥の空音は謀るとも世に逢坂の關はゆるさじ。戀するはふるし、戀はされど新し。

○東都に上りて

下總　若杉とり子

都の人は華苑斯の
明るき室に友瞬の
襷の中に夢にさへ
歌舞の響きはきき倦ぐむてふ
快樂の巷夢見つつ
上り來て、三日目なり
人の行き交ひ車のきしり
塵はさもあれ街の華やかさに
例へば匂ふ花かざし
幾彩かさながらの
四季の美小間物の
店に集り百々千々に
亂れ散らばる心かな
又其處に美衣の列
行く足は又止まる
劇場の繪看板、
其賑ひの前にして
蒼白の人冬近き秋の夕を
素袷に肩をすぼめてすぎければ
敗殘の人の敗れたる
姿のそゞろ胸に沁みて、
母がすむ渡良瀨の川、利根の川
千鳥鳴くてふの里ぞ戀しき。

句讀を切ることと、段落をつけることを心がけるやうおすゝめする、飾らぬが何はよいと言うてもあまり亂暴でこまる。

○君を偲びて

名古屋　八代八重子

狹かれど―――柔士の
和やかなる胸の庭に
星淡き夕なりしか

若草の貝われ出でゝ
「可愛きくさよ」ほぎし人は
かゞやける希望いだいて
淺間の麓に葬られぬ
口惜しかりけむ——血の燃ゆる年にして。

露の朝、戀きの蕾やぶれて
花咲きぬ紫の——
白からば悔いもせざれど
初戀の紫と咲きにけり

紫よ胸の柔土
荒らすまではびこりて
思ひ出の根を
あだ人はぬけと責むれど

わたしの知った方にNといふ嬢さんがある十五になるまでは兄妹だとばかり思ってゐた兄さんの死んだあとで、いひなづけだつたときいて、寡居をはなさぬようになつたお、この詩を見たら泣くだらうと思ひます。

○なみだ

東京　なゝしぐさ

あやしや稲妻の　時のまのきらめきか
運命をさめし　美しの箱は
ふと我手に　さづけられぬ。

あまりにも燦然なるよ、と
小さき心　恐怖にみちて
開かんとのべし手　ふるひ
將來おもふ　涙こぼれぬ

「とくせよ、　ひらくか捨つるか」
十九とは　よわき音かな、
處女とは　ほそき響かな
開かんが　たゞ恐怖しさに……。

其中は　まだみもせねど
捨てなんは　つらくかなしかりき
開けぬなり　持ち去りなんと
縁といふ糸　ひきさりて
他人の手に　あけさせたりし

箱中みれば——愛の花、誠實の玉
永久にかゞやく　美しさ——みれば
十九とは　おろかのひとき
處女とは　世能しらぬ聲よ、
涙流るゝ、なみだながるゝ。

涙流るゝ涙流るゝがあまり突然でびつくりするけれど、ある時ある動機から消き悲みをおぼえへてある時ある動機から消き悲みをおぼえたとを歌うたのであらう。

○花の命

靜岡　星　つぎ子

葉がれに咲く花　人を思へば
あこがれて　あな夢の幸
たまさかの
さめて泣く　泪のおほき。

うれふべく咲くかや——
かへりみて　もののねたさよ
蝕喰ふと　あはれ何時しか
ゆるぎ來し　小莖のなやみ。
このなやみ　きほひて、
たまゆらを　いや鋭くかさむ
これよとは　かの甘汁のわざ

すぎしつみ　誰を恨まむ
えもいはぬくるしさ――
しかすがに　拗ねもえたりな
端然と　あな若き花
落ちも行け　かげろふ命。

しつきりなしに投げつけるように無駄な感嘆詞を用ゐるので、詩らしい感じが一つも出てゐない。

○さすらひ　諏訪しぐれ

たづさふる一張の、破れたる古胡弓
ふししづむ絃の音に、ゆきくる野や
山の、かぎりなき淋しらの、そのまゝ
ゝそふにのせて、まろらなる我が地
球の、東にか南にか足とめていこふ
べき、やすらひをたづねつつ、たゞ
道のあるかぎり、うたひつゝゆかむ
漂泊の子は。

ふるけれどあはれなり。

○もだえ　伊藤芳枝子

さつきなり――まひるなれども、

（例ふれば、長き生命に、
疲れたる人の瞳の如、
にびの色、濁りの光り）
影の如、彩の花咲く
梧桐こそは風にをのゝけ。

窓による我れに向ひて、
居ならべる若き友どち
醜きは黒き蛇となり、
美しきは白蛇となりて、
空中にひたからみする、
毒光るおぞまし髮よ。
我れは又、たゝずめるまゝ、
頸も手も將、たましひも、
ゴム球を苦むるが如、
シユと計り縮み行くなり、
其のせつな人の心は、
わが胸をとく走りぬけ、
空虚なり、こはおとりたる、
けだものとなりにけるかな。

我れも又、若き一日を、
はても無き魂のなやみに、
夢かとも、まぼろしかとも、
遂に見ぬ、さつきのまひる。

窓に居並べる友の髮がなぜ蛇に見えるといふのか、人の胸を走りぬけたから劣つた歌だといふのはなぜか、

○戀の鍵　神戸市　幽香里

力こめ、きゝとねじれば、あなや戸は
音なく開きて海原の胸の底より
數しれぬ不思議充てりと思はれし
君がみ胸も豁然とわれにひらけぬ。

見るはあな中にいつける美しの
愛のみ姿、そがまへに灯華やぎ、
天井のその張板の丹の花も
靑なる花も浮き出てゝ匂かゞやく。

また見るは音なくたるゝ瓔珞の
花の輝き、踏めばあな鳴るや大床
その床の一つ一つは實にこれや

工匠の手だれ、樂の音の檢樂の戀さ、
千草の紅葉秋の色。

雲岳女史現はる。

美しき君が胸かな。その胸を
ひらくべく得しあゝ鍵の力貴しや、
靜かなる宵の一室に接吻の
刹那に得てし此の鍵ぞ實に戀の鍵。

これを名づけてびつくりしやつくりの詩といふ、のべつ幕なしの感歎詞で讀を流してるからだ。

○小さき蛇　相模　鍋田　黔子

雨あがり小さき蛇の
ぬれし草葉にまんまるう
うづくまりゐぬ。
持ちたる洋傘の先にてそつと
つけば怒りぬ頸を擡げて
我を睨めぬ——
再びつけば頸をちゞめぬ。
おかしと云ひて三度目に
あたりの草を「かさ」とおどせば
とぐろを解いてかくれけり
夕日は西に

○暗のかげ　越後　横山　文枝

外をすかせば物のかげもなく
暗深は我胸にしめ〳〵とそゝぎ入る
物縫手留ては遠き思の潮なり
靜かなる今夜を狂はしの涙かな。
影だにあらばと見れどやみの中
くづれしかみの額にみだれて
死せる魂のむくろよこたはる

○胸ぐるま　磐城　佐藤　勝代

かれて戀しき彼の君に
不圖道にあふときは、
こわしと思ふいかづちの
なるを知らするいなづまの
光を見たる心地して
胸の小車とゝろとゝろ
いいいいいいいいいいいいい
とゞろきわたるくるしさよ

○初島田　攝津　みなしご

好き色よりて、髷結う
結びし髮にさしませと
わが横顏を覗き込み
簪をさゝげて君ぞ立つ
緣にて摘たる花笹の
中は盜るゝ露散や
常夏の花百合の花
清き香のたちまよふ

「とくかざしませ花散るに」
胸かにあつきおんいきの
わお顏の、あたりかゝるかと
と思ふ思ふ面ほてる
白き胡蝶の舞ふが如　百合の一片髮に
おつるとなしに夢心地　君にうしろ向く初島田

○花さん　越後　初　子

どうしたの、
と、のぞかれて花さんは、
えゝとうな垂れる、
緋牡丹のやうなかほ、
上眼て、ちよい〳〵私をみる、
今年十六、
箱入娘、清元がお上手て、
用上げがとつてほしひといふの。

○劇藝家に　千葉　吉原靜江女史

汝卑劣の劇藝家
眞鐵百斑に圍むとも
努力の鉾に詩の神
今や碎かん汝が心
悔いなば來れ我が詠に
吾に詩神の鉾なけれ
涙に正しき香あり
來りて洗げ汝が心

劇藝家、劇藝家を罵る、耳をおほうて鈴を盜む恐もこれには及ぶべからず、君が眞心缺點は終に救ふべからざるか嗚呼。

▲撰外課題▼

「鳥」

江見、三浦、加藤、野村、木村、小野、若杉、岩岡、星、遠藤、諸嬢に託す。(〆切十二月十五日)

新論文

編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以内、半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は乙種に據る。

人

○感じたまゝ

札幌　齋藤れい

此頃は、雜誌を見ますと、どれにもこれにも、美しい立派な、しかも、それが私達の樣な若い人々の手になつた文章がそろつて居ます。ほんとうによくもこんなに書けたもの、獨て頭から出て來るのか知ら、あゝこんなによい頭がどうして皆樣にあるのだらう等と思はずに居られません。實に羨ましい程で御座います。けれどもこれは、お一人て、すつかり頭から出してお書きなすつたものばかりとは思はれません。そりや中には全く頭の中からお絞りなすつて美しいものを作る方もありませうが大抵は參考書を引つぱりまわす、雜誌を側に積んで置いて首つ引きをしながら其中のよい處を拾つて作る、先づこれが多くはあるまいかと思ひます。

今私の學校ては毎日日誌を附けて居りますそしてよい處には先生が○を附けて下さいますその○を時々拜見しますが失禮ながらどうもそれが其人の頭から出たものではない樣なのですまた時々文を作りますに種々參考書を側に置きながらする人も見ました、それで、毎日書く自分の日誌すらこれてすから投書なさる方々の中には隨分あると思ひます。これが即ち大きくなると所謂剽竊文になるのだらうと思ひます、參考書がなければ文は作れぬては誠に情ないてはありますまいか私共は參考なしで作る樣でなければ非常に不便てす。それて初めつからは御師匠樣の方はありませんからやはり始めは拙いものを書きそれをだん〳〵巧なものとして行かなければなりません。處で參考書なしで巧に書かうとするには常々多くの物を讀まなければなりません。讀むで置いていざといふ時には貯へてあつたものを絞りながら書いたらすら〳〵とした立派なものが出來上るてあらうと思ひます他の力の雜じらない自分の實際の頭から出たものですからこれは美しいものだと思ひますすると其中にはだん〳〵巧な文も出來て參ります。これは私が實際にやつてみて常に思ふて居りました事てすから書いて見ました

勿論然うでなければ眞の文章は出來ません、好い心得です（評）

秀逸

○繪葉書交換に就て

周防　白蓮女

不束なる私が、是迄繪葉書交換に付て少し感じた事をお話し致しましよう、まづ第一に葉書の生命たる畫を撰ぶ事が、肝要であらうと思ひます、

無暗に金銀泥を塗り着けたるものや、又は漆器で道具を塗り込だる樣な繪葉書や、或は美人エハガキにもせよ其等は唯美しいと云ふのみにて、畫には少しの意味もなく又興味もありません。で其な高價な品を頂くよりか、如何に粗末でも自筆繪葉書の方が其以上の値がある事でありましよう。

故に、可成自分の住める土地の、總ての地方物を交換致す方が其所に言外の趣味がありまして、身は遠く離れて居ましても、其畫にて其地が偲ばるゝ事であります、

例へば、東京地方の御姉樣から九洲美人の繪葉書を頂いたり、又長崎の御方から箱根の景を貰つたりなどしては、喩へどんなに立派でも、頂きし人に取ましては何の意味もなく、其れ程の價値も有ません、返す〳〵も地方繪葉書の交換を望むので有ます。

最繪葉書は、實用以外の風交に用ふるので有ますから從て字句なども、余程精練致したいものであります、少しも書かないのも面白くありませんけれど、又餘り下らぬ文句を金釘流に書着けられては、却つて繪の趣味を損ふ樣になります、故に可成文面は、短くして引締つたのがよいと思ひます、書入れし文句によつて一層値ぅ着くもので有ますけれど、敢て詩歌俳句の類に限らず、無雜作になりし短句零語などが矢張讀む人には樂み多い事で有ます、近頃繪葉書交換は一種の道樂範圍に入まして、濫りに不見不識の御方と御交換致す樣になりましたが、幸に諸姉樣も繪葉書與趣を味はれて其交換の本意を失はぬ樣にして頂きたいので有ます。

大要、心得となります（評）

○醜　女

紫　子

容貌は女の生命と迄いはれて居る其の容貌の醜い程女の身として悲しい事は御坐んすまい、朝な夕なに向ふ鏡の恨めしくて幾度か投げ捨てた事も御座んせう私も其の不幸の子に生れた一人で御座います、自分でそれと悟つた私は髮は時後れの束髮袴といへば裾短かく着物もわざと強々した田舍縞リボンなどは買うた事が御座んせぬ、お手に取つた事も御座んせぬ、白いものなど生れてから一度も塗つた例が御座いませぬ、この樣子を道行く人に見らるゝ恥しげに伏目勝にスタ〳〵通ふ私の姿どんなに見すぼらしいでせう、いやだと思つた四年間の通學も早や半年を殘す許り。然し成績では人に引を取つた事はありませぬ、あの美しい花さんにも田中さんにも負けた事はありませぬ、けれど學業が何になりませう學校に居る內こそ出來れば肩身も廣い先

生も賞めて下さるが卒業して後は醜い者は殘り者果ては一生老孃で朽ちなければなりますまい。此間も當地は〇〇伯の御出ての折も校中で、成績良好の者が接待の任に當るとの事、あまりに醜い私はそれにも洩れなければなりませぬ、私は泣きました、女ですもの殊に弱い女ですもの、私は心行く許り泣きましたけれども涙は未だ盡き様とも致しませぬ、一夜中泣き明かした眼は赤くはれ上つて四年間一日も欠席した事のない學校を欠席して了ひました。

今迄は人並は希望もありました理想もありましたが今日からの私は理想も希望もありませぬ、凡ての物を打捨てゝ涙多き半生を文筆と共に送りませう、

けれども〳〵流石に未練も殘ります私とても未だ十七の少女子で御座んすもの。

標致がいけないからとて排斥するやうな態度がありとすれば、其學校の風儀が想ひやられます、而かも其爲にはれられたとすれば選者は滿腔の同情をあなたにさゝげます(評)

○春と秋

上毛　喜代子

春の風は歌ふなり秋の風は泣くなり。

春は命なり、萬物みな活きて働く、春は愛なり、天如共に歌ふ。小女を人生の春とすれば、春は天地の小女なり、秋は死なり、萬物蕭條として沈む、秋は懊惱なり、風韻虫鳴共にむせび泣く、老衰の人を人生の秋とすれば、秋はやがて天地のそれなり。春の色は紅なり秋の色は白なり、懊惱める人の美しさは淋しく清く、神の如く森嚴なり、秋の色はそれにも似たるか、羞を含める少女の血潮は、温く美しく、なさけ深き花神の如く優婉なり、春の色はやがてそれならむ。春は肥えたり、秋は瘠せたり、柳渡る風の温かにして、萩吹く風の涼しきが如し。春は光榮を意味し秋は滅亡を意味せり、春の草は萠え秋の草は枯る、春の淡霞は温かにして秋の白露は冷かなり。朗詠の聲管絃の音は春によろしく、讀經の聲梵鐘の音は秋によろしかるべし。

佐保姫は春を司り、立田姫は秋を司る、佐保姫の住居は華やかに美しかるべく立田姫の住居は氣高く清かるべし。立田姫は清淑にして爽快に佐保姫は優婉にして温和なるべし。枯草におく霜白く月清し、立田姫は劍の氣を帶びたり、意志强き女丈夫なるべく。淡霞幽に花香ひ春しめやかなる佐保姫は慈愛に富みて情厚き淑女なるべし。松虫、鈴虫はこれ立田姫の歌へるなり、鶯、雲雀はこれ佐保姫の歌へるなり、佐保姫は寛厚なり、靄然としてほゝ笑む立田姫は嚴肅なり、怒りて漸涯をなす。春を女性とすれば、秋はむしろ男性と云ふべからむ、妾は、むしろ秋を喜ぶ者なり

題意の瞭解なるはよし、文字の錬れたるを採る(評)

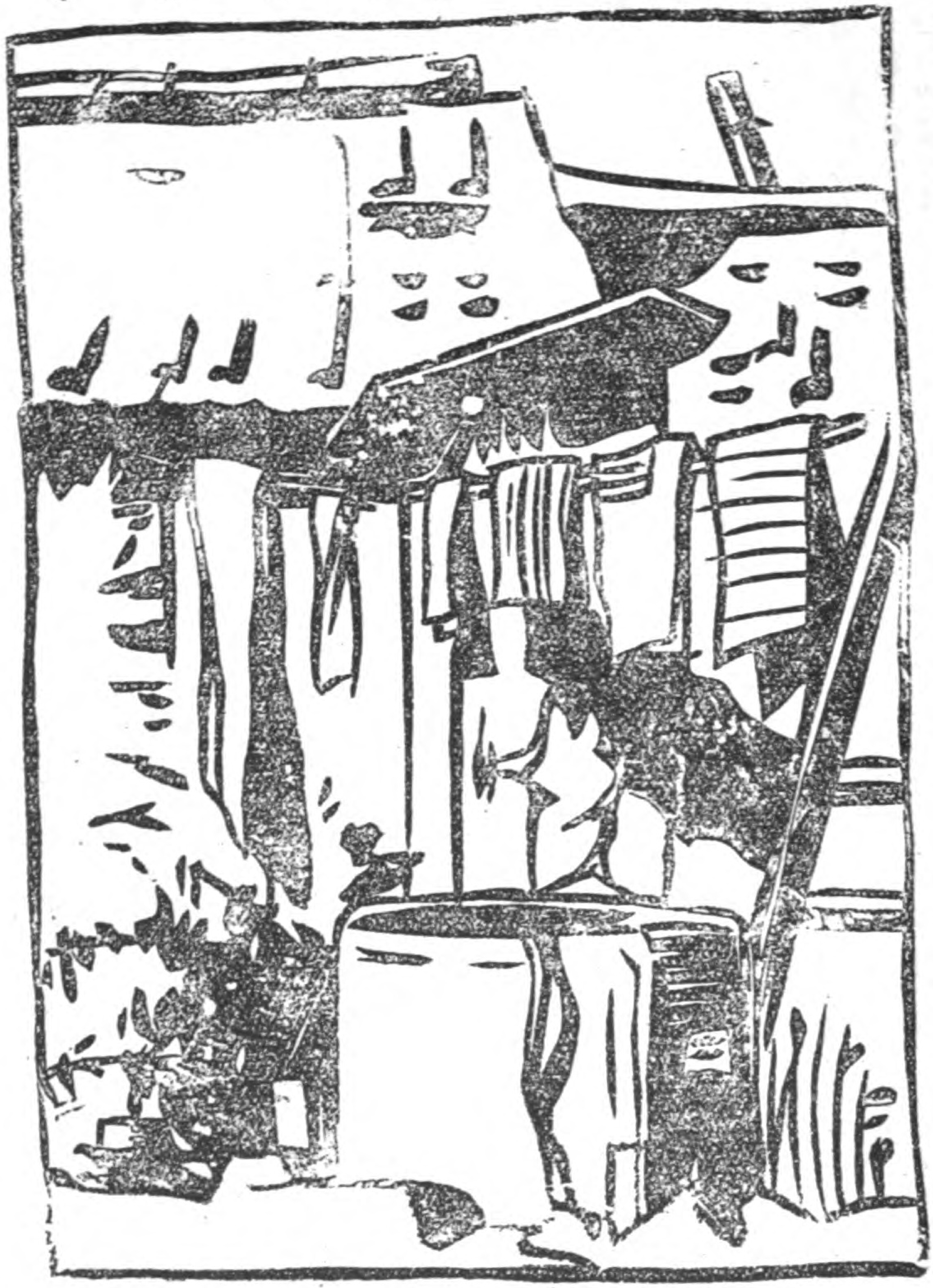
○青果集を讀みて

長門　田中孝子

青果集を讀みて

長門　田中華子

久しく小説を讀みませんてゐるとつい此の頃のこと、お友達のKさんが「これを讀んでご覽なさい。新らしい物を讀まぬと時代に後れますよ。」といつて貸して下さつたのが此の青果集てあります。て、私は新らしい作物を讀まうとする時に起る一種の不安――若しそれが私共に害のある、非道徳な物てあつたら――を感じながら讀み初めました



裏　須津とよ子

短いのから先に讀むのが私の癖てあります。てまづ「小春日」を見ました。新らしい描寫法、ポタリ／＼切れたやうなあの筆致には感心しましたが主人公塚田のあゝした態度は何だか厭な感じがしました。「卓上」は先づ題が氣に入りました。讀んで見るとやはり面白い自分も何だかあの時の七人會の席上に居合せたやうな氣がしまし

た。「男柱」と「久本氏」は讀みませんでした。そして直ちに「南小泉村」をみました。何といふ地方色の能く出た作でせう。小百姓の生活、あゝした老媼は如何しても田舍で無きやあ見られないのであります。個性が能く出てゐるのも作者の特色であると思ひました。その日は是れて止めまして、その翌日「茗荷畠」を讀み初めますと如何でせう。あの力强い、權威ある筆にすつかりみせられて了つて、可成長い全篇を一氣に讀んでしまつたではありませんか。二三年前聖書を讀んだ時と同じ思ひを本篇に於て繰り返されたのでありますが、私は脚本を好みません。如何いふ譯か自分でも分りません。「第一人者」は異彩があるといふ評判でしたが、人物、處、時など皆いてあるのを見るともう讀む氣になれませんでした。そして直ぐ「敗北者」をみました。けれども如何いふものか此の篇は私には左程强いひゞきを與え無かつたやうであります。脚色の餘りにすぎた濃厚な、芝居じみた作は私には餘り向かぬと見えます。

要するに私が靑果集一冊に依つて——讀まないのもありますが——得た利益は少々ではありませんでした終りに私はあの書を貸して下さつたKさんに深くお禮を申上げる次第であります。

まだ一を知つて、二を知らざる樣子もあるが、動かされたゞけ、時代の人でせう（評）

○寫眞の交換につきて

釜谷柳雪

只今ではどの婦人雜誌を見ましても誌友の交際と云ふ事が非常に盛んに行はれて居る樣に見受けられます、それで玆に知らぬ人同志の交際ですから繪葉書の交換だとか普通の手紙の交換などはさほどの弊害もなく又互に見聞を廣くするといふ益もござゐますからそれからの交換に對しては私とても論はござゐませんが私の只今申上げ樣と思ふのは寫眞の交換といふ事です、あれは大いに注意をしなければならない事だと存じますなぜだと申ますと皆樣も御承知でせうが今の世の中にも隨分惡い男子がありまして女の姓を騙つた上にいゝ加減な女の寫眞を送つて參りまして例のなつかしいとか慕はしいとかなどと甘い言葉をならべた揚句寫眞の請求をする者が實に多いのです（もつとも皆が皆そうだと申すのではありませんが）こんな風にされますと、まだ世間といふものをよく知らぬ處女などですとすぐ之を眞にうけてしまつてうつかり自分の寫眞を送つてしまふのです、さあその結果はどうでせう、どうせそんな事をして人をだましたりする樣な人ですもの、どうしてたゞておきますものか、どうにかして手をまわしてのつぴきならぬ樣にして遂に墮落の淵に陷れられてしまはないとも限りません、まさかこんな事ばかりでもありますまいが結果よくないにきまつて居ると

思ひます、ですから皆様も一度も合つた事のない人などゝ寫眞の交換だけはなさらぬ方が御身のために安全ではございますまいか。

○望ましき婦人

竹内けい子

我が國には昔より女として、書を讀み文を綴り、あるひは挿花茶の湯、音樂などのみやびなる物より、裁縫料理等の道にまでも、良く通じたる者少からず。されどそを細に視れば、文讀む者と裁ち縫ひの業を知らざるが多く、挿花茶の湯などの道に心ある者には家事を顧るもの少く、裁縫等の巧なるは文學の道に暗く交際に長けたるは子を育つる事を知らざるなど、とりどりに片よりたるが多く、殊に其心ばへに至りては正しき德をそなへたる者稀なるが如し。

されば徒に容顔の麗しからん人を見て之を羨み、又挿花茶の湯などの心得ある者を優にやさしなど思ひて、世にすぐれたる者となすは、惑の心の甚だしきにて識者の眼にはなか〳〵に笑ふべき事どもなり。

それ柿の甘澁は其皮色の如何を以て知ることは能はざるが如く、たとへ外容を花をも耻ぢ入らしむる程なればとて、其人必ずしも心の中美しともあらず、又才智人にすぐれたればとて、之れ亦完全なる人とは云ひがたし。されば外貌の美素より願はしき事なれど、うはべのみ麗しくして其實なきよりは寧平凡なりとも、萬の道に通じ、而して完全なる婦德をそなへ、妻たり母として聊かも耻づべき處なき婦人をさして、まことの麗しき人とこそ云はめと思ふや

○女の心は女

草村瑩子

花袋氏が嘗て『二十のものが三十の人の心持を描いたところが、要するに二十の人の空想した三十の人であつて、眞の三十の人ではない、何程鋭敏に洞察したところが、倒底三十才の人の複雜な心理は解るものでない』と云はれた。これは創作の立場を餘り狹くした、やゝ極端な說ではあるけれども、如何にも尤な事實であると思ふ。

殊に、男性でゐて、女性の心理狀態などを描かうとするのは尙更ら無理のことである。

異性間の心理の相違は年齡と心理の相違するよりも、もつと大なるものであらう。それに尙ほ——（そう云はれる花袋氏すら）——女性は男性の手によつて、空想によつて描かれてゐる。廿才の作家が卅代の人物を描くよりも、もつと甚しい矛盾ではなからうか。二十才の人の心持が廿才の人にてなくては解らないものならば、女性の心は女性にでなくては解らない筈である。

妾等は眞を描かうと力めてゐる。何を好んで男性を描く必要があらう。虛榮、嫉妬、結婚や戀愛に對する不安、悲哀、出產など、妾等は妾等の心持を僞らずに描けば、それで充分である。要するに妾等の描いた男性

は、空想した男性ではないか。

本誌の小説を見るに、大概その傾向が見えて來たと思ふ。いかにも嬉しいことである。妾等はこの方面へ向つて、新なる努力をしやうてはないか、而かも此方面は廣いのである。

○お伽噺につきて　滋賀縣　藤　志緒

私はお伽噺につきて意見を述べて皆樣の御批評を願ひませう。

此頃家庭の讀物として殊に子女に面白くて爲になるお伽噺等の多く出るやうになつたのは誠に結構な事てありますが其多くは魔物、魔物と計りで成つてあるやうに思ひます。次に父をなくしたとか母が死んだとか、其上家が貧しくつて身寄りの者がないとか、大抵順境の場合には之を手本として行つて見る事の出來ないのが多い樣て、之てはあまり効を奏する事はないだらうと考へます。

あまり極端な言かは知りませねど、一方學校では魔物だとかオバケ等いふ者は決して居るものでないと話して聞かせておいて家では子の爲孫のためにと教育に心を用ひてお求めになつた、其本にヤレ魔物がどうしたのソレ親もなく家もない女の子が山途を歩いた等と書いてあつた時には、讀むで居る其兒の心は如何に迷ふ事てせう、逆境に居る少女の末には樂しく月日を送つたと之だけの事が普通の家庭に育つた兒童の決して眞似する折はありますまい。それよりは日常生活中度々相遇する例をあげ之を處するの法を、種々の人物からとつてきたならば、たしかに立派な教導となるだらうと考へます。お伽噺の主意も充分知らぬ私のおこがましい申出皆樣御ゆるし下さいまし

○交際につひて　伊　知　子

人輕々敷交はる勿れと、實に表向き許りは眞の友の樣にして居つて別人に向つては蔭口をする等は誠の友とは申難くあります。若し、新入生でも來るに直ぐちやほや云つて昔からの友の如く其人の後につひて、何時も巾着となつて居るかと思ふと一ケ月許りも立つとそろ／＼惡口を云ひ出す終には少しも語も交はさぬと云ふ人があるのは最嫌ひな人であります。私の尋常の時より高等科を終へる迄机を同じくした私の一番仲の善い友一人ありました、至つて品行も良く學績も同一位てしたのて此上無い方だと思つて居たのてした、證書を頂いた日に別れる時にも彼の櫻の下て共に泣ひて頂／＼此後如何に別れ／＼に成つても末永く交はつて頂く事を硬く約束致しました其後度々御便りも下さるし御返も致しますし又御逢ひ申しますし今更の樣に御懷しく感じて涙が出る樣てありました。が、昨年或小學校の校長の君の許に行かれてからは、何んの御音信も下さらないが私は如何にしても忘るゝ事が出來ませんて御住所を伺つて御便り致しましたが何とも御返事がない。尚御懷しく成りますので又御手紙上げましたが其ても御返事がない餘りの事で他のお友達に尋ねて見ると矢張り私の樣な目に逢つて居なさるとの事、私は思ひました。今迄眞の姉上の樣に思つて居たのは心得違てあつたのか、其れにしても御嫁に成ると親友にても御便り下さらないのかとしみ〲友と交はりを結ぶには能く其の人の品格を知つてからの事にせなければならないと感じました。

綴文

[illegible]



規定　十六字詰七行以内、總て振仮名を付くること、締切前月廿日、懸賞は丙種に據る。

天　○炎天　下野　恵女

風もなき木々にはじい〳〵と油蟬が啼てゐる、だらだらと汗が流るゝのて針の手を止めて手早く拭ふ、勇しい聲て「エーンヤラヤーイ」、と一齊にとなふと暫くしてドタンとひゞく、あゝかくてこの二十日間、新築せらるべき銀行のいしずゑは燒けるやうな炎天にも彼等の逞しい腕て日々かためられつゝあるのてす。

強者は金なり、弱者は鉄なり

地　○障子　常陸下館田町　木村那賀子

私は年中北向きの座敷て、障子のそばへ寄て裁縫をして居ます、退屈しますと障子へ、針の先てプツ〳〵といろ〳〵の字に穴をあけます、其れがあきると指をなめて穴をあけ其所から柿の種や、おサツの皮を投り出します、冬の頃になりますと其穴が大きくなり北風がピユウツと吹き込ますので堪らず梅の花や櫻の花に紙を切り、切り張りをいたします。

いたづらをするお嬢さんですね

人　○曇れる日　長門長府村末永方　田中華子

おほ空はどんより曇つて、譬へば萬象を疑ふ人の胸のやうてある。大地は凝つて動かぬ古沼のやうに、靜まりかへつてゐる。重い重い荷を脊負つて、急な坂を喘ぎ〳〵上つて行くやうな思ひが私の胸を放れない。何もせずに居て、脊に汗がうるはよ。

口語詩の流れを汲むもの

秀逸

○郵便　奥市　碓井清浪

郵便が局より局へ着く時間を調べて見ましたら下の通になりました、函館より二日と二十三時十分間、東京より一日と七時五十六分間、大坂より二十一時間と九分てす、まだ澤山有ますがイ便ロ便やスタンプの不明瞭があります故書かなかつたの。

面白い計算、早く氣の著いたのが勝

○淋しい晩　大阪　鈴木房子

妾は渡邊橋を南へ行く、後から電車が來た、ほつと埃の立つのが夜目にも見えるが、ガス會社前の廣い通は晝の樣に明るい、大坂局から、暗い角燈をさげた集配人がだるさうにして出た、星は冷く輝いて、妾がちつと手を組て歩るいてると、先を行く人が幾度も見返つた。

は、空想した男性てはないか。
本誌の小説を見るに、大概その傾向が見えて來たと思ふ。いかにも嬉しいことである。
妾等はこの方面へ向つて、新なる努力をしやうではないか、而かも此方面は廣いのである。

○お伽噺につきて　滋賀縣　磨志緒

私はお伽噺につきて意見を述べて皆樣の御批評を願ひませう。
此頃家庭の讀物として殊に子女に面白くて爲になるお伽噺等の多く出るやうになつたのは誠に結構な事てありますが其多くは魔物、魔物と計りで成つてあるやうに思ひます。次に父をなくしたとか母が死んだとか、其上家が貧しくつて身寄りの者がないとか、大抵順境の場合には之を手本として行つて見る事の出來ないのが多い樣て、之てはあまり効を奏する事はないだらうと考へます。
あまり極端な言かは知りませねど、一方學校ては魔物たとかオバケ等いふ者は決して居るものてないと話して聞かせておいて家ては子の爲孫のためにと教育に心を用ひてお求めになつた、其本にヤレ魔物がどうしたのソレ親もなく家もない女の子が山途を歩いた等と書いてあつた時には、讀むて居る其兒の心は如何に迷ふ事てせう、逆境に居る少女の末には樂しく月日を送つたと之だけの事が普通の家庭に育つた兒童の決して眞似する折はありますまい。それよりは日常生活中度々相遇する例をあげ之を處するの法を、種々の人物からとつてきたならば、たしかに立派な教導となるだらうと考へます。お伽噺の主意も充分知らぬ私のおこがましい申出皆樣御ゆるし下さいまし

○交際につひて　伊知子

人輕々敷交はる勿れと、實に表向き許りは眞の友の樣にして居つて別人に向つては蔭口をする等は誠の友とは申難くあります。若し、新入生でも來るに直ぐちやほや云つて昔からの友の如く其人の後につひて、何時も巾着となつて居るかと思ふと一ヶ月許りも立つとそろ／＼惡口を云ひ出す終には少しも語も交はさぬと云ふ人があるのは最嫌ひな人であります。私の尋常の時より高等科を終へる迄机を同じくした私の一番仲の善い友一人ありました、至つて品行も良く學績も同一位でした此上無い方だと思つて居たのでした、證書を頂いた日に別れる時にも彼の櫻の下で共に泣ひて頂く／＼此後如何に別れ／＼に成つても末永く交はつてく事を硬く約束致しました其後度々御便りも下さるし御返事も致しますし又御逢ひ申しますし今更の樣に御懷しく感じて涙が出る樣でありましたが、昨年或小學校の校長の君の許に行かれてからは、何んの御音信も下さらないが私は如何にしても忘るゝ事が出來ませんで御住所を伺つて御便り致しましたが何とも御返事がない。尙御懷しく成りますので又御手紙上げましたが其でも御返事がない餘りの事で他のお友達に尋ねて見ると矢張り私の樣な目に逢つて居なさるとの事、私は思ひました。今迄眞の姉上の樣に思つて居たのは心得違てあつたのか、其れにしても御嫁に成ると親友にても御便り下さらないのかとしみ／＼友と交はりを結ぶには能く其の人の品格を知つてからの事にせなければならないと感じました。

短文　[illegible]



規定　十六字詰七行以内、総て振仮名を付くること、締切前同断、懸賞は丙種に據る。

天　○炎天

下野　恵女

風もなき木々にはじい〳〵と油蟬が啼てゐる、だらだらと汗が流るゝの てに針の手を止めて手早く拭ふ、勇しい聲で「ウエーンヤラヤーイ」、と一齊にとなふと暫くしてドタンとひゞく、あゝかくてこの二十日間、新築せらるべき銀行のいしずゑは燒けるやうな炎天にも彼等の逞しい腕て日々かためられつゝあるのです。

選者は金なり、題者は腕なり

地　○障子

常陸下館田町　木村那賀子

私は年中北向きの座敷で、障子のそばゑ寄て裁縫をして居ます、退屈しますと障子へ、針の先でプツ〳〵といろ〳〵の字に穴をあけます、其れがあきると指をなめて穴をあけ其所から柿の種や、おサツの皮を投り出します、冬の頃になりますと其穴が大きくなり北風がピユウツと吹き込ますので堪らず梅の花や櫻の花に紙を切り、切り張りをいたします。

いたづらをするお嬢さんですね

人　○曇れる日

長門長府村末永方　田中　華子

お空はどんより曇つて、譬へば萬象を疑ふ人の胸のやうである。大地は凝つて動かぬ古沼のやうに、靜まりかへつてゐる。重い重い荷を脊負つて、急な坂を喘ぎ〳〵上つて行くやうな思ひが私の胸を放れない。何もせずに居て、脊に汗がうるはふ。

秀逸

口語詩の流れを汲むもの

○郵便　呉市　碓井　清浪

郵便が局より局へ着く時間を調べて見ましたら下の通になりました、函館より二日と二十三時十分間、東京より一日と七時五十六分間、大坂より二十一時間と九分です、まだ澤山有ますがイ便ロ便やスタンプの不明瞭があります故番かなかつたの。

面白い計算、早く氣の着いたのお嬢

○淋しい晩　大阪　鈴木　房子

妾は渡邊橋を南へ行く、後から電車が來た、ぽつと埃の立つのが夜目にも見えるが、ガス會社前の廣い通は晝の樣に明るい、大坂局から、暗い角燈をさげた集配人がだるさうにして出た、星は冷く輝いて、妾がちつと手を組て歩るいてると、先を行く人が幾度も見返つた。

雪國が新しい

○越後　越後　佐藤　浪子

お米は澤山とれる、お魚は食べ飽る程、お美味い果物は山をなして、野菜は何でも青々と、花も咲く鳥も唄ふ、是で雪が積らなかつたならどんなに好かろうと思ひます、でも住めば都、妾は東京よりロンドンより越後が一番戀しう厶います。

然う思つて暮すのが何より幸福

○寒き朝　名古屋　八代八重子

眞黒な炭を火鉢の中に立てかけて、傍らに火種を置いて、プープーと一生懸命に新生を、吹き入れましたら火が炭に移つて、光明は次第に廣がり、遂々全躰眞赤になりました。此時、私の胸には、云ひ知らぬ「かゞやき」と「滿足」を覺えました。

新代の人

○現代　福井縣　片山　千里

或る友人から、此の世の中が、無意味だとか、沒趣味だとか、書いた手紙が來たので、その次に逢つた時、貴嬢實際さう思つていらつしやるの？、と問ふと、いゝえ皆があゝ書くからよ。

ふるつてる（これも然う言ふから）

○秋風　赤坂　藤崎　里子

立ち並ぶ甍を傳ふて冷たい風がさつと吹いて來て、老舖の垂簾は老番頭が口小言のやうに、はた〳〵と動くと、店先に居並ぶ、小僧さん達の膝頭は期せずして、みな一樣に頭を隱す。さうして僅か許りのほこりを立てゝ、撒水車の過ぎ去つた後を、冷たさうに吹く。

乘客の少い電車が走る

○夕ぐれ　札幌　しづ女

多數の牛が家の前を通つた、もう夕暮だ、前の木の葉はうごかなくなつた、空には美しい彩色ができた、そうするとりゝしい一人の少年が一頭の駿馬に跨がつて向の家から出た、そして東をさしていそいで行く、其美しい雄々しい姿がやがて霞の中にかくれると日が暮れる。

北海だけに神秘めく

○お百姓　大阪　西戸　政江

つく〴〵と都會生活にあいてきたどちら向ひても海は見えず山は見えずいつも濛々と立つ煙や塵にけがれた空氣を吸ふて八釜しい車の音で一寸の間も靜な思をした事がない、たとへ一日でも妾は廣々とした野原でお百姓がして見たい。

同感、但し長くて一年

○こほろぎ　廣島縣　賀川みづえ

灯があるからてせうこほろぎが一匹飛んで來て哀しさうに鳴きだしました。妾は何となく悲しうなつて、遂編物の方が嘘になつて淋しいやうな深い思に沈んでゐましたら、胸を病んて寢てゐられる兄樣がまアー唐突に

「みづゑ、何を考へる?。」と仰有つたので吃驚りしました。
無言と無言

○目的　信濃　小林美喜代

私は目的などは毛程も思つた事は有ませんのにどなたのお家へ行つても來て居るお客さんが「貴女お年はお幾と」聞かれますから本年十六才になりましたと言へばてはもう何かお目的は!! 私し人集の所へは恥かしくて行けません。
目的などはございません

○夜の森　信濃　太田喜志子

木の精に逢ひたいと思ふては夜の森を慕ひます、詩を考へたいと思ふてはその暗い寂かなところを慕ひます、木兎が啼いた、……あゝざわ／＼と鳴る、其の音、木の葉の音しのび足に近よつては身ぶるふて退りまた慕ひより。とう／＼其處へは行き得ません。

○機織　越後　鈴木梅子

私の家では毎年少宛春蠶しますが皆眞綿にして仕まひます、今年は織つては如何とのお父さんのお言に姉さんは糸取お母さんは機織ついてだからと瓦斯糸を取寄せ漸く成功つたのは羽二重二反節紬一反瓦斯二反
一家一年の衣料

○賓　本郷　はる子

お父様は始終田舍へお出張て、月に一度位しかお歸りになりません。お歸宅の夜は、小さい妹と弟が其の兩手を引つぱつて、僕の父様だ、あら妾の父樣だわ、つて爭ひます。するとお父様は、誰の父樣でもないお前逹は皆おれの賓だ、つてにこ／＼しながらおつしやいます。
平和の神降る

○私の重さ　山城　幸子

宅のお祖母樣は、いつも足をふんでくれと仰しやいます。幼い時は輕うて結構と、お云ひてしたのに、先日ふみますと、御免／＼、ながくふんでもらふものなら、足がつぶれるだらうと、ニッコリお笑ひてした。私其樣にひどく重くなつたのかしら。
發育完全

○飲水　佐賀縣　橋口御幸子

一間半に二間の小家、中央から大松が一本繁つて居ます、其の根本から淸い／＼水が湧き出るのてす、一體此の村は飲料水に乏いのてすが朝は五時頃から七十戸の男女が掬みに出懸るので八時頃になると戸が締り、錠結となります。
水道もある世に

○家庭の風習　安藝　手島まさ子

私は兄弟五人てしかも女子ばかり、家庭には面白い風習がある、四歳迄

は母様と寢る、五歳になるとお使をしてお父様と、十歳になれば通學の傍お食事のお手傳をして姉と寢みます、かくて漸く一人で寢る様になれば、せつせとお嫁に行つて仕舞、二人の姉はもう嫁付いだが、私は今年十六歳まだ妹と寢て居ます。

果無き夢

○夢　熊本市　峽　よし子

無言であつた露子様はふと私にこんな事を仰言つた、嘉子さん此の世で一番嬉しい事は何?て、私は心にかなつた夢ですわといつた、では一番果敢い物は?て、又仰言つたから、私はやはり夢と答へた。

才女と才女

○ようかん　麹町　なゝしぐさ

お歸宅迄にはようかんのおいしいのをこしらへておきますと花子さんの御言葉を樂しみに歸りますとコーヒー皿にようかんらしいものが入つてお匙がついて居ます、おや、と伺ひますと「かんてんをお湯でときましたのでちつともとけませんまた買ひにやるのも大變でしたからあんの中に浮かしておきました」とにつこり、

恐らく料理書にはありますまい

○長夜　牛込　野村　光子

一閑張の艶々しい机の宛ら面も映るやう燕の水入から滴す淸水は玉露とも擦る墨の香も高く筆先をそと咬んで硯の海へ白毛の半は墨に染んだ延べた白紙へさら／＼と彼の君へ參らす文をかしこと止めて身を起すと注がれた櫻炭も半白く夜長の秋も更け渡つた。

彼の君が氣になる

○天龍川　靜岡縣　富永　朗子

冬川や風蔭もなき土手三里、誰やらの句が思ひ出されて、そは冬の日である、天龍の堤は長い、枯柳一面に垂れて、冬陽淡く河原の石は白い、川面からは絶えず水蒸氣が揚る、と對岸の白壁紅く夕陽にそみて、あゝ冬の風は寒い。(西岸に立ちて)

荒涼たる冬の天龍川、此文少しく力足らず

○鶯の巣　石狩　檜澤　元子

鶯は其聲の如く巣も又奇麗であります、獸の毛や草の根をひろひ集めて。丁度ゴム毬の樣な形となし脇の方へ出入口をつけ、そして雨の多い年には高い所へ、風の多い年には低い所へ造ります。

見た人は少いでせう

○葉書　熊本縣　高崎春江子

今に雨が降り出さうとしてる夕暮に葉書が參りました。私は机にもたれて讀みましたら、嗚呼この葉書、讀まねばよかつたと思ひました、それは今年の三月まで共に同宿して熊本縣立高等女學校に通つて居た無二の友菊枝樣の死去の報知でありました。私の眼は涙が滿ちて開かれま

せぬ、暫しから無言。正氣に戻つた時はもう雨が降り出て居ました。

雨あつて此文活く

○稲

秋田縣　佐々木貞子

毎年櫻花の咲く頃種を蒔いて、百合の花の咲く時分には植ゑ付けます、そして薄がなびけば刈り初めて、紅葉の色づく頃やう〳〵とり仕舞ふのです。

海苔實り

美あり、實あり

三重縣

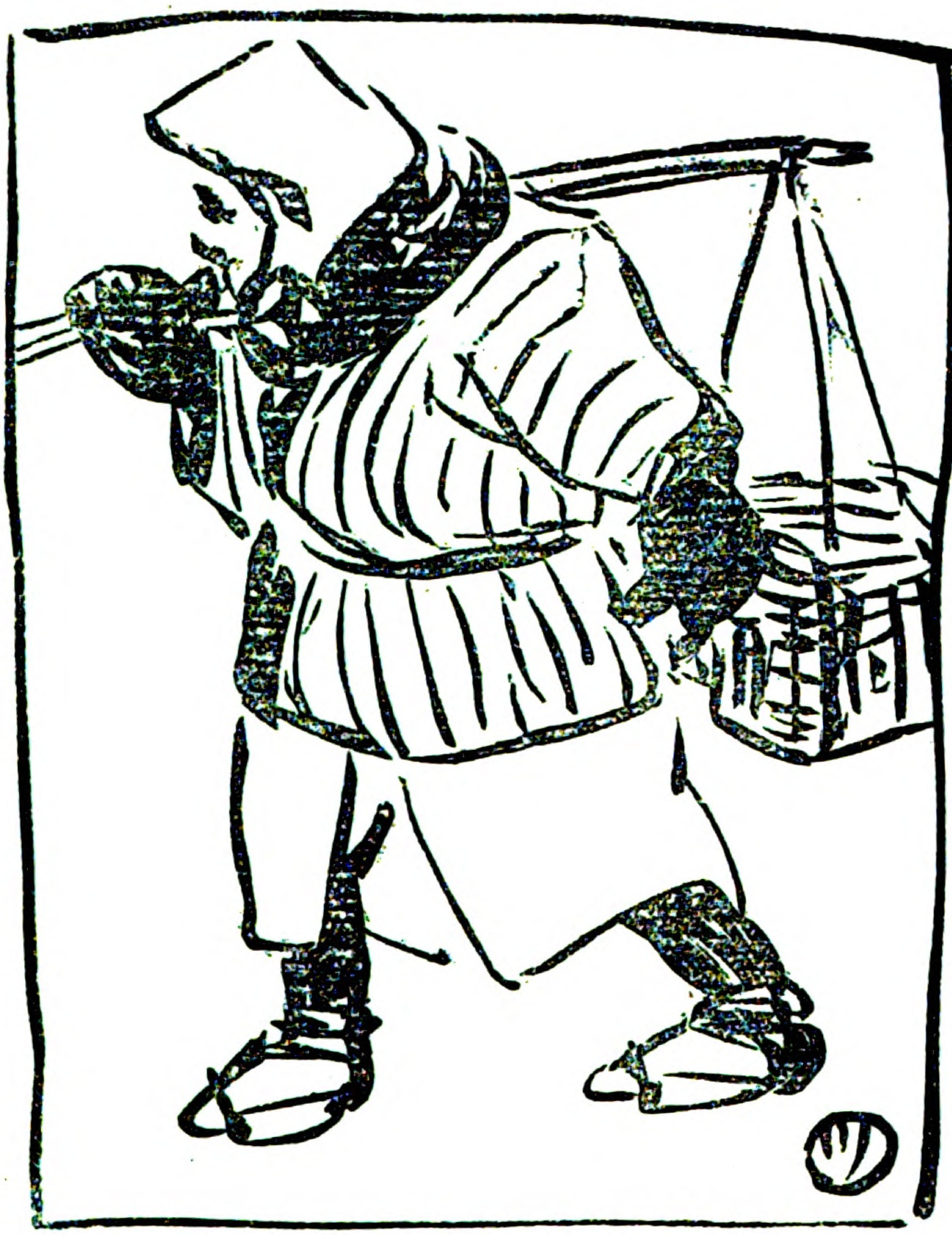
○悲しき時

常陸　りう子

加藤つたえ

世の中て一番悲しいのは何てせう、慈母にゆかるゝ時てせうか、信頼した友に捨らるゝ時てせうか、望が絶える時てせうか、戀を失ふた時てせうか、はた良心の苛責に苦しめらるる時てせうか。

苛かなし



○奇

播磨　野菊女

妾は今年十六てす何故か斯うそよふる雨やか弱い草花などに會ふと何時となく不知々々見入つてしまふのです、すると淋しい樣な物足らぬ樣な感想が果てもなく涌いて胸の奥は深い〳〵地の底から細くて强い落髮の樣な者てジリ〳〵引込るゝ心地がいたします。

○變遷

下野　小林芳子

お婆さんが若い昔は、前の畑へ猪が芋を堀りに來て困つたといふが、今は此邊ては兎一匹見ることも出來ぬ、三丁と續く林が無いのてある。其頃一ケ年の家の經費は

十圓で間にあつたとやら、今は月額六十圓づゝ無ければならぬ。

○うちの花園　　青山　清　子

うちの花園は僅に五坪、培人は父と私、今丁度ダリヤが眞盛、菊も蕾を持ちました、金蓮花松葉牡丹もまだ元氣、丈高いコスモスの白と黄赤の花は、風に舞ふて居ます、隣の園の四つ目垣には御所柴が綠こき葉の間から、紫の可愛い花を見せて居ります、

○時候　　伊勢　芳枝子

素袷から單衣に移る時分が、一番私には厭な時頭痛がしだす、單衣の肩掛等を掛けてゐるのを給に更へ樣とする時分、私にはこれも一向時的に覺えられませむ、夕暮れ時にヒヤ〳〵した風が吹くと頭が冷たうて窓の方の頭がシン〳〵する何かしら心配ばかり。

○寫眞　　本郷　箏　子

母樣のお髮に、白髮を見た時、私は急に胸が一ぱいになり、「母樣一緒に寫眞撮りましやう」と申し上ると、「厭うされえ」と笑つて被入る、強いて云へば何だか其死期を急ぐ樣、と云つて私は唯一度お膝に抱かれて五才の折寫した限りなのです。

○三ツの樂み　　京橋　伊東　とく

石の上にも三年と申しまして漸やく花の都に住みなれた私は淋しい一と頃ながらも心の中には忘れがたい三ツのたのしみが有ります第一には親愛の女子文壇第二に自分は今某局へ雇はれて居る身ですから日每忠實に勉めて行くを樂しんで居ります、もう一ツは戀しき古郷ゝりの音づれてす嗚呼此の三ツは私の大切の命として居ります。

○湯殿　　京都市　木俣津夜女

窓からそうつと湯殿を覗くと、春の香といつた樣な暖かい樂い香がぷうんと匂ふ。姉樣は湯から上られたとこ、湯氣の霧の中に美くしい白い肌がほんのり浮いて見へる。姉樣と呼ぶと、「えゝ。」とふり返つて嫣然笑まれたお顏の美くしい事…………。

○雪ちやん　　山口縣　深山　鶯

雪ちやんは日あたりのいゝ椽端で卷紙をのばして一心にお手紙を書いて居ます、そつと近寄つて後から盜み見ますと、角の立つた平假名と圓い片假名をとり交ぜにして……。と振りかへつて「アラ姉さん嫌だア」と妾の顏を見てやさにらみするんですもの！。

○見送り　　愛媛縣　志　女

二人並んで汽車の中へお掛けなさるお齢は召しても血色のいゝ父樣と憔悴せられた兄樣とを見較べて何となく淋しさを覺えた、兄樣は福岡大學病院へ被入るのだが……。お隣の叔母樣の甥は骨に成つて歸りましたと仰つたのを聞てゐる私若しや兄樣も此儘――と思ふと俄に胸が潰れて。

○夕　　芝　妙　子

風もない靜かな夕暮てすじつと椽柱にもたれて庭を眺めて居りますと何だか淋しい樣な氣がします秋の花が根に歸るのはこんな夕ぢやないかと思ひましたぷうといゝ匂ひが垣の木犀が香を送つたのでせうぽつり屋根に音がしました。

○思ひ思ひ　　京都　かをる

嚴しい姑樣は日每氏神樣へ、安産の上に猶、男を授け給ふやうお願に行かれる。夫は男さ男にと決つてゐる、と仰しやる。八才になる義妹は御二人の望を眞面目に打消して妹を生てくれと願む。あゝ、けれど自分は男でもよい、女でもよい、唯人間並の體と心とを持つて居るならば。

○愛する花　　相模　鍋田美代子

お爺さんは白梅を、お婆さんは緋桃を、お父さんは菊を、お母さんは藤を、兄さんは水仙を、姉さんは朝顏を、私は木犀を、妹は菫を弟は姫百合を、最も愛する花でそれ〴〵庭に植え、又よく花が咲くようにと、正月の七草のお粥まで與へるのです。

○秋の野　　水戸　重　子

兄樣、新嘗して稻に實が入つたのを見ると、嬉しいけれど、向ふの山を見ると、何んだか秋は淋しいのれえ、話して居ると、突然犬が、ワン、垂穗の中の雀が一度に、パサツと、飛出して、柿の木に止まつてから、チユチユツと、鳴きだした、

○秋の日　土佐　宮内白ばら

夕涼ひから踊つたのてせう、既にさはがしき踴手の人聲、物音、つゞひて芳ばしき香、オヤツと、微笑む耳元て、「姉様いらつしやいな栗が燒けましたよ」、「アイヨ」と答より先に立ち上つた私は、何故てすか、「秋も更けた」と、かうつよやかずには居られませんてした。

○落穗拾　池田町　寺部　君子

所謂秋晴の閑な日て有る、稻田はそよ風にさや〳〵と波立て居る。キリ〳〵と羽音を立て飛んだのは蝗螽お夏て有る、ばさりと稻の中にとんだのがイナゴて有る、それと思ふて見ると既う姿がお見えぬ、眞個にすばしこい。稻田を分けると下は一面散た斗りの稻の花て白く成つて居た。

○秋雨　栃木縣　千葉　花子

時男さんは椽側に立つて、いぢけて雜草の中に咲いた小さな白い菊を指さして、「淋しい色だれ」、としんみり云ひました。明日は家を離れて遠い二百里の旅に出るのです。しと〳〵秋雨が降つて來ました。

○お紅　岐阜縣　篠田とみ子

私は外出の都度大抵お紅をさす事にきめて居ります、別にみえを張ると云ふ譯ても有りませんが、とかく女といふ者は口數が多過ぎてとり返しのつかぬ事を仕出すものてすから、せめて、憎まれ口や無用の言葉もて唇のお紅を薄くはせまいと、心得に致します。

○蔦の葉　京橋　福田　琴調

私は、離れ家の椽に腰を掛けて居た。折しも、秋の風が悲しさうに吹いて來ると、屋根の上に生ひ茂つて居た、蔦の葉の半分枯れたのが、ひら〳〵と、飛んて來て、私の膝の上に落ちた。往來を通る人の下駄の音が、たゞ、この、秋の寂寞を破つて聞ゆるばかり。

○露　福岡　菊の露

髮を洗つてほしながら文壇の増刊美人草を見て居りました　ところが口繪の美人草の上にポタリとしづくが落ちました丁度露を置いた樣て實に奇麗て御座いました。

○如何しても放されない　長崎　江副　女子

「もう御嫁になつてそう、いつまでも學生の樣に女子文壇に熱中せずと、ちつと婦人世界だの女學世界だのを、よみなさい」と母から、いつても小言いはれますの、私どうしても放されないわ、御嫁になつても、御母さんになつても病氣しても死んても決して〳〵放さないわ。

○五厘　和歌山縣谷田　蜂子

櫻餅九つて四錢五厘と云つた茶屋の婆に、五錢白銅貨一個をなげ出してやつたら。御有難うと云つたまゝ釣錢をも呉れやうともせず。傍に居た小兒が、婆さん五厘のお釣―と促せば婆はいゝわと濟し込んてゐる。妾も負けん氣になり、碌せし櫻餅一つつかみて出てぬ。

○行き合ふ人　京橋　前澤百合子

馬車に乘つたお方を見ると、あゝ恥かしい事自分のからだを眺め眺めて何時もとんでも無い方角へ行く事があります。道端に頭を下げてお錢を乞ふ乞食を見ましても、私なんかお錢なんかないわ、と又自分の身を眺めます。是は私が一番つらい日々の出來事てあります。

○妾の境遇　若狹　津田　汐汀

妾は名高い紫式部が、山は春日か三笠か後瀬山と詠はれた後瀬山の麓に自然を友として暮して居ます、別に不足と云ふては何もありませんが、この上にお母さんとお友達一人があつたらと、朝な夕なそれのみ思つて心淋しいのです。

○遠山　大阪　河合加津子

私は市の眞中に住むて居て、郊外へなんぞ出る暇はありませんから、少しものつびりした事はありません。ですから毎日夕方になると、屋根へ上つて西の空を眺めます、すると或時は海原が見へ、或時は山脈が見えて、居ながら種々の絕景に接しられます。

○虫干の日　本郷　千代子

けふ虫干をしたら瓊筋の底から姿が生れた時の初着が出た、鳳摸縞の縮緬に緋綸子の裏れの可愛らしい一つ身、此は去年の秋此家へ嫁ぐ時、お母樣が入れて下すつたのだ、妾は早く此着物を着せた子を抱いて、二十年前の妾其儘の姿を

お母樣に お目にかけ度いと思つた。

一日中の樂

澁谷　柳雪

私はいつも其の日の用事をすましてしまつてから柿の木の間にハンモツクを釣つてそれに横たはつてやはらかな夕風に吹かれながら「秋の夜」や「湖上の夜景」を歌ふのでござゐます。

○原稿

根室　白雪

思ひついた事、興ののつた時に、何でもかでも書いておく。文壇をよむと、氣がついて、投書しやうと、淸書する。今夜も、半紙半分に書いて、さて上の一枚をとらうとするととれぬ、どうした事かと裏をかへして見たら、新らしい半紙と思つたのは、草紙の裏であつた。

○雜誌の評

播磨　內藤松園

試みに人に例へて見ますならば 少女世界は十二三の少女、女子文壇は十七八の女學生、女學世界は廿才前後の若奥樣、明星は詩人、心の花は深山の佳人、敎授指針は小學敎師、文藝倶樂部は會社員、新小說は小說家、太陽は堂々たる日本紳士とでも申しませうか。

○私は

平戶　伊知子

女子文壇を買に行つて直ぐ表紙を見瞬途口繪や満氏を見て家に着てからは小說、美文、日記文、實用文、論文、新體詩、お伽噺、一ぺいじより英語迄、短文、滑稽談、文壇餘興、學校生活、和歌、俳句、新歌謠、と讀んで其先は何日も發選しとするのであります。

○嬉し悲し

みえ子

昨日は弟が生れたといふ嬉しいお手紙に接して一人ほく〱喜びながら土曜のくるのを待つてゐましたら今日は叔父樣が死んだとの悲しい知らせがありまして 豫定の三日よりも三日早く歸ることになりました。

○花子ちやん

熊本　荒木やえ

御父樣が六才になる花子に目上の人には何でも讓らればならんと敎へました或日電車に乘り込んだ時大變客が多くて立つてゐる軍人がありましたから花子は御父樣の膝から滑り下りて「叔父樣こゝに御かけなさい」と申しましたから皆大笑いたしました。

○露

神奈川　小林英子

庭いつぱい空を蔽ふて擴がつた柿の木の枝に茂つてゐる䅣の葉からこぼれる僅な光が淸い淸い露の玉をのせた芋の葉にゆらいて光る玉がさつと吹き來る風にはらはらと散る輝く玉を硯に受けて私は虫籠に添えて姉に送る手紙をかきました。

○田舍

肥前　登代子

町のお方が入らつしやると直ぐまあいゝ香だ事、田舍の香かぐと生延ろとか、田舍に住めば長生するとか田舍てなけりやと色々おほめ下さいますが、妾は十餘年住んで居る田舍の香がどんなものやら、まだ一寸も、存じませぬ。

○夕時雨

佐渡　中川ふじ

廣々とした稻田は、すつかり、刈り採られて。人の影も無い、淋しい夕まぐれ。空は曇つて居たが。つめたい風が、一陣吹くと、相川山の方から、靜に降り出した。

○平和な村

大阪市　高間もと子

秋風が吹いて稻はとれた。鎌の跡未だ新らしい切株に日薄う照つて、村は平和の色が滿々て居る。今年は豐年である、老ひた人、若い人、人皆の笑ひ聲も常よりは變つて居る、貧しい太助の家でも子供が晴着にとお竹は針の手を急はし相に運んで居る。

○入佛式

尾張　志津子

夜はふけた、空を星が一つ南の方へ流れた、草には夜露が一面に濕つてゐる、今宵は裏の大正寺の入佛式で、赤い提灯が燈つて居る、女も、子供も、老人も多く參りに來る、門前には燒栗屋、甘酒屋のが明るい、本堂では今漲花節の最中てある。

○姉の墓

神戶市　萩原秋子

鐘が鳴る、あの眞紅葉の纏ふた鐘樓から響いて來ます。妾は又その響に耳かたむけながら姉樣のお墓に佇みました。天にお歸りなさる姉樣！地の齡は僅か十歲でした。ふと墓の下を見ると冷たい秋風に枯れた桔梗が寂しふ咲ひて居ました。

俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は每月十五日とす、懸賞は丙種の規定に據る。

天

惠心寺に寄進の衣擣つ夜かな　越後中頸城郡吉野村　藤原泣黑子

地

伐りし木を谷に落すや霧の中　難波　井上芳尾

人

蝶一つ手捕りにしたり今朝の秋　美濃　立川はな子

別れんと思へば寒し笛の音　鹿兒島　池田きり子
鯉の餌に浮きまじりけりこぼれ萩　白漣女
ごう／＼と轟く瀬戸や青嵐　なだえ
菊咲かば來よとの文や都より　四多摩　田中ます子
夕陽や鮎取る川の櫨紅葉　文子女史
美くしき人は立ちけり萩の門　南豐　藤の家瑠璃子
名月や邪もなき顏と顏　信州　山之内はじめ
張板の更紗乾くや秋の蝶　靜岡縣　小長谷ます子

影干しの衣に蜻蛉や秋日和　長崎市　さだ子
秋來れば匆來の關も虫の聲　神奈川　小林英子
味噌樽の陸に虫なく臺所　上毛　山田とり子
水瓶に沈む金魚や秋の水　上野　小林伊志子
乙女子の猫にしたしむ炬燵かな　駿河　天野白藤
窓先きは青田三里や風薫る　佐賀縣　樋口御幸子
鳴なくや一灯赤き澤の家　常陸　宮本楓子
芒苑や尾花亂れて月一つ　神戸市　萩原秋子
さゝ栗や笯なつかしき乳母が里　長崎　松尾かづ子
木枯に釣し柿あり納屋の軒　京橋　植松誠子
都戀し戀しとうてる砧哉　相模　藤原下枝
渡り鳥滅の三日の長かりし　芝　長谷川靜枝
夕日さす濡れ艫ぬれ帆や通り雨　妙子
病床に歌人侍んべる小春かな　鹿兒島　山下敏枝
霖や山寺に入る小提灯　靜岡縣　中村園枝
雁鳴て越後を思ふ小女郎哉　上毛　岩田うばら
明治四十一年も早や暮るゝなり　兵庫縣　中島八重野
衣縫ふ燈火くらしかりの聲　下谷　小川とも子
蕗詰めの蛤着きぬ冬の雨　山口縣　岸村文子
七堂の灯冷やかなり露時雨　北豐島　小林しげ子
白露や一燈ゆらぐ杜の中　巣鴨　片岡昌子
蕉翁が雪見給ひし草鞋哉　兵庫縣　中島信子
稻妻に數ふる磯の小松哉　下總　小倉すみ子
いたづらに吟腸寒し夜の菊　伊勢　かすみ
咳けば響く御堂の夜寒哉　青森縣　島村花代
寒月に燈臺遠き岬かな　京橋　細川榮子
菊の香や雨のほだしのうす月夜　淺草　鏑木幸枝
鶯の老音もゆかし那智の山　和歌山　谷田峰子
朝寒の露のくもりや窓硝子　麻布　吉田愛子
河鹿鳴く谷川白き月夜哉　宮崎縣　卯の花子
物種のふくろのごみや秋の蠅　宮崎　下川孤子

朝寒や三尺白き馬の息　相模　飯田美代子
月よき夜聞くや一里虫の聲　肥後　愛甲辰子
菊の香に堪へて人立つ山路かな　伊豆　學田早苗
葉折りてひげに露散る鎬かな　神奈川　上原露葉子
蕪洗ふ人の手赤き寒さ哉　福井縣　片山千里
讀みて一人ものうし秋の風　岐阜市　篠田とみ子
名月や壁の樂書たゞ讀みぬ　牛込　松田廣子
泥足の小猫を叱る霜圍かな　芝　小林秀子
酒酌みて歌よむ人や年忘れ　京都市　堀尾ゆき子
秋はもの丶悲しとかこつ夜泣石　岩代　川名直子
蟋蟀の聲澁にあるく寒かな　上毛　喜代子
秋晴の空を眺むる少女哉　下總　越川つれ子
小狐の風に佇む枯野かな　千葉縣　關つる子
寒むいさむいと銃ずさりする幽所哉　胡蝶子
稲妻に一つ／＼の稲穂かな　廣島縣　和田靜枝
雲低く淺間の峰も秋の風　能登　花集
芒野に鶉捕へん投網かな　大阪　石川まつ子
明月や山を離れて水の影　靜岡縣　飛奈久枝
縁先の猫丸くして小春哉　豐後　さくら女
筆を措く掉尾の作や秋高し　王子　山脇數子
我が友と名殘惜まん古都の月　遠江　長岡芳子
稲守る案山子の弓に夕日かな　熊本縣　高崎春江子
風さむく蜘蛛は木の葉にかゝりけり　岩代國　齋藤みつゑ
上香のうはすべりして秋はゆく　廣島　賀川みづ繪
手を打つて鮭買る人や年の市　相模　山本ひろ子
秋の水唐黍畑浸しけり　京都　吉田しづ枝
石壇の下へ／＼と紅葉散る　大阪市　辻廣子
菜の花の道や涅槃の人通り　兵庫　杉山春翠
琵琶の音にあはれ今年の秋も行く　大阪　豐島文子
名月やお伽芝居の歸りみち　京都　北村花楓子
月影の障子に餘る芭蕉かな　大分縣　阿南しのぶ

孤兒院に孤兒の遊戯や秋日和　若狹　山田小濤
化粧する鏡に秋の影寒し　佐賀　田中榮枝子
美しき落葉數へん秋の水　茨城縣　須崎緑子
芋の皮と共に捨てける扇かな　大阪　西戸政江子
町中に鶏飼ふ家や菊の花　三重縣　川原みさを
萩ちりぬ芙蓉みだれぬ秋の暮　福島縣　西野ひさし
萩の露うけて歌かく月夜かな　滋賀　ふき子
山莊に詩人誦ずる夜長哉　陸奥　栄苑女史
名華も野の黄昏の落かな　大阪　南紅涙女
寒月や佛の像のたまり水　神戸市　幽香里
秋風に三味ひく人のやつれけり　若狹　津田汐汀
吾庭は松一本の冬がまへ　石川縣　岡谷久枝
天の河横ぎりとぶや雁一つ　群馬縣　藤橋君代
行秋やちぎれ雲間の雁一つ　札幌　蝶哦忍子
朝戸出に袖ぬらしけり萩の露　鄙、岡　菊の露
沖通ふ船のマストに今日の月　大阪　香雲子
啼くや鹿三笠の山の月の夜に　大阪　宮田なか子
雨寒き堅田泊りや雁の聲　大阪　玉村ふじ子
霧にもならで露道あるく人哉　丹後　吉田せき子
夜嵐の音を朝見る芭蕉かな　秋田縣　梅澤ふみ子
我が戀は月と汝よ竹婦人　牛込　兒松吉江
風寒く月さゆる夜や銀杏散る　岩代　五十嵐久夏子
秋ふかしあさし谷間のむら紅葉　下野　須藤SA子
卓上にちさき名瓶や菊の花　日向　水村豐子
油盡きて月に砧を打つ夜哉　宮崎　日野濟子
桐一葉たま／＼落ちて池の中　大坂市　大島しづ子
夜半の秋瓢叩て興しけり　福岡縣　杉山光子
稻雀追ばうづらも啼きにけり　宮城縣　齋藤きくの子
藁屋根の中新し里祭　神戸市　落葉子
朝霧のつゝみもらし丶芙蓉哉　明石　平谷たつゑ
薫風や青き疊に晝寢　周防　里の人

實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以内用紙も締切日も前同斷、懸賞は乙種規定に據る。

地 ○伊豫より

松山市本町三丁目　大本花代

夜長の徒然によし無し言書き並べ候

私の住むは中之川筋とて東より西への町、窓の下を中之川の水、さゝ濁りして流れ居り候。家主の老婆が自慢ほどありて小じんまりしたるれんじ附き間數も三人には廣すぎる程にて疊の香も未だ新らしく、貸家らしからぬ庭に今コスモスの紅が眞盛りに候

後はすぐ勝山とて十五萬石のお城の殘れる木立の深い山、此の頂きに鳴ると云ふ手砲のひゞきにはいつもいつも耳を塞がされ候。此の邊りは屋敷町とていと寂しく候へど一歩西に歩み出せば大街道や三番町とて心齋橋そのまゝの繁華もこれあり、散歩には一町東へ、風かほる野面の美しく候

南に小手かざせば久萬の翠黛淡く、この川を西へ〳〵と行けば茸多き西山と申すに候よし。西北へ二里は松青く砂白き梅津寺濱。半里東に道後の鷺の湯淸らかにて道後公園の月見も可笑しう候はずや。

松前の濱より來ると云ふ「おたゝ」と申すものこそ、類なう珍らかに候へ。大抵は若き女の、赤帶ぐる〳〵と巻きつけたるが、尻つき出して大股に、「鯛や鯖やお買いんか、海老の引きだちお入りんか」と無風流極まる賣り聲を出すを見ては、そゞろ御許樣にも見せまほしくて。

兎も角も氣候もよく、水も淸く、魚も新らしく、松山とは好ましき土地に候。

（評）洗ふたやうな筆の走り、老熟と謂はうか。平凡のやうで、其の中に言ひ知れぬ面白味がある。感服しました。

人 ○嫁して後友の許に

牛込區市ヶ谷佐内坂町十二　松田廣子

月日の小車は廻り〳〵て流るゝ水よりも早く、當地に參りましたのも昨日今日の樣な氣がいたしますが、もう一年近くになりますのね、まるで夢の樣ですよ。御許樣にはお變りもなう日毎糸針の道にいそしみ給ふよし、どんなにか御上達なすつたでせう、羨ましうございます、文子さん、先日も一寸申上げましたが實に娘時代程呑氣な樂しい時は又と御座いませんよ、私も閑

さへあれば過ぎし年の面白かつたことゞも思ひだして、今の身分をも忘れてしまひます、何でも心の持樣です、けれども年若の中に嫁せられ、西をむひても東をむひても知らん人ばかり、一寸外へ出ましてもあれは何處の嫁子よと、皆々穴のあく程みられ、自分は何も足らない勝ちだのに世間からはもう一人前並の嫁の樣に思はれて、其の情けなさつてありません、この樣に辛ひ思ひをするよりは一そ一走り國へ歸らうかなぞといふ淺墓な考へも間々出てまいりました事もございます、然しねこゝが學校や家でくれぐれも敎へられた忍耐のし所とあきらめ、目をつぶつて暮して居りますうちに、追々と人にもなじみ、恐ろしいものと思ひこんで居りましたお姑樣も今じや生の母樣と同じく色々と親切に敎へて下さいますし、世間で鬼千疋なぞと云ふ義姉妹だちも、實の姉妹の樣で互ひに助け合ひ力になります、ですから今はそんなに苦い事もございませんでたゞ〳〵來るお正月を指折りかぞへて待つて居ります、然しね一番骨身に染みて感じた事が御座いますよ、それはねお料理は家に居りますじぶんは、こんな事本さへ見ればもう直ぐ出來るものよと考へて編物とか生花とか、そんな事ばかりして居つたでせう、ですからもうお話にならん程心配いたしました、そりや編物だつて不必要じやありませんが、お料理ばかりはいざとなり本を見て善い加減に出來ますればよろしうございますが、中々さうは參りません、常々の練習が大切だとつく〳〵感じましたよ、あたし、あなた樣などもいづれお嫁しなさる御身、たとへ御自身がお手を下さづともよいにしろ、其の心掛が大切ですよ、細かしい事はお目もじの上御話し致すことにして、夜もいたく更け、何となく淋しうなりましたから今日は是れて失禮いたします、時節柄御身は大切になさいませ。

（評）才があるもの、誇らかなるもの、さてはわれを飾りたさの似而非文章の多かる中に、女の文としてわれは此の文の如きを好む。

秀逸

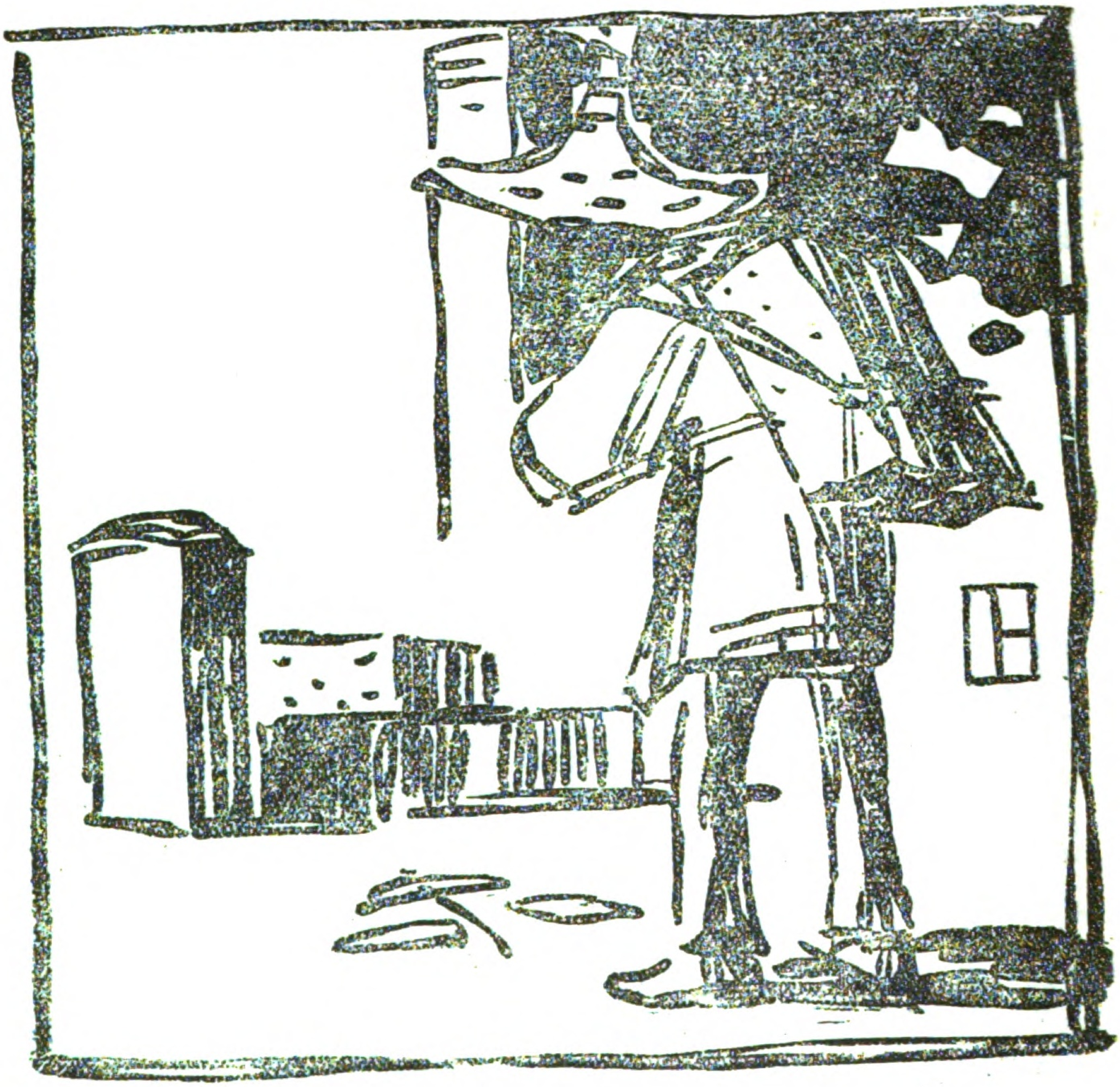
○寄宿舍なる姉に

京橋　植松誠子

姉樣、秋になりましたねえ、愛宕山の楓が紅く色どられて、柿の梢に實があか〳〵と、空の雲が追々少なくなつて水彩畫をかくには丁度いゝ時節ですこと!、姉樣が三月いらしつた時、植ゑたあの一輪咲の菊も美しい蕾を持ちましたよ、此の頃は毎日のやうに妹の松枝を連れて蝗取りに行きますの、今日も行つて澤山取つて來た事よ、お池の緋鯉も中々大きくなつたわ。姉さん秋は淋しい事ねえ、八月姉さんがいらしつた時、八幡

様の縁日で買つて戴ひた鈴蟲ねえ、あれも、もう死んでしまつてよ、蟋蟀はね、もう瓜の種がなくなつて可愛さうですから裏の南天の木へ逃がしてやつたの、始めのうちは二三日、松蟲と一緒に枯れた細い〳〵聲で啼いてたがもう此頃はなかなくなつてよ、屹度死んで蟻にでも引かれてゐるのでしよう？、何んだかこんな事を考へると、急に可愛さうになつて、それでなく

石切屋　陸奥　立花とも子



てさへ此の淋しい秋が一入哀しくなりますわ、東京の此の頃の有様はどうなの、寄宿舎の庭にも秋は訪れてゐるでしよう、家の梧桐の葉も散つてよ、野原の中へ取り殘された案山子や、寺の一本榎で啼く百舌の聲なぞ、聞くにつけ、見るにつけ、秋の淋しみが身に泌渡るのよ、鈴蟲の事や、蟋蟀の事を思ふと急に姉さんの事を思ひ浮べて、懐しさはこらへ切れないて此の手

紙を書く事にしたのよ、嘸今頃は姉さんが夕映の窓から田舎の空でも眺めて私等の事なぞを思つてゐて下さるだらうと思ひますの「燈下可親」てすつて、勉强は出來て早く試驗を濟ましたら正月には歸つて頂戴よ、もう敏子樣なぞと歌牌のお稽古よ、姉さんのくる迄にチヤンピョンになつて姉さんを負かしてやるつもりよ、濟ちやんと末男は私の手紙を書く傍についてゐます、早く御返事下さいな、末男にも濟ちやんにも……、

（評）しんみりとしてげに秋の文なるべしさても冷き寄宿舍の窓にこれを披き見る人の心やいかに。

○田舍の妹より

本郷千代子

姉樣、昨日は美くしい空氣草履を送つて下すつてどうもありがたう、何てきれいてせう、私の大好きな紫の鼻緒、ホントニ眼がさめる樣ね、うれしくて〳〵昨日は二三度持ち出して眺めてばかり居たので、お母樣に今夜抱いてお寢つて笑はれちまつたの。

賢ちやんもね、いろんな事云つて笑つてるの、姉樣は賢ちやんを好い子だつて仰るけど嘘よ、あんな憎らしい子は無いと思ふわ、今年中學へは入つてから厭に生意氣な事ばかり云つてゝね、私なんかもう頭から馬鹿にして居るの、小倉の制服か何かて不用ない日でもチヤーンとインキ瓶をブラ下げて氣取り込んて出かけるのよ、其樣子つたらホントニおかしいの、美津ちやんは相變らずおとなしくつてね皆に可愛がられるのよ、一番少さい秀ちやんと來たらそれは〳〵けちん坊てね今日なんかおかしいのよ、お芋を買ふ約束てね秀ちやんにも一錢お出しつたらどうしても出さないの、僕はお使ひに行くから出さないつて何と云つても駄目なの御母樣なんか大笑ひよ、私はね姉樣、家中で一番つまらないのよ、皆きかないから私が口出しするんてせうすると「大きい姿してどの喧嘩の仲間へもキットは入つて居る」つて、直ぐ姉樣はおとなしかつたつてお母樣が始めるの、ホントにつまらないわ。

それはそうと姉樣、赤ちやんがおてきになるんてすつてね、お母樣から伺つてよ、うれしいわいつ頃なの早く生れゝばいゝわね、男か知ら？女か知ら？どつちてもいゝわ、私もう叔母樣になるのね、喧嘩ばかりしちや居られないわね、お母樣なんかそれは〳〵大喜びよ、明日にも生れる樣な騷ぎなの、兄樣もお喜びてせうね、兄樣つてば相變らず面白い事ばかり云つていらつしやるてせうね、いゝ方ねえ、お父樣もお母樣も千代はいゝ處へやつたつて喜んてゐらしつてよ。

あら！キカンボ賢一が歸つて來たわ、また惡口云はれるからこれて止してよ。お身體お大事にね、お腹のあかちやんに宜しく。

（評）事がらの無邪氣なるに比べて餘りに熟せる筆と思ひぬ家庭のさま目に見るやうに寫されて面白し、

○里の母様へ

丹後　村岡笹舟

母上様、誠に御心配を懸けまして相すみませんてした。が此頃は餘程馴れ〳〵敷なりましたから御安心下さいませ。夫は申すに及はず、親お二人も親切に導いて下さるし美代ちんも朝から晩まて嫂ちやん〳〵つてもつれるのてすもの、妾こんな嬉しい事はムいませぬ。これも皆お母様の御蔭て、暮々も御禮を申し上げます。丁度一週間程以前の事てムいました。早朝私が裏の花園を散歩して居りまするト不圖後から「嫂ちやん」と呼ぶ聲がしたのて、誰かと振り向ひて見まするト、あの可愛い美代ちやんてムいました。

「御早いのね」と近よりますと

「嫂ちやん此れ奇麗てしやうとそれは〳〵美しい菊を一枝妾の方に出すのてす。「それ妾に下さるの、まあ嬉しい事、こんなのが有つたのなら何故此間花生をする時に下さらなかつたの」と問ふと「でも嫂ちやん、あの時は妾まだ耻かしかつたもの」お母様！家の者は皆が此の様てムいます。安心なすつて下さいませ。妾はつひ嬉しかつた餘りつまらぬ事を申しましたがどうか惡しからず。

御躰を大切に遊ばしますやうに、

（評）今まで母に送るといふのが澤山ありましたが皆友達へでもやるうな書きぶりて所謂その體を得ませんてしたが此の文を見るに及んで始めて、これで可しと思ひました、

○花がたみ

大阪市　木村春江

花様へ

色に香に、やがては實も、結ぶもの哉、頼もしからで、やはと、たびてし浪花津のこの花、又なきものに、めでては艶よき紙に疊みて詩集に秘めつ、只すらあせざらん事をのみこそ祈り候ひしか。世の秋風は御邊にもすさびてるや廿日あまり絶えはてし御音信の心もとなう又しても取出さるゝ花がたみ、朝夕の風に當りてはさしもの色香もやゝ移ろひて候。あはれ御心の程もいかにかして

友より、一、

色香、あればこそ春秋の姿もかはれ、あやなき心はいかて……音信絶えしは我れのみかは。その御恨は此方よりとこそ。移ろひて愛づるに足らじとならば只すて玉へ。さる御心には中々にこの木犀の花こそ適しからめかして

花様へ

いしくもまはる御筆に候哉、此度こそはと思ひし筆のほ先はまたにぶりて候。さらば心憎き御言葉は目前にて御返し參らすべきに、來ん日曜には心して御入らせ

玉へかし。催しの何なるかは問え上じなそは餘につらかりし御筆の報と思し給へかし　かしこ

友より、二、

さけかねし傷手に、打あんじ居候ひしに、またしも、この上の御計畫ありとは、折からの夜寒に、膽も冷果て候へば、よしなに御斷り申上べき筈に候へども、因來の海人の子禮てはものを辨へずいなむべき言の葉も思ひ當らず候、扨は當日早朝より、討死のほぞをかためて出陣可致候。かしこ

（評）例によって盗るゝやうなる才筆

○京都なる姉上へ

大阪　田中れん子

御なつかしき御手紙ありがたく取る手をそしと拜し上候ところ、御二方樣にはお變りもなふ日毎御睦まじく渡らせられ候よし父上樣もいとゞ御滿足に思召され候、

次に私へ對しての御注告かたじけなくいつに變らぬ御情のほど唯涙もて拜し上候、私一身上に就ては父上樣も始終御心配下され好き縁あらば嫁せよ我傍にありて朝夕世話をなしくるゝは嬉しけれど、又お前はそれを此上なき孝行の樣に思ひ居らんも親の身にとりては年頃になれば早く片附け度き心一ぱいなればと何時もしみ〲仰せられ候時は、餘りの忝じけなさに胸は一ぱいに相成申候、さらでも姉上樣お嫁入後は私一人をおたよりに遊ばし何事もれんよゝと御相談あそばす忝じけなさ、母樣なき不憫の我身にせめて父上のあらん限りの御情をかけて母樣なき不幸の身をかこたせまじとの御心、唯々涙の外はこれなく候、御注意にそむき又父上の御意にそむきまゐらするは誠心ぐるしく候へど、如何て此御情を捨てゝ他家へまゐらるべき、若し我行きたらば後は幼けなき弟と朝夕淋しくおくらし遊ばされんを、それを思へば譬へ百萬のお金持たりともまゐる心はこれ無く候、心中おすもいじの上惡からず思召下され度、兄上樣へお此由問え上今しばし縁談の義はおみのがし下され度くれ〲願上候。かしこ、

（評）着實なる筆、意のまゝに運ばれて些の冗辭なく、なか〱强き力あり、

○昨日の繼母上樣へ

備後　井上年子

たゞさへ佗しい今日此頃、ましてこの雨ては、いとゞ御徒然ていらつしやいませう。昨日までせめての名殘りを止めて、寂しい心の幾分かを慰めて與れました向山のもみぢも、今日はもうすつかり雨に包れて、ちつとも姿を見せません。日ねもす何んのする事も無しに、唯寂しい思ひその

み繰返へて居りましては、もう譯も無う悲しうて――お母樣慕しの念はいや增す計りです。

あゝお母樣――おゝ今ぢやもうお母樣ぢや無い他所の人――だけど私には何うしても――いゝえ何うしてもお母樣としか思はれません。あゝお母樣、とせめてのお願ひには――たゞお母樣とだけ呼ばして下さいませ。

思へば十四年前、私が未だ三歲の頑是無い時、生みの母はフトした事から病に付いて、遂にあの世へゆきましたとやら――。

稚兒髷に花かんざしのいる頃から、お母樣慕しの念は明け暮れ少さい胸に浮んで、長い夜半の目覺に添寢の乳を探つては、父が圓ろからざる夢を破つた事も幾度てせう。

あゝ私にはお母樣と呼ぶお方はもう無いのだらうかと、存じて居りましたら、圖らずもあなたがお母樣と呼ばして下さひましたので、まあ私の喜びは何んなでござひましたらう。殊にお情け深いお優しひ――私は私は生みの母よりもずつと〳〵懷しう存じました。もう是れからは淋しい孤兒では無い、立派なお母樣があると、肩身の廣いのに思はずほゝゑみましたが――あゝ思へばそれもほんの束の間――またもとの寂しい孤兒――お父樣に問へば、たゞさだめぢやと仰言る計り、何うした譯かは存じませんが、お母樣――としの心を可憐と思召して、永久に〳〵お母樣とだけ呼ばして下さいませ。

(評) 小說の中にありげな手紙、哀深う讀みぬ、

○後の月のあした友に

京都 か を る

晝の程より花よ供物よと總がゝりのさわぎ。前の夜の君等一人ももらし給ふな、片月見はさせ申さぬもの、と仔細がほの祖母君、母君は前の例にならひて十二疊の間と定めたまへば、今度は二階にとの姉の言葉に一決して打ちつれのぼりゆきぬ。妾は念入りに御琴の掃除はじめつ、しめ直す糸の一線毎に、あはれ今宵の月やすむ、はた妻琴の調やすむ、いづれ十三絃あるものを、月もすめかし音もすめかしと念じしものを、さばかりとは思はざりし空の彼に雨となりぬ。琴すてゝ、花すてゝ、恨し顏の人只我家のもののみかは、當夜は春子、父と兄とに「十三の女の心掛惡しければ今宵ふるなり」とさんざんになぶらる、常には似ず口答もせて見るものもなき瓶のすゝきをまさぐる樣。さるにても今の御空の淸らしさ、夜邊の供物に添ゑて、さらば日影さゝぬ間にと、かたけれど垣の白菊、亂れたれど庭の白萩、露なこぼしそと、よくよく申しふくめて。

(評) 淀みなき筆、佳、

新歌謠

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謠と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は丙種送呈



地

◎妾し十七姉さん十九二十三夜の月祭り　秋田縣仙北郡金澤町野川町　加藤うん子

數字も配合に依りて詩趣を成す

人

◎汽車はすぎます私の村の桃の咲く畑あとにして　相模國高座郡大和村下鶴間　山本文枝

此の「私」は乗つて居て歌ふ私なり

秀逸

◎誰れにやろとて水引きや結ぶ秋の七草さく中に　牛込　平塚白百合

◎月が出た出た十五夜の月が松と雲との間から　宮城縣　齋藤きくの

◎風よ吹くならたくさん吹けよあすはお庭で栗拾ふ　靜岡縣　飛奈久枝

◎箱根山路おかごで越せば萩やすゝきがのぞき込む　南品川　落穗

◎うれしや投書が始めてのつた本を閉ぢたり開いたり　大阪　紅女

◎桔梗の露に繪の具をといて庭の七草みなうつす　駿河　天野ふじ子

◎今年や豊作農家の娘帶や着物のふえる年　紀伊　田中文子

◎ひるは稲刈り夜はうすひきて笑顔ならべてうたひます　山城　八田文子

◎昨日英語で今日また歴史明日の試驗も氣にかゝる　相模　渡邊八重子

◎麥も蒔いたし稲田も刈れた嬉しいあすから裁縫に　秩父　近藤登久子

◎妾しや見ましたお山へ登り錦おり出すたつた姫　滋賀縣　宇野ふき子

◎上り下りの山道三里越へてわしや行く花賣に　土佐　門田ふじ子

◎　下谷　住の江すゞ

○萩の白床硯に受けてちよいと書きたや歌なりと　栃木縣　甚女

○草はおかごに一ぱい刈つた「ぐみ」があるよと友がよぶ　岡山縣　小林露子

○わしの兄樣ヰオリンが好きよ下手なくせしてじまんする　羽後　金まつゑ

○髮もいろ／＼結んで見たが丸髷ばかりはまだゆはぬ　仙臺市　北郷照子

○秋の花野に結んだ露を赤黃紫白みどり　京都　吉田しづ枝

○秋が逝くやら蒼海わたる白帆みたよな雲走る　神戸市　萩原秋子

○小萩いとしや秋風吹けば冷たい水にほろ／＼散る　神奈川縣　小林英子

○枕元にはお馬がチヤンと坊の寢顏の番をする　熊本　千々子

○稲のたりほの色づく毎に夏が逝きます秋が來て　新潟縣　長谷川さき子

○菊の香をリボンに入れてかけてみたいよ下髮に　大阪市　よしの

○いふにいはれぬ苦勞はみんな手紙にいはせた字のにじみ　南豐　安皎子

○散步がてらに田の面を見れば稲を刈るやらはこぶやら　三河　天野清子

○來たよ來ました知らぬ間に來たよ楓紅葉する秋が來た　信濃　太田喜志子

○白馬山とはよくつけた名よいつも白雪たえませぬ　下野　哲子

○花にうかれた夢さめたのか秋の夕を迷ふ蝶

○いつて見たいよ都の花見今に仕上げる晴着着て　奈良縣　元林白蘭

○晴れた日和も寂しい秋よ唄ふ小鳥に淚てる　岩代　長谷川みつ子

○繪の具が足らいで染め殘された松が見えますもみぢ山　和歌山　加藤重子

○妾なんにも怖くはないや家に父ちやん／＼母ちやんも居る　青森縣　花代

○投書したのが沒書になつた夢がまことて皆沒書　廣島縣　富田玉枝

○知らぬ他國で嬉しいものは人の情と道しるべ　信濃　小池いち子

○虫も死にます千草も枯れる眞んに淋しい秋の暮　秋田縣　佐々木園子

○妹の髮結ふ夜仕事おへて私手間とる妹ねむる　上田町　あい

○鎮守祭りかあらなつかしや笛に大鼓に馬鹿囃し、　京橋　植松誠子

○胸の園には今花さかり知らぬ少女が摘みにくる　若狹　片岡はる子

○あまり美人になつても辛い戀の矢文が山となる　信濃　駒澤ひろ子

○常陸よいとこ私しの故郷筑波むらさき水白い　水郷　千代子

○けふは天氣ぢや虫干しよか鎮守社で鳩が啼く　千葉縣　石塚澄子

○秋のさ夜中ひとりて行けば虫のなく音やふむ心地　茨城縣　佐賀よし子

○秋の鐘には泣く人多い心してつけ寺男　千葉縣　菅沼しげ子

○百合は白うて野に咲く花よ都住居はわし嫌ひ　播磨　野菊女

○啼くよこほろぎ草むらかげて月にこがれてあこがれて　麻布　山田正子

滑稽談

編輯局選



十六字詰七行以内締切日は毎月十五日懸賞は別種。

【天】

○子供ちがひ

靜岡縣駿東郡大岡村下石田　青木　靜山

私がまだ、よだれかけの時分叔母さんにつれられて洗湯へ行きました、其時面白い話があります、私とよその子と間違へて一生懸命で背中を洗つてやつて居り升と、どうも妙な聲を出すと思つて能く見ると、よく似た子供てしたとか話しては笑ひ升。

【地】

○電燈

石狩上川郡旭川町　山﨑みどり

ある晩の事、五ッになる妹に「お座敷の電氣が消えてるか、ついてるか一寸行て見て來て頂戴な」と申しましたら、暫くして歸つて來て「姉さん、暗くてわからないのよ」と言ひましたので一同大笑ひいたしました。

【人】

○馬鹿

福井縣　片山　千里

或日滑稽家の菊野さんの許へ參りまして、ご免くださいと申ますと、小母さんが馬鹿と云つて笑つて居られます、誰にだらうと思つて又ご免くださいといひますと、わかつたよ馬鹿と又小母さんが云はれます、すると奧から菊野さんがいらつしやいまして、あら千里さんてすかと云はれましたら、小母さんがえゝ千里さんてすか、餘り菊野がよその人のやうにして妾を欺ましますから、あれがと計り思ひまして….。

○きれい好

埼玉縣　岩田文澄子

きれい好の秋子樣、赤ん坊など穢いとて抱いた事もないのが、ご自分にお子さんが出來てからは、お座敷へおしつこなさると前掛てふいて知らん顔して居らつしやいます。

○警鐘

福島縣　笠間　さの

友子さんと御噺して居ますと、警鐘が聞えましたので、友子さんが何所火事なの、と云ひますから、あれ洪水て消防を集めるの、と云ひましたら、あら妾洪水に消防不要いと思つてよ、と云ひました。

○お化粧

本郷　千とせ

春子「あなたはお化粧がお上手だ事れ」
秋子「イーエ私色が黑いから駄目よ」
春子「アラ色の黑い方がお化粧ばえがするのよ」

○鶏籠

鹿兒島　帖佐よし子

私が先達本屋にいつて漱石先生の「鶏籠」がありますかと聞いたら新參の小僧「鶏籠は竹細工屋にあります」

○夢

若狹　津田　汐汀

妹「姉ちやん妾し、夕べ夢見ましたが、ほんとの夢てしようか、
姉「あゝそれはほんとの夢てしよ、どんな夢見たの
妹「姉ちやんが妾しに赤のりボンを買つて下さつた夢みたのよ。

○木目

岩代　美人草

花ちやん、しばらく盥の切口をみて居りましたが、「オヤ、母ちやん、此御魚に、木目があつてよ。」

○買つて出しますわ

肥前　とよ子

甲女「此度繭の品評會があるそうてすから精を出して養蠶して一等賞取る樣にしませう」
乙女「イーエ内て養蠶するのは面倒だから妾上等の繭を買つて出品しますわ。」

○精進

陸奥　紫苑女史

主人「今日は御精進だから魚類は食べないよ
下女「そんなら玉子ても…



新聞談（課題）

天 ○新聞の旅

石狩國妹背牛局和　繪澤元子

朝日新聞が當地へ着く迄には五日間かゝります、てすから妾の手て一枚の帶封を切る頃は、一枚は妹背牛の郵便局に、一枚は津輕海峽を走る滊船の中に、一枚は上野より青森行の滊車の中に、次の一枚は東京の本社に印刷されつゝあるのてありませう。

時間の活動

地 ○子守

甲斐　網野やす子

私の宅ては國民新聞を讀んて居ますが實に新聞の効能は偉大なものだと存じます。尋常科を卒業した計りの子守を四五月前から置きますが暇の時には新聞てもごらんと申しますと私には讀めませんものといふのを强いて拾ひ讀みをさせましたが無論意味の解りよう筈はありませんから私が後て話して聞かせると大層嬉こんて聞いて居ます、それからも暇さへ有れば讀む樣に云ひ付けましたが今はもう私のお仕事の側へ來て讀んて聞かして吳れます。

家庭の心得

人 ○配達の鈴

愛知　なてしこ

リン／＼リン／＼と氷つた樣な音をさせて横町を曲つたと思ふと勢よく「バサッ」とホーリ込んて後をも見ずに走つて行く、未だ鈴の音が絕えないのに妾の目は、いつか小說の欄に飛んてゐる、妾はいそいて讀み終ると、早速父樣の御部屋へ持つて行く、そして小說なんぞ讀むものかと云つた樣に、澄した顏して、「只今新聞が參りましたと、お机の上へ。

罪なし

秀逸 ○新聞と我家

滋賀縣　宇野ふさ子

お父樣は大阪朝日新聞が發刊されて一號から愛讀して居なさいます、始めは新聞も小さかつたそうてすが、今は頁も多くなつて九千五百餘號にもなりました、この澤山なのを一枚も缺かさずにキチンと箱に入れてあります、そして新聞と我家と、どちらが永く續くか試さなければならんといつもお父樣はお話しなさいます。

○配達夫

神奈川　小林英子

每朝九時頃になると、背中一ぱいいろいろな物を負ふて、さも重さうに「こんちは」と云ひながらは入つてくるのは、十年この方私の村をくばつてゐる新聞配達なのてす。

新聞をうけ取ると、例によつて明日の買物や、郵便物など賴むのてす。

○待つて頂戴

讃岐　讃岐女

私が新聞をよみ初めたのは乳姉妹が毎日新聞に出ました時てす其時私は拾二才てした祖母や母が縫物をして居る傍てよく讀んてきかせましたけれども其時は所々つまつては待つて頂戴とよく申しました今はそんな事なくよむようになりました しかし祖母がなくなりましてきく人も一人すくなくなりました。

○第一は文藝

羽後　菊池りう子

第一に見るのは文藝時報。而して文士の方々の御近狀を知つては樂んでる。見る度に腹の立つのは何でも彼でも劣情な事と云へば又もや自然主義の實行抔と大い活字てげふ〳〵しく書きたてる、此んな事をすると賣れるといふ、何だかいやになつて來る。毎日三面記事を見る毎に青年の自殺とか老婆の身投とか親を殺したとか何とか見ない事がない然も一年々々まして來る樣に思はれる。漸々世の中が激しくなつて弱者は皆こうして追ひ退けられるのかと思ふと心細くなる。綴物ては一番胸に響いて讀んだのが「虞美人草」の最後、藤尾の死！眞に樂しい。「春」も好。今の三四郎も眞に私は好て毎日其をよむのが終日の樂になつて居ります。

○夕方

若狭　山田小濱

家は大阪毎日を購讀してるの、夕飯の前後には必ず來ます。父は第一相場欄に注目、兄さんは一面や二面欄に、母上と私は小説や三面を妹と今年五つの信ちやんは繪を、とそれ〴〵持分の樣に見ます。時々御飯最中に來ますと私は續が見たうて御飯を中止して小説だけ讀みます。兄さんは論説を、私は小説を、父は相場欄を、各切取て後を一ヶ月宛保存して居てから賣るのです。

○皇室

神戸市　幽香里

私は新聞の記事を切拔いて拔萃帖に貼つて本を造らえて居ます。其記事は皆御皇室のてありまして、一度讀んでは兩陛下皇太子殿下各内親王殿下の御仁慈の有難きに感泣し、各皇孫殿下の尊き御身を以て、私等の樣に御運動遊ばさるを讀んでは覺えず有難涙が溢れるのてあります。私は毎日日課として文机に向ひ謹んで此の書をひもとくのてあります。

○ちりもつもれば

弘前　長尾きよ子

毎日一枚づゝ親戚の叔父から送られた新聞此二三年貯へて賣りましたら其得たお金が貳圓と八拾五錢……ほゝゝ之て毎月の女子文壇を……

○好きと幸便

越後　飛鳥女

東京新聞も寄せますが、本當は地方のが好きて私は新潟新聞が好き。何より逸早く目を通しますのは短歌、次は彼地此地の通信に三面記事、あとは叮嚀にも見ません。配達人は四十七八の女、正直と健康て名が高く、片田舍の事とて一里餘り町への便りは大抵用達して呉れます。殊に私所は姉樣の婚家も同配達てありますので、姉樣から「一郎が今朝三足斗り歩き始めてよ。」など丶手紙て、丸で電話でも通じて居るかの如に毎日便りして居ます。

○紙衣

土佐　門田富士子

着物一枚購ふ事を止めても毎夜一時間づゝ賃仕事してゞも新聞を購ふ事は止めません、母樣が云はれます、お前新聞はお隣に讀んだ後を拜借して頂くか中間にして頂くかしたら宜いじやないか」「でもお母樣中間や借り讀みは間に合はないんですから」「だつて着物買ふ事止してまでも」「なにねお母樣古新聞を綴つて着ますわ」といつも大笑ひいたします。

○露ちやん

金澤　樫田文子

或朝の事。チン〳〵と新聞賣の鈴が門の所で留まつてそれから音がしないので玄關から覗いたら妹の露ちやん十二三の可愛らしい子と話して居る。「二三日こなかつたれ。どうかして。」と露ちやんがきくと恥かし想にもぢ〳〵して「母樣が病かつたから」。「そう氣の毒ね。これあげやう」と紙包にした菓子をだしたら少しためらつてゐたが顔を赤くして「有難。」と禮をいつていつた。跡見送つて居た露ちやん顔には云れぬ滿足の笑を湛へてゐた。

○切ぬき小説

三重縣　川原みさを

妾の家ては毎日新聞に毎日電報を取つてゐます、新聞がくれば先第一妾が讀みます、次が兄さんお父さんは夜分お床て見られます、翌朝妾がお部屋を掃除する時纏めて小説だけ新聞掛に

止めて置ます。そして其小說が終れば妾が手傳つて兄さんが切ぬき見事に製本せられます、こうして出來た小說がもう餘程たまつております。

○讀みくせ　伊豫　芳枝子

一頁を讀み終るのにお母樣は三十分かゝりきす、一番早いのは兄樣と私、それから小さい伯母樣、祖父樣は遠眼鏡にすかす樣にしてそして聲を出されば讀め無いのです、お父樣は如何だか私は知りません。

○隣りの子　牛込　平塚白百合

お隣の美ちやんの家は貧乏といふ程てはないがつましく暮してゐるので、この間私の所へ來て椽て遊んてゐると、私が新聞をよみをはつて疊むのを見て、パツチりした目をみはりながらそれ切つてお便所へ入れないのつてきゝますの。

○避暑の間　草村　瑩子

母と妹と三人、由利島と云ふところへ避暑しました。渡るとき小說や雜誌類も持つていたのですけど、間もなくそれも讀んて了つて、それからは、妹などは貝など拾つたり海水浴に行つたりしますけれど、床から離れることの出來ない妾は、三日おくれて來る讀賣と、翌日來る松山の新聞が餘程待たれました。そしてその四種新聞が、妾等と浮世とを繋ぐ只一條の糸なのてした、それも雨ても降れば來ないのてした。

○世界の事情　なゝしぐさ

文學趣味の豐富であるとから讀賣新聞を愛讀して居りましたが、考へて見れば新聞をよむからには世界の事情がわからなければ何にもならないと思つて國民にきめました、日々もよみます、讀賣は日曜附錄位時々眼を通しますばかり。



薪とり　牛込　佐野貞子

○本鄉　長野市　西條うめ子

家の母は昨年の夏頃東京朝日新聞に毎日かゝげてあつた小說湯島近邊を讀んてから後と云ふものは本鄉は墮落學生の巢だと一ずに深く〳〵思つて終つて、それ故私が東京へ參りましても本鄉なんかへはやたらに行つてはいけないと口ぐせの樣に云はれます。

○繪と字　山城　八田　文子

私は毎朝新聞を配達して吳る迄には、朝の用事をすまして、取る手遲しと小說を讀みます、お母樣も大好てすから、讀むだあとて細々と話を致します、そして情迫つては、共に思ひに焦れます……

私は「寒潮」の小說が大好てしたから、毎日手すきにかき取りました、町子樣と久代樣とには同情せずには居られませんから、町子樣と久代樣とのさしゑを寫取りまして本にはさみましたこれは二時間づゝの手すきに字と繪のお稽古のために致しましたのですが、よい寒潮の小說本ができました。

○待つ間の樂みは　沖繩　はつね

知りたい、聞きたい見たいと青春の身の島守程憫然な物はあるまい淋い悲い情ない、こうなると都の新聞は蘇生劑て一字もたゞは讀まぬけれども新聞の小說位先の見えすくものはない何故此の心をぐる〳〵つと引張廻してどん底につき落す樣に書かぬのかあゝつまらぬまへのが樂みだ人の世も皆それだ合はぬが花だふれぬが春だと新聞讀む度に思つては自分の前途まてあやしまれるのてあります。

○村の樂

宍飾の里　大久保てる子

我村は極く山間で僅か二十戸ばかりの村です、村の人は皆な百姓で毎日〳〵鋤鍬を友として暮して居ます、其の位だから學校も尋常のみで高等科はありません、只々毎日二枚づゝ郵送になる國民新聞を無上の樂として居ます。

○料理

三河　天野濟子

私の宅で只今讀んで居るのは國民に讀賣と當地の新聞であります國民のうちで一番好んで讀みますのは論說に講談讀賣は論說にお料理です私は大のお料理ずきですから一々是を帳面に鈔記して置きまして度々實驗して見るのです時々隨分面白いものが造れます次に當地のは二面ばかり他は見る事は少くあります。

○小說が好き

梅花

私は新聞讀むのは大變嫌ひでしたが、元旦の新聞があまり美くしいのでちよと、小說を讀むで見ますと、中々面白いので其れから讀みはじめました、今では小說が一番好きで誰れよりも先に讀みます、私の家は纏めて置いて壁の貼にいたします。

○四種

水戸　重子

私は、朝日と、報知と萬朝と、いばらき、とを讀んで居ります、五時半に新聞がまいります、から第一番に、朝日の二面を丁寧に見て、次に小說を見る、附錄をざつと見てから、報知の徳川榮華物語を讀んで、其れから、いばらき、の二面、次が五面、三面、と見て、萬朝のポンチや一口噺を讀んでから、四ツの新聞の廣告を見るのです、続き物は講談を愛します、

○朝の五時

越後　佐藤浪子

新聞やチリン〳〵の鈴の音を懷しい夢心地に聽き乍ら意地汚なくうつ〳〵して居る五時がなると驚いては起る、先づ玄關へかけつけて國になげ入れられた今日の新聞を出して目をこすり乍ら第一に小說、それからはざつと一通讀で元の通りに國に入れて小草の露をふみしだき清い菊の香に包まれて井戸端へ顏を洗いに行くのです、都のは草の露がみんな散つて俊子がお寢醒して居る頃來る。

○無人島

香川　野木百恵子

我の様な田舎者でも新聞のお陰で多少世の中のことが知られますので心から何處新聞に限らず歡迎致しますのよ、ですから四五日も新聞を見ないと、一人無人島へやられた時はこんなのだらうと、いつも思ひまして世界が、せまくろしい様な感じが致します。

○注意

大阪府　寺部君子

假名が辛而讀める位だつた人が、新聞を一生懸命に讀んだお陰で字も少々分り、難しい字も一寸讀る様になりました、私の先生は新聞ですと、申て居るのを聞てから浮か〳〵讀て居た私も一々注意して見る樣に成りました、すると皆々其れ〳〵に趣味が有て面白う讀めますから、暇な折には殘らず讀み升、忙しくても題目丈は一通見ます。大阪朝日の天聲人語は簡單で何事も一寸分りますから毎日面白く讀んで居り升。

○五冊の拔萃

常陸　淺香くら子

私は新聞なら何でも好みます、只今は時事と毎電とを愛讀して居ます、始めて、新聞を見ましたは、栃木縣谷田貝町の女教師が惡漢の爲に殺されて諸新聞に出た時からなのです私は又、家庭の栞或は苦學して成功した人の履歷談、其他種々身の爲になる事等は皆切拔きて不用の雜誌の表紙にはりつけて置きます、其が爲め今では立派な雜誌が五冊出來て居ます。

○切拔き小說

山口縣　藤井よし子

私は永年讀賣新聞と、大阪毎日とを讀んで居ますが、その内で面白い小說や、讀賣の日曜講壇の參考となる文藝詩話などは、皆切拔いて蓄へて居ます。讀賣の凋落、生、毎日の寒潮、黑牡丹などは皆立派に本に綴んで居ます。一冊幾十錢も出して、クロースの美本を購讀するより、遙かに儉約と存じます。

○繪

北海道　秋子

私は新聞を見る事が好きですけれど目的は繪を取ること、どの新聞でもいゝのですの、多く小說の繪を取ります。そして今度繪を書く時の參考にしてたのしんで居ます。だから、毎日明日も亦私の好きな挿繪があればうれしいと待つて居ますの。私は繪より何のたのしみもないものですから。

學校生活

規定　此欄は次號より教への庭と改題す投書は各學校の女教師に限る、原稿は十六字詰十行内外とす

地　○雪の日

信濃　小林美喜代

大雪の日には遠方の生徒の爲に一時間授業を遲く始めます、四五十人に二つの火鉢が出て居ますが、二十人づゝはんかわりにあたゝまりますから少しの混雜も有りません二十人は銘々の席に着いて勉强して居ます、下駄置場には雪が土にまみれて散らばつて居ります、小使室では足袋をかわかして居るいやな香がして居ます。

人　○海

北利子

妾の奉職學校は海邊にありまして今日のやうに空曇り、ちやうど五月雨のやうな日にても、校舍より千廣の海一面に見えますから、小さい心もいつしか海と同じ心になります。それですから妾は永く此の學校に勤めたいと思ひます。

○生徒

栃木　鈴木梅子

私は去年此處へ來たのですが、來た當時は小學校の亂れて居るのに驚きました、それは上級生が人の惡口を云ふたり、下級生をいぢめたりしたので自然と校内が亂れたのでした、今年の生徒は前と反して大變小さい生徒を可愛がり、先生をも敬するので校内も行屆いて來ました先日先生の御宅へ上りました時、先生も其お話してお喜びでした。

○私の望み

熊本市　近野春子

妾の受持の生徒の中に、吉田たみ、小金いく、森しづとて、三人のよく出來る生徒が居ます。が吉田は國語科に關する事が最優等で、小金は口數の少い算術のオーソリチー、森は談話や唱歌など、兎角發表的に巧妙です。それで、日々妾の望と云つたら此の三人を一塊にして、理想通りの生徒をこしらへたいことです。

○校内の畑

大阪　紅女

私共の學校では花壇の他各級に二坪づつ畑が與へられて居升。其所へ種々な野菜類を植升お草引は生徒が致し升お菜がよう實り升と晝食後運動の暇り唱歌を歌ひ乍ら引くのがそれは〳〵樂みです、ちやうど引終る頃鈴がなり升。終業後掛所に行くとちやんと机の上に……ホコ〳〵と湯氣が立つて居升。一同集りましたら樂しく戴き升、其味は又格別。

○座蒲團

山梨　井上笹波女

紫地へ白菊の形のついたネルの小座蒲團は、私が尋常一年の時亡き姉樣が拵へて下さつたのだ。其一枚の蒲團で私は小學八年の課程を卒業した、今この胸に滿てる清い想ひも其蒲團の上で養はれたのである。

○夜學校

下澤小夜子

私の通ふて居た私立夜學校は先生が六人に生徒が百人餘り、其の内御父樣のない人が三十一人、御母樣のない人が二十七人、兩親のない人が十四人、一字も知らない人が十七人、さうしてひるはマッチ工場に通ふ人や子守ばかり。

○一年生

千葉縣　關つる子

私が尋常一年生の時でした體格はごく小さい方でありましたが、或る日姉樣は御病氣で御缺席、私獨りで登校致しました、其の日のお晝お辨當の結び目が餘り堅く引き緊まつてしまつたのでどうしても私には解けず泣いて居ると、折よく先生が御出になり解いて下さいました、其から九年只今でも妹のお辨當を包んで上げる時は折々思ひ出して獨て微笑を洩らします。

第四年第十八號

女醫顧問

東京女醫學校長　鷲山彌生

○小虫の耳に入りたる時と毒蛇に嚙まれし時

耳の中へ蚊、アブなどのは入りし時はどうすれば出ますか。又私の弟が毒蛇に嚙まれた時少々血が出て居ましたからスイフクべをかけましたら又少し出ました、夫から二時間許りたつと大變太くなつて毒が上る樣思はれますから關節の所をきつく結へました。はれの引く法をお敎へ下さい（伊勢女）

『答』微溫湯一合に半匙の食鹽を溶かし「スポイト」又は「イルリガートル」なる器械にて耳を洗ふ時は其洗ひ水に混じて異物は出るものです。毒蛇に嚙まれた時の救急處置は御記載の通りに誠に當を得て居ります其後の處置は直樣醫師の許へ御馳せつけになり適當の治療を受けられるのが良ひのです凡て一般に心得べきは救急の處置にして、治療法は專門家に任せるのが安全てす。

○イボ

私の妹は昨年の春頃兩手の親指にイボが一つ出來ました、夫が今では他の指にも移り五つになりました、大變見苦しう御座ますから何とか素人療法はありませんか。（規子）

『答』絹糸を殺菌の目的に二十分間程煮沸し「イボ」の出來居る部を「アルコール」にて能く拭ひ「イボ」の根部を強く緊約し其上に絆創膏を貼り置けば二日程經つと脫落します。

○寒につれて

私は寒くなるにつれて頬が紫色になり、夫に乳房が痛みまして、殊に寒中はちぎれはすまいかと思はれる程で御座ます、如何なるわけてせうか。（常陸、中道生）

『答』要するに血液循環が惡ひ樣です故に脂肪に富みたる食物を多量に食し運動を充分になし每朝全身の冷水摩擦を御實行なされ殊に乳腺の部は痛くなる程摩擦し後「フラネル」にて卷き溫法するのが宜しいのです。

○瘢痕と齒並

私は顔に小豆粒ほどの痕が十許ありますがとれますか、又齒並が大變不規律てすが美する法はありませんか。（十四の愚女）

『答』小豆大の瘢痕は治す法はありません。齒の矯正術は目下齒科醫の研究中てありますが未だ充分効を奏しませんが或は二三年の內には完全なる矯正術が出來るかも知れませんから夫迄御待ちなされ。

○肺病に罹りし初期の容態

肺病に罹り初期の容態は如何、又初期ならば治りますか（心配子）

『答』肺結核の初期は人に依り一定しませんが先づ最初に風邪に罹りたる樣の容態にて咳嗽が出て惡寒を催し殊に夕方の方が著るしく睡眠中盜汗が出て夢をよく見る等の容態にて來る人が多いのです尤も右の徵候にても必ず肺病とは限りませんが二十日以上も持續するならば幾分疑ひを置かんければなりません。肺病の極く初期に充分なる手當を施せば治するのもあります。

○月經時の攝生

月經時の攝生をお敎へ下さい（愛讀女）

『答』月經時には身體及び精神共に安靜になし可成消化し易き食物を取り冬の日は平常より衣服を多く着し殊に身體下半部の冷却せざる樣注意をなすべし而して局部に向ひては從來多く用ひらるゝつめ紙等は不潔にして子宮內に黴菌の侵入する恐れもあり又血液の排泄をも妨け大に害があるのです故に之等は絕對に廢し脫脂綿を厚く重ねるか又は「ガーゼ」を數枚重ねて

外陰部に當て置き丁字帶を懸け置くのが安全てす。

◎前髮の分口の痛み　私事前髮の分け口いたみ夫を辛棒すればだん〳〵禿げ來、その上頭痛甚しく誠に困ります、好き療法にてもあらばお敎へ下さい（しづ子）

『答』中根を餘り堅く緊搾からつり毛が出來て痛み又は禿げるのでせう可成緩くなされ前髮の分け處を度每に御換へなさるのが良いてす。

◎月に二回　二十一才の未婚女月經月に二回あり、またその數日前より乳房がかゆくなります何の差つかへもなきか（心配女）

『答』妙齡の女子は月經の延びる事は差支へありませんが一ケ月一回以上來潮するは子宮若しくは心臟に疾患あるのてすから專門醫の治療を御受けなされ。乳房のかゆく又は痛くなるのは普通てす。

◎月經時の長短　私は今迄は七日間程經がありましたのに今頃は三日位に止み不生は白血があります別に身體に異狀があるのてはありませんか（十七歳女）

『答』月經は人に依り日數を異にしますれば別段御心配には及びません又白き分泌物は十七八歳の時には幾分あるのが生理的てす。

◎トラホーム　私は六年前からのトラホームて、癒つては又罹りして去年の一月に左眼に星が出來、今では針の穴程です、視力は普通の方の大差ありませんがこれて官立の學校に入られますか（金澤　心配女史）

『答』極く小さき星にて視力に障碍なき限りは差支ありませんが若し「トラホーム」が幾分にても殘り居る時は傳染病てすから謝絶されます故に此「トラホーム」を充分御治しなさるのが得策てす。

◎毛生期　私は十五歳になつても未だ陰毛が生へませんから心配てなりません、毛生液は効がありますか。腋の毛と同時に生へぬと一生は生へぬと言ひますが誠ですか、又必ず同時に生へるものですか（本所、心配女）

『答』毛生液は効がありません陰毛は十八九歳になりて生へる人が往々ありますから未だ十五歳位ならば御心配には及びますまい腋毛は陰毛より遲く生へるのが普通てすが腋毛が更になくとも陰毛の多き人もありますれば一樣には云はれません。

◎腹張り　私は二年前より月經があるのて御座ますが、その時から下腹部が張る樣なつまる樣な心持ちて座つては居悃くあります、如何なる理由てすか又、隆鼻術は一度施せば終生變形する事はありませんか。（敎願女）

『答』多分子宮內膜炎と云ふ病氣がある樣に思はれます一應專門醫の診察を御受けなさるが良いのてす。隆鼻術は消毒を完全にし技術を巧みになせば別段害はありません施術後二十年も經れば幾分形に變化を起すと云ふ說もありますが該術發見後未だ數年を經ませんのてすから確なる實驗說はありません。

◎三問　いゝそばかすを取る法。はいゝへぎはをよくする法。月經の日數を少なくする法等はありませんか。（心配女）

『答』御質問の三問は御氣の毒ながら考案はありません尤も月經の日數は生理的以外即ち七日以上に渡るものは病的てありますから之を短縮する方法はあります。

質問諸孃へ

總て藥は其用法如何によつて奏効もあり亦害にもなりますから假令普通藥とても專門の智識なくして用ふることは危險てすそれ故此の欄ては絕對的に藥液療法は申上げぬことにしてありますから諸孃も其お積りて質問を願ひます。

第四巻第十八號



讀友倶樂部

儉かを約して多くを爲せ　英國格言

愛と光とは隠すこと能はず　仝上

文學顧問

問　短篇小説を學びたいと思ひますがどう云ふ方法て參考書はどう云ふ本を見たらよいてしようか(君代)

答　短篇小説を集めた書物を御らんになるのが最もよろしい

問　記者さまにお尋れ致します十四號の和歌加賀の學子さまの作「うたげする海の宮殿のつかさ人」うたげするは何の意てすか薮だお手數てすが次號てお敎へなすつて下さい(福岡縣牛尾游香)

答　うたげは宴會てす

問　かんきつ栽培法の書いてある、わかりやすい本があるてしようか、あるなら代價及び發行所を敎へて下さい願ひます(千葉縣 田舍娘)

答　「柑橘栽培書」(北神貢著)定價四十錢郵税八錢裳華房發刊

問　記者樣毎度御手數を掛け誠に有難う存じます扨て新年の宮中御歌會に詠進する書方、手續きを何卒委しく御敎へ下さいませ(梅子)

答　題項に出して置きました

問　記者さま毎々にて誠に申し兼れますが妾は短歌を學びたいのですが講義録か雜誌の發行所がありますまいか次號ておきかせ下さい(御園金田よし)

答　和歌のみの講義録はありませんが、雜誌ならば大日本歌道奬勵會の『わか竹』佐々木信綱氏主幹竹柏會機關『心の花』があります

問　記者樣難な御尋て御座いますが第四年第拾貳號の初に女子の友情とある文中に男子の友情は苦痛の時にも虚榮あり宜しく改めて友情を眞にせよとありますが無學の私てすから何うしても男子として意味が分らんので困ります又虚榮とは何う云う事かと問れた時何んと答へてよいか此答方とを御敎へ下さい(無學の根岡女)

答　お尋れの「女子の友情」の文中「男子の友情は苦痛の時にも虚榮あり」は全く女子と書いたのを活字の時、男子と誤つたのてす、次の號て正誤する筈てしたがお尋れを幸て此處に正して置きます

又虚榮と云ふことは一言て說明出來かれますが、早分りは外見と云ふことてす、妾の外見だけでなく、心にも外見があると云ふのてす

問　ヴアイオリンを獨習するに適當な書物の名を問ふ

答　初等ヴアイオリン敎科書(定價六十錢開成館發賣)あり

問　小野先生の習字のお手本の發行所を敎へて下さい(京橋喜代子)

答　澤山あります、「かな手ほどき」(定價三十六錢吉川弘文館)「草書千字文」(定價三十五錢同上)、其外弘文館から澤山出て居ります

諸孃と記者

○十五日より後に投書いたしたのは沒書になるのてせうか御たづれ申ます(梧桐ちと子)(記者曰、翌月の分に廻します)

○記者樣方にはお變りも御座いませんか妾はまだ小學校に通つて居る不束な者てすが女子文壇が好なので地方の本屋から愛讀して居るのてすが一度投書がしたいのてすが學校の事や家庭の事てずいぶん忙がしう御座いましたが此度初めて出したのてすがこれてよう御座いませうかこれからも度々拙い筆ておよみにくいてせうけれど御覽なすつて下さいまし先は御挨拶まて(田舍生のきせ子)(記者曰、御挨拶嬉しく承りました、外におたづれのことはそれてもよろしいのです)

○北海道、橋本千代子。出雲、藤江峯子。千葉、石井きぬ子。横濱、加藤桂花子。福岡、とれ子。何も一寸も知らぬ女。宮崎縣、岡野とめ。金澤、重子。備中、白芙蓉。信濃、村雨。周防、藤井喜美子。岩代、菅野やい子。靜岡縣、岡本りん子。以上皆さんの仰せは別にお答しませんが仰る通りてよろしいのてす、又いろ〳〵の御挨拶は有りがたく承りました(記者)○島根縣の柳雨さんに答ふ、文學顧問の御尋れの意味が分りません、も少し注意して凡てを御覽なさい(記者)

開き封

○北海より　諸姉樣お寒く成りましたれ、當地は

去十八日初雪が降りました、白い雪の面を見たら寒さが一層身に泌みますのよ何卒氷上の白熊にもお玉章下さいな（北海道後志國歌棄郡有戸村櫃本千代子）

○忘れな草　私はForget-me-not.と稱して初對面或は離別の時に互に贈り交して此の國の人に非常に愛せらるゝ美くしき花の繪葉書を澤山に持て居ますから此の花の名の如く私を忘れずに御交りして被下る御方には美人繪へがきを禮へて御返し致します又先着者五名には最上等美人繪葉書を（北米、合屋るり花（妓）M. Goya 417 Wall St. Los-Angeles. U. S. A.）

○親切なる方に　記者樣親切なる方に此事を傳へて下さい、私は一人子です、姉ともなり妹ともなりて親切に永くおつきあひ下さる方がありましたら御名と御所とを知らせて下さい、寫眞などもさし上げて親しくいたしたいと存じます（奈良縣初瀬町大字田河。山口信枝子）

○何程古くとも　お伽噺の畫いてある雜誌なら何程古く共宜うございますからどうぞお惠み下さいませ（山形縣玉川局區内 足水中里朝尾加江子）

○和歌の交換　誌友の皆樣よはがきに自作の和歌を書いて送つて下さい。きつと返事はします（三河東加茂郡大和村鈴木淵次郎方まゆみ）

○三號習字本　懐かしい誌友の皆樣よ妾は今迄で編物や雜誌を讀んで居りましたが習字が大好きになりましたから貴讀の御手許に手本の御不用なのがありますれば妾の新聞手紙家庭の栞女子記事文の外に女學雜誌澤山ありますからいろ〳〵な雜誌と御交換を願ひますよ男子の御方は御返事致しませんから悪しからず御思召下さい（周防國熊毛郡田布施村字御嶽戸藤井愨助内喜美子）

○學校の寫眞　私は日本全國の學校の寫眞を集めたいと思ひますから皆樣の中で學校の繪葉書（未使用）のを持つて御出になる方は男女學校いづれてもよろしうございますから何卒御送り下さいませ御禮は必ず致します（尾張國龜崎町樋井由美子）

○北米の野より　滿天下のお孃樣方私は母國を離れて目下は北米の野で淋しく其日を送つて居ます少女であります誠に御れがいて御座いますお編物繪はがき御惠送下されば こちらの珍らしき風俗や風景の繪はがきを必ず御送り申します（英領加奈陀晩香坡市ペウエロ街四三七郵便函五七五鈴木こと子）

○新聞換讀　誌友の皆々樣よ私は數年前からの愛讀者てす どうか皆樣よろしく御見知りを 就いては私は東京の讀賣新聞を拜見致し度いのてす御情のある御方は 私方の和歌山新聞と御交換下さいませんか御玉章も願ひますさよなら（和歌山縣海草郡宮前村手平川合花子）

圖書換讀

○諸孃さまへ　私は片山里に住んて居る初號からの愛讀者てす、して私は濱口白羊先生の「不如歸の歌」「金色夜叉の歌」「女夫波の歌」「乳姉妹の歌」など持つて居ます、極美しいひじつき栞御添り下さつた御方へ御送呈致します。（和歌山縣那賀郡猿川村谷田峰子）○妾の手元に青春、思出の記、不如歸、伯爵夫人、新婚旅行、和歌入門、美文作法、朝顔日記、花紅葉、朝晴、己が罪、秀才文壇、本誌、其他種々の小說、雜誌不用になつて居ますからお望みの方は葉書て申込み下さい三日以内に必ず送本致します禮としては繪葉書を望む但し他人へ發送濟の時は直に其旨返信差上ます先着へは寫眞も添ふ（常陸筑波郡北條町仲町茂在方賓はな子）○懐かしい誌友の姉樣よ妾も今度から可愛い〳〵文壇の愛讀者になりましてよどうぞエハガキや御本の交換を遊して頂戴な、どうぞ美人エハガキ（未使用の）をお送遊して、それから家庭小說や女學世界、婦人世界、婦人畫報、寫眞畫報、少女世界、女子文壇などお送り遊して頂戴妾お禮としてお耻かしいけれど手製のいろ〳〵の編物や花形カードをお送り申します、そしておやさしい男子とも致したいわ（常陸國關本局區内關本中丁松本樣御內きく子）

○皆樣私の許に、金色夜叉、己が罪、化粧鏡、夏小袖、不如歸、深山の美人、外に中島春郊先生畫水彩極美畫、令孃彈琴、婦人觀梅、美人觀月、處女生花、藝妓樓說、令孃羽根遊、寫寫紙家式部、と雜誌が幾册もあります、皆樣寫眞を送つて下さい先着順に以上の物を進呈しますよ（上毛佐波郡赤堀村江澤菜城子）○諸姉樣の內て徒然草、土佐日記、源平盛衰記、今昔物語、言海、國語漢文中辭林、日本歴史辭典、日本女禮式、湖上の美人、ハイ子の詩、藤村詩集、里見八犬傳、女子文壇第一卷第一號より第二卷第二號迄全部又は一册づゝ

全第三卷第五號、第三卷第十五號、秀才文壇第七卷第二十一號、全二十五、六號八卷一號より七卷迄何れにても宜し御送り下さいきつと御返禮は相當のもので致しますよ。偽は神にちかつて致しませんよ、又永久的御交際もね（山形縣南從賜郡 廣幡村小山田里にて遠藤菖蒲）○追々夜長になりますから讀書には以て來いの時節です、ですから不用の書を交換して此の夜長を過さうではありませんか。皆樣の內に、不如歸武藏野貞か不貞か今樣水滸傳がありますれば私の自然と人生一葉全集膝栗毛ハイカラ令孃其の他の家庭小說と交換して下さい（香川縣綾歌郡坂出町田尾北山方草方敏子）○諸孃樣よ、私の手許に文藝倶樂部、女學世界、女子文壇、はがき文學、新文林、等とりまぜて數十冊とほかに日露戰爭畵報、函舘案內、茶の湯手ほどき、女學生道樂、かた戀等不用て御座いますから御不用な小說御持ちの方は御交換下さいませんか、また西洋花の種子御もちの方はお送り下さいな繪はがき、又は自作のしぼりを以て返禮致しますからどうぞ御願ひ致します（名古屋市桶屋町富木靜子）○皆樣御本交換して下すつて有難う。それ〳〵本やハガキで御返事しましたが男子とみとめた方や御名の不明な方には出しませんでしたから惡しからず（京ばし區松屋町野田初美）○誌友の姉樣方の內金色夜叉合本、小猫、次郞島、彈片、世界的大競走、等御持の方は左記の本と御交換下さい、着次第送附致します、銀山王航海譚、奇人の魔法、支那奇談、立身膝栗毛、世界冒險少年譚、波魂濤魄、不如歸、滑稽德川明治史、武者氣質、女の一心、其他いろいろ有ます、御送の時御姓名住所明瞭に又先着者へは繪葉書を添へて差上ます（吳市二川町西本通二丁目一二〇雅井清湏）○誌友の皆樣私の處に、女學講義錄二冊、通俗書簡文、裁縫と編物、女子職業案內、ムラサキ等御座いますが皆樣御持ちの、人の兄、吉田絢子著の裁縫と編物、普通女禮式など丶御交換下さいな（新潟縣中頸城郡明治村大字花ケ崎外池松枝）○諸姉さん方の內に櫻井中尉著『肉彈』を持つて居らつしやる方は妾の村井弦齋著『食道樂』と交換して下さる方は有りませんか、若し有るなれば早速御手紙で知らして下さい、其外小說や雜誌の交換も願ひます！（豐後國安岐小川町上田隆子）○誌友の皆樣妾は少女世界、少女の友、日本の少女、少女界、ムラサキ、少女と自然、俳句誌（五册）等有りますから繪葉書か何かと御交換下さいな、（東京市京橋區木挽町三丁目十二番地前澤百合子）○懷しい姉樣たち妾しは武夫と浪子の、わらび折りした櫟名の山の麓にて女子文壇を無二の友としてゐる女で御座います、何卒御寫眞や繪はがきの御交換を……又小說金色夜叉（合本）己が罪（三册）富美子夫人、不如歸、松風村雨、思出の記、八軒長屋、嬌系圖、等を始めとして雜誌やその他で百冊許りありますから、盛んに換讀を願ひます、又伊香保附近で御座いますから見苦しい住居ですが宅を訪れて下さる方が有れば倚更嬉しいです（上毛群馬郡豐秋村字石原木暮やつ女）○妾の手許に二十五號、心のあと出蘆、西詩の薰、鴎の音づれ、ひとり寐、ちから草、女華族、菊、桃の絹、金色夜叉合本、小猫、緣不緣、はつ姿、百合子、追恨、ほのほ、うき寐、無花果等の外二十册ばかり不用書がありますから、姉さんの方の內に戀ざめ、靑春、二十八人集、戀衣、わがおもひ、不如歸、新不如歸、ハイカラ田舍孃、ハイカラ夫婦、少女の煩悶、簸風戀風、伯爵夫人、肉彈、さゝにごり、虞美人草、戀の闇、有情無情、にせ紫等御不用の方は何卒枝折を添へて御交換下さいな若し御交換は出來ません方は御貸し下さいな御禮は小說にて致しますわ、但し御送の時は小包郵便にて願ひます（秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山梅澤二三子）○皆樣の中に小說夏子御不用の方ありましたらどなた樣でもよろしくありますから下名へ御送り下さい必ず相當の御禮致します（仙臺市栽市ケ坂九番地後藤方富塚ゆふ子）○妾の手許に婦人世界、女學世界、中學世界、太陽、其他小說澤山不用になつて居りますから戀と戀、はつ姿、戀ざめ、夏子、百合子、心中くらべ、男女の研究、有情無情、血汗御持の方は御交換遊ばして下さいな女子文壇の敎へを受けてる妾ですもの只取りなどは決して致しませむよ（茨城縣新治郡牛渡村佐賀逢子）○私の手許に昨年一月より五月迄の婦人世界五月より今年四月迄の少女世界六月のムラサキ九月の女鑑三、三月の少女の友三四年前の少女界三年分ばかり二三年前の女學世界日本お伽噺世界お伽噺等澤山ありますから諸孃の中に昨年少女世界定期增刊花の東京、英和辭典、敎育、文學、女學生訓、成功、立志等の本お持ちの方は何卒交換を願ひます（越後南蒲原郡大島村大字井戸場山田はぎの）○諸姉樣方の御もとに御不用の小說雜誌おありなさるならお惠み下さいませんかどんなに古くともよいのよ御禮にはきつと相當の品をさし上

けますよ（長野縣小縣郡縣村本海野矢島白梅）

○誌友の皆樣よ御手許に女子作文大成と女學校用算術教科書（森岩太郎著）平面幾何學教科書（樺正董）といづれも未使用のものが御ざいますから御讓り申ます御望の方は御申越下さいませ（茨城縣結城郡總上村字石道古澤忠之助菊子）

○諸嬢の中に「歌舞伎」御持ちの方は御讓り下さい亦は文藝雜誌と交換を願ひます（大阪市西區黄金橋南詰西へ入山本葉那方吉川輝子）

○おなつかしい誌友のお許にハイカラ令孃、ハムレット、伯爵夫人、呪はれたる女、天打つ波、夏子、緣が淵、匠人の自白、天地有情、などの外面白い高尚な小說お有りでしたら相當の價格でおゆづり下さるか妾の金色夜叉、血の涙、己が罪、みだれ燒、おばん、避暑の友、か、つまみ製の寫眞掛及コントラス式のリボン等など、お交換を願ひます（千葉縣流山町山中はる子）

○皆樣私の手許に少女界少女世界 其他數十冊ありますから御入用のお方は繪へかき編物な送つて下さいお送り致しますよ（加賀國石川郡美川中町川原せい）

○おなつかしき誌友の皆樣方の内に平家物語、國語辭林、中學界等御不用の方が御座いますれは送て下さい私の寫眞を添へて御返し致しますよ（紀州和郡湘町梅芳子）

○親愛なる諸姉樣妾の手許に銀鎖指環、町の仙女、麗子夫人、富と愛、血の涙、怪先、不如歸、後不如歸及文章世界十冊、文藝倶樂部昨年三月より全部ありますから皆樣の内に女波男波金色夜叉伯爵夫人 女夫波其他の小說お持の方は送て頂戴必づ妾しも御好みの書を送り申します（靜岡縣引佐郡鹿玉村伊藤靜枝子）

○美文自在、豪傑書生、劒揺の犯罪、作文答案、ナショナル第二讀本女子作文書、すみれ集、新女大學、文のはやし、受驗讀本、オルガン教科書日本外史（和綴十二冊）、西洋歷史受驗の極意、女學世界、文章世界、中學文壇、化粧かゞみ、等の不用書がありますが昔我物がたり、櫻の御所、小弓御所、古今著聞集、其他面白ひ有益な書と御とりかへ下さいませ（神戸市山本通五ノ一〇一椙橋方敬子）

○誌友の皆樣妾の手許に小說、魔風戀風、青春、にせ紫、小公子、男裝奇女、新學士、新體詩には孤雀般、黑髮、美文には美文辭典、美辭寶典、詠歌辭典、百人一首、言海、書翰文辭書、等不用に付望の御方には定價で讓ります紹介は往復はがきの事（常陸眞壁郡辻村郵便局内陸せい子）

○皆樣の御手許に、「相山嵐」「破戒」「富美子夫人」「多情多恨」「天打つ浪」「無花果」「女波男波」等が御座いましたなら私の「奇人の魔法」「玉蟲」「殺死人ヶ濱」「新日本島」「吾家の家庭」「黄菊白菊」「花紅葉」「作文之資料」「家庭學講話」等と御交換を願ひますまだ外に趣味、婦人世界等も御座います（岐阜今小路二一〇渡邊つる子）

○諸嬢の内に呪われたる女 若き夾、人の兄、澄子、小女の戀、乙女の操、お持ちの方はおめぐみ下さいな私は三十八年九月後の少女世界、婦人世界、女學世界、明治詩集、金色夜叉、水鏡大鏡に手製の剌繡寫眞掛をそゑて御返禮致します先着六名へ見苦しき私の寫眞を御おくり申ます何卒〳〵御交換下さい。（奈良縣瓦堂町横田愛子）

○皆樣の内に本誌四十一年度增刊不用の御方がございましたなら御送り下さい必ず返禮を致しますから（栃木縣下野國足利郡足利町槃町三九入柳田幸吉方白露子）

寫眞編物交換

○誌友の諸嬢樣妾は片田舍に淋しく月日を過ごして毎日東都の事ばかり思ふて居ります何卒御寫眞やしなりひじつき等御惠み下さい必づ妾しもお恥いが寫眞を添えて手製ひじつき文しを送ります（靜岡縣引佐郡鹿玉村伊藤靜枝子）

○誌友樣よ寫眞の交換を願ひます私は寫眞交換欄に出すことが兩三度であります寫眞も毎月七八枚の交換者がありまして最早誌友の寫眞は二拾枚に近づきました（牛込區山吹町二一一高橋つよ方兒玉松江子）

○みなさけ深き誌友の皆樣寫眞ブック御惠み下された方には御禮として妾手製の肘突 銀貨入栞時計サック其他何なり編物なれば望のものにて差上ます男子の方にても厭いません（常陸眞壁郡辻村郵便局内陸せい子）

○妾はれえ寫眞や繪端書或は手紙の交換をしたいですよどうぞ志を同ふする方は御送下さい御禮は必ず致します（茨城縣稻敷郡岡田村柏田大山しげ子）

諸嬢の交際

○誌友の諸姉上樣よ妾至つて不束な者よ何卒幾久しく妹と思召して御玉章を交換して頂戴（新潟縣三島郡豫野山渡邊榮子）○誌友の御姉君樣よ何卒妹と思召し御見捨てなく御交際下さい（讚岐國多度郡龍川村金藏寺陶山みさほ子）○御自作の和歌を寄て下さいませんか御返しは拙作ながら必ず致し升但し新派と男子の方は御斷り（大阪市南區吉田橋西詰片山方田中雙）○何とぞ〳〵繪葉書玉章の御交換を願ひます、そして失禮なから男子の方には御ことはり申しますなるべく高等女學校又は師範學校在學の御人に御願ひ致

します（熊本縣師範學校女子部赤星みほ子）○敬愛する諸姉樣よ御玉章の交換を願ひます男子の方でもかまいません肉筆の畫をネ（山形縣楯岡町片桐しげよ）○誌友の皆樣よりハーモニカの事で繪はがきや手紙で澤山申込み下すつてゆづつて呉れとか交換して呉れとかつておつしやいましたけれど私し一つしかもちませんから先着のお方にしか御滿足は與へられませんでした皆樣惡しからず思召しを願ひます（佐賀市水ヶ江町森方よし子）○本誌の九月分に何方樣か知らんが妾の交際を出してくれたので男子の方からも御手紙が參りまして大いに迷惑致しましたどうせ妾は諸姉君と交際して居りますから出しても差支はないがいたづらに名を出されては殘念に堪えません妾は決して男子に交際を求めた譯ではありませんから何卒左樣御承知下さい（山形縣北村山郡楯岡町青沼芳子）○誌友の姉樣よ御見捨てなく玉章やゑはがきリボンなどの御交換を幾重にも御願ひ致します御返事はきつと致します（千葉香取月吉村第三區大木梅枝）○誌友の友垣樣よ、妾は憐れなもの只雁のたよりのみを樂しみにして居ります何卒永久に御交際を願ひます（函館臺町六十番地菅野まさ子）○道德や宗敎に對して深ひ趣味をお持ちの方殊に新思想のあるお方と思想の交換を御願ひ致したいのです何方でもお手紙や繪葉書などお送りを願ます（横濱羽衣町三ノ四八飯田方眞野道子）○誌上の姉上樣方私も文壇の愛讀者の一人で御座いますて不つゝかな者ですが永久に御交際下さいまし御寫眞またはエハガキの交換も御願ひ申ます（福井市佐佐枝上町八十三番地細岡きぬえ）

○諸孃よ、座りながらにして支那各地の風俗人情及景色を知らんと欲する御方に此方の繪葉書を差上げますから日本の繪葉書と御交換を願ます、西洋各國の珍らしいのもあります（清國直隷省北京區内保定金井）○妾には一人の弟がありましたが昨年の秋の末つ方あへなくも露と消え姉と呼ぶものなくて誠に悲しくてなりません今日此頃となりては思出てゝまことに淋しくあります文壇の諸孃よ願くは妾の姉となり姉と呼んで末永く御交際の上不憫のものを慰め數ふ御方はありませんか（東京市日本橋區本石町三ノ七樋口清子）○私は病氣のため久々御無沙汰致しました、以後も御見捨なく繪端書や玉章の交換なれがいます（北海道夕張郡山事務所小島とし子）○みずゑの友、斯道研究及び奬勵の目的を以て自筆畵交換御希望の諸姉妾は京阪地方の仝友小集會を開きたいと思ひますが如何て御座いませう御贊成の方は何卒一報を（大阪市北區富田町四〇增田千代子）○皆樣妾はれ山陰道の片田舍に住まつてる者てす元來繪はがきに趣味を持ち狂氣となつて色々なのを求めてます諸孃の中て繪葉書交換お望みの方おはしたらばおつしやつて頂戴妾も繪はがきて返禮きつとしますよ（伯耆國西伯郡法勝寺深田百枝）○おなつかしき姉上樣ゑはがき御玉章の交換いたして下さい（久慈郡西小澤村落合海野きん）○諸兄姉諸孃の中にて各地方の方言俗語御集めなさる御方あらば是非給はりたく御返事には重複いたさぬ方言に說明をつけて御答へいたすべし（名古屋市西志摩町一ノ十二日比野方井出千草）○皆さん早速御便り被下まして ありがたう御座り

ます妾事は今度不幸にして皆樣と御交際を致す事が出來ぬ悲しき身になりました故誠に殘念ながら御便りお見合せを願ます（赤坂區新町五ノ六丸山方靜枝）○誌友の諸孃樣方以後よろしく御交際を願ひます（岐阜市今小町渡邊つる子）○諸孃さま私が今年の夏歸省しました、其の後へ澤山の繪葉書や玉章を下さいまして、ありがたう紙上て御禮申し上ます一々御禮申します筈て御座いますが皆々宅の子供が破つて捨てゝ仕舞ひましてわかりませんから。けれどもこれからきつと御返事してよ。（神戸湊丁一ノ四九五森本內靜枝子）○賢明なる誌友の皆樣私は田舍に住む不束のものですが一人ぼちて寂しうございますから玉章や繪葉書の交換を御願ひいたします（新潟縣三島郡塚山村大橋とした）○故鄕を後に異鄕の空に心細く語る友なく渡りて居るものですが何方か繪葉書又は御手紙の御交際を永遠にして下さる御方はありませんてせうか（大阪西區江戸堀南通五丁目細川內木韋智惠子）○皆樣私は本年女學三年生て御座います、そして手許にヴァイオリン、活動寫眞器が御座いますのどちらも不用てすから御望みの方は御一報下さい（栃木縣下都賀郡寺尾村字尻內福富清平方とめ子）○妾は末ながくいつまでも女子文壇を友としようと思つて居るのです、何卒皆樣よ、不束な妾とも御交際下さい（栃木縣宇都宮市中塙田町小松館內小林ひさ子）○誌友の皆樣どうぞ永久に眞情をもつてレターの交換を願ひます皆樣御察し下さい意志のかよわい私にはとても我身をなぐさめかれて。どうかどなたなりとも御情ある方御玉章おめぐみ下さい（千葉縣流山町

山中春子）○米國の大河樣 布哇の河村樣何卒御住所を委しくしらして下さいませ 折角出しましても宛狀がかへりましたから 其他の方も返事のつかぬ御方は御知せ願ます（大阪松島町一丁目濱側丸山マツ樣方岡本フサ）○記者樣はじめ御姉君樣皆々樣初めて御目にかゝります何卒繪葉書玉章の永久御交際を願ひますかけませんが御返しは必ず〳〵致します（下野茂木下横町見目たけ子）○私は橫濱の縣立女學校の本科三年で未だ年は十五才で世間見ずですがこれからつゞく限り御交際を願ひます（橫濱市相生町二丁目二六三木白百合）○妾も今度より慕はしき諸孃と神聖に 清らかに玉章繪葉書の交換を願上ます（札幌區北一條西十九丁目蝶蝶忍子）○皆樣日本一美人末弘ヒロ子孃 及び二三等の方々の繪葉書は出來て居りますか、若し 出來て居りましたら發行所と代價とを御知らせ 下さいまし御願ひ申上ます（尾張國龜崎町櫻井君子）○私は文學や和歌が大好きですから 誌友の方四五人へ繪葉書に和歌をしるして送りましたに 御返歌もなく取り放し今日の世でも隨分 心の曲がつた方も有と思ひました私は そんな不道德な事は致しませんから和歌文學なさる方と 永久に御交際致したく又繪葉書レターの交換も願ひ升 御暇の御方は御來遊下さい （東京芝區田村町十八加藤田鶴子）○諸姉上樣御玉章をありがとう多勢の事で 御返事をさしあげなかつたのも御ざいませうが 御ゆるし下さい私このたび都合によりて皆樣と 御わかれ致しますからまた時節がまゐりましたら 又御交換を何卒あしからず （神奈川縣大磯宮代みよ子） ○私は地方の高等女學校三學年にもなりますが誌友は一人もありません以後 おみしり下さいまして皆樣にも末永く御交際を お願ひいたします（山形市諏訪町鈴木武四郎方鈴木幸子）○御情深き諸孃樣よ私は此七月にいと御なつかしき友を亡ひまた親數友とは遠く海山を隔てゝ淋しく暮す身となりましたので 何卒不憫と思召し給ひて此後繪葉書や御玉章を御惠み下さい 御返しは必ず致しますどうか永久に （京都市淨福寺通中立賣下ル山本勝造方山本野菊） ○諸姉樣方の中で千利休居士の百首和歌を知りたき方は皆樣の御寫眞で申込なさい 何んでも書いて御送り申しますから （京都府下葛野郡太秦村字太秦翠萍畫） ○諸姉樣なつかしい 仙臺を跡に はる〳〵水戸に參りましたが一人で 御友達もなく每日淋しく 月日を送つて居ります何卒繪葉書や玉章を送つて頂戴な 私も美しいカードを添えて御返事差上ます （水戸市柳小路七 渡貫よし子）○妾は此草深き越中の片田舍に住む 少女ですが御情けある方々は繪葉書玉章等の交換を 永久に願います（越中水橋町小池條枝）○懷しき諸孃樣よ私は淺學な者て 姉妹一人もなく獨り金城の下に淋しく暮して います者てすがふびんと思召して御玉章繪ハガキの交換を 永久に願ます（名古屋市中區柳町有樂館方小川とく子） ○皆樣妾も本誌の 愛讀者の一人となりましたから宜しく御願ひ申します（周防國德山町永樂方大久保靜子）○誌友の姉上樣妾も以後ぼつ〳〵投書 いたしますから宜しく御致導をねがいます猶 御玉章の御交際をねがいます御返事はきつといたします（宇都宮市小袋町二四伊藤方福田たに子）○親愛なる誌友の諸姉上樣雜誌繪はがき 御送りくだされましてありがとう御座います 尚此後あいかわらず御交換を御願します （大阪市東區高麗橋詰一ノ四四田方岡部榮島） ○萬天下の諸孃御變りも御座いませんか どうぞ玉章繪端書又は贈物をお惠み下さいませ 相當の御禮を致しますから（尾張東日井郡水野村加藤わさ）○諸孃樣妾は不如歸歌、乳姉妹の歌を持つて 居ますから先着より三人の御方樣へは前の 歌を差し上げます跡の 御方へは繪葉書を御返禮にいたしますから末永く御交際を願ます （岡山市野田屋町二四入入江美穗野） ○なつかしき御姉上樣方土地繪葉書玉章の御交換を願ひますわすぐ返禮は 神に誓つてよ （靜岡縣駿東郡北郷村大御神天野英子）○深山の奥の淋しきホームに女子文壇を友に 日を送つて居ります 妾を妹とお思召されて 繪葉書玉章などお惠み下さる方はございませんか 御返事はきつと差上げます （信州小縣郡田中一八一保科濟子） ○誌友の御姉樣方よ私此頃から漸く愛讀者に なつたばかりなのおそかつたわれ以後は御見捨てなく御交際を願ひます （新潟縣中蒲原郡新津町志賀いつ子） ○皆樣御注意遊ばせ 私の處へ布村映水 といふ女文字で手紙がまゐりましたそして その人の處へ電話かけましたら布村映水といふ人は 男でござゐました諸孃よ御氣をつけ遊ばせ （澁谷みゆき）○過ぬる六月中故郷へ歸り今度 又水戸の御城下へ出て參りましたから繪はがき玉章の御交りを御願ひ申します 御當國軍艦乘組の皆樣へも御交りを願ひます （水戸市上市楓小路二一根崎方實登美子）○妾はいろ〳〵と諸雜誌も見ましたが 女子文壇ほど整つて良い雜誌は 見當りませんの、是からは永久に愛

讀する者です、妾は南豐の有名な鹿鳴越山の麓に年月を過して居る不束者です。繪はがきやレッターの御交換を切に願います（大分縣速見郡東山香村廣瀬七二菫花女史）○皆樣よ私は片田舍に住んで居りますが一人にては淋しいから此後繪はがきや御手紙の御交換を致したいのです（水戸市上市棚ノ一町綿引まさ子）○妾は旅にさすろう哀れの身ですが情厚き貴姉方よ繪葉書寫眞、手紙など下さいませんかそして地方の新聞も御交換を願ひたいものです（福島縣田村郡三春町北町百十八番地橋本ふさ子）○私に未使用紀念切手澤山有りますから交換を願ひます又外國の切手も有りますから御望の方へ進呈します（弘前市田茂木町四十四番邸石戸谷初瀬）

○女子文壇讀者の諸姉樣方に御願ひ申上候。妾は滿洲の沃野をわたる寒風の吹く高麗の野邊にさすらふ境遇に御座候唯々戀しきは故山の友よりの文通のみに候同情多き姉樣方よ、さみ敷枯野に故山を戀ふ妾わに一片の文通玉わらば妾のうれしさは天にも昇る思ひに候御返事は繪葉書にて必ず申上候御英姿玉はらば見苦敷は候へど妾も一葉は御覽に入申可候（韓國鎭南浦東三ノ三五島涙子）○最早初秋の候と相成り朝な夕なに涼しさ身に覺え申候折柄詭者樣始め皆々樣には如何御暮し給ふにや妾は語らふに友なく淋しき深山の里に女文壇を唯一の友として暮し居り候何卒御なさけ深き誌友の皆々樣よ永久に御教導を御願ひ申上候（下總香取郡日吉村大木富子）○土佐の初雪さん、御地の男學生の服裝をはじめて聞きまして、おもしろい事があります。二三年程前山口にいつも紺の袴をはいてゐる學生がありました。御國の風とは知りませんからお寺の小僧の樣だと笑つた事がありましたが、その方は土佐の人でした、成程と今わかつて、友達とあの頃の話をして、又大笑ひしました。（山口縣山口町後河原田邊よしえ）○諸姉上樣へ御交際を求めましたら澤山の友を得ました餘り多くて御返事に困りますから私が御返事を差上ました方と御交りを願ひます。（周防國熊毛郡平生村小野木貞子）○愚なる妾を御見捨なくレター給り厚く御禮申上ます尙相變らず御交誼の程伏して御願い申します（靜岡縣濱松町渡邊四九松浦とみ子）○私は栃木縣下に生れ只今は宇都宮の女子師範に出て居ります不束な者ですが此度初めて投書致しますから愛讀者諸姉樣方よろしく（栃木縣宇都宮市西太寛町三二福田黄子）○御懷しき誌友の姉君達よ何卒私にも御玉章や名所繪葉書の御交換をして頂戴よ伏して御願ひ致しますわ、決して〳〵み情にはそむきませんよ、私は只今當地女學校の本科一年なのです（京都市上京區寺町通今出川上ル松田知敎樣方松子）○相變らずエハガキで御文通して下さい御返事は屹度差上げます（廣島市段原村東浦植木しづよ）○御情あるは方樣はなにとぞ、このご永久に御交際下さいまし尙繪がきや御寫眞の御交換も御願い致します（兵庫港町一丁目五七八大野方しん子）○皆樣よ、皆樣の中にて花？人？月桂冠日玉など御所持になる御方があるならば一枚にても二枚にても御送付下さい御禮に趣味ある上等繪葉書にて御返禮いたします又いく久しく御交際を（神奈川縣高座郡藤澤町堀内善子）○妾は地方より出て、花の都で學んで居ますが書籍などの不自由な田舍の御方には毎月五名に二三册宛御望みの雜誌小說エハガキなど送て上げますから本誌に御名前を出して下さい然し昨親今敵の薄情なる御方でなく淸く厚く永久に御交際の御方に限りますよ其代り編物や地方の新聞などを送て下さい（東京上野志野女）○本誌愛讀の姉上樣方よ妾は幼にして兩親に先立たれ賴みにして居る兄は三十八年國家の爲に滿洲の露と消え薄幸な身てす日々本誌や其他の雜誌を一の慰藉と致して居ます何卒諸姉樣よ愚昧な者てすが御交際をねがひます哀れの孤子に（山口縣下關市岬之町一八吉富方金山朧月）○誌友倶樂部の皆樣へ願ひます臺灣總督府發行の始政紀念、臺灣神社大祭紀念、縱貫鐵道全通紀念及び遞信省發行の紀念繪はがき餘分に御所持の方は御讓り下さいませんか御禮には一組に付き十二ヶ國の外國郵便切手を差上ます但し繪はがきは未使用の物、切手は使用濟の者なり（東京本郷駒込曙拾一平島すよ）

○私は去る九月下旬病氣のため東都にての勉學もやめて只今は田舍に一人淋しく暮らす不束者何卒皆樣よ御心あらば徒然をなぐさめ下されたし（茨城縣新治郡眞鍋町中村ふじ子）○誌友の姉樣方よ私れ少し事情があつて皆樣に切手と雜誌とを交換いたしたいのです私れ色々の雜誌持つて居りますから皆樣の內て切手御送り下されば早速送りますわ（常陸土浦川口町栗山ひな子）○誌友の諸孃樣妾しは初號以來の愛讀者てすが今日までは羞かしくて少しも面出しを致しませんてした今日からは思ひ切つて面出し致しますから何卒御交際を願ます（水戸市上市泉町貳町

目市川屋方渡邊小桃子）○親しき諸姉方皆樣の内に本年五月九日より同月十六日までの東京報知新聞に記載してある日本史蹟其三其四其六以上三枚お持のお方は下名へお送り下さい實は妾が其日本史蹟を保存しておきたいのですけれど前の三枚が不足て誠に心濟がせんて困つて居るのですから何卒お送り下さいお禮には美くしい繪葉書三枚を致します（越後國南蒲原郡三條町字鍛冶町島羽萬造方星山次枝子）○無學なる女には有之ども何卒皆々樣妾とも御交際を希ます寫眞や小説の交換も是非にれ先は皆々姉上樣に左樣御願迄（下野足利町貳丁目仲辰惠内片井浜子）○親愛なる諸姉上樣よ妾は不如歸自由自在に聞く山里に住ふ不束者に有之つれど何卒皆々樣妹と思召して御交際なし被下度繪葉書や栞の交換を希ます又寫眞の交換もれ必ず交際は永久的にれ先は右御願迄（下野足利町貳丁目和國前寺内新三郎内汪野よし子）○御情け深き誌友の皆樣よ何卒妾にも末ながく御親密に御交りを願ますそして玉章繪はがき諸雜誌の交換もれ妾きつと御返禮致します、（三河額田郡岡崎町字中八三中尾品子）○御なつかしき誌友の皆樣私實に不幸者て幼時兩親を失ひ去る冬又もや年上の姉樣亡き人となりましたが矢張り文壇は毎月取つて居ります私も誌友の一人です、以後何卒宜敷く御願ひ申上げます（深川洲崎辨天町原田方田中勝子）○妾は十四號から文壇の愛讀者になりましたから姉上樣方よろしく御見知り居り下さい、私は何も立ばな本などはありませんが古くない蛇腹の寫眞器（三脚、取枠、其他附屬品一切附）を持つて居りますが皆樣の中てヴアイオリンか何かと交換して下さる方はありますまいか本てもよろしうございます。でもヴアイオリンならなほよいです（宮城縣刈田郡白石町菊子）○誌友の御姉上樣是からよろしく御交際お願ひ申します御玉章エハがきられ御返事きつと致します（岡山市紺屋町三五前田磯子）○誌友諸孃の内て政府發行觀艦式、觀兵式甲、乙、丙何れの繪葉書てもよろしうございますからありましたなら私の米國艦隊紀念繪葉書か書物と御交換してくださいな（新潟縣三島郡塚山大橋とし）○誌友の皆樣、私は高等女學校に在學して居る不束者なのですけれど御心ある方は何卒御姿、あみ物、エハガキ、自然主義の小説、御玉章是非〱御送り下さいましな、御返事はきつと致しますよ（京橋區南槇町一番地岡本君枝子）○誌友の姉樣方よ妾は不束な田舍娘ですが姉樣方の御寫眞ロ美人繪端書小説の御交換を願ひます尚又美人繪端書かスタンプ付繪端書に姉樣方の寫眞をつけて御惠みの方には先着十名樣に限り妾の手許にある新國民女子文壇中學世界其他珍らしい雜誌に名所繪葉書をつけて御禮致します男の方でも御心ざしある方は前記の御交換を願ひます（滋賀縣甲賀郡多羅尾村平田茂子）○永久に玉章や葉書の御交際を願ます神かけてきつと御返事は致します（上毛勢多郡粕川村大字膳村須藤淺子）○お懐しい誌友の皆樣よ私は片田舍にわびしき月日を送る不束な者ですがどうぞ繪端書や玉章の御交換をお願ひ致します（信濃東筑摩郡晰績村宮澤澄子）○此度文壇へ出かけましたから皆樣どうか玉章繪はがきの御交換御願ひ申し上げます必らずお返答致します（島根縣簸川郡今市町廣戸松右衛門方花出精）○是から文學を學ばうと思ひますから博學多才の皆々樣宜敷く御交際を願升（箱根湯本字臺の茶屋勝俣儀平方翠）

●●●●●
十四號の分　群馬　藤橋君代　俳句天

剽竊詩文の注意

「空高く」は萬朝懸賞俳句一等「星飛んて秋に入る夜の空高し」を燒直したるものなり。又俳句秀逸神戸、山本みどりの「大風に」の句は文章世界三卷五號丟德田鼓子の「羊」を「小牛」と改めたるものなり。

右何れも燒直しと認む

今回注意を與へられたる諸孃は　○熊本　無名子　○紀伊　紀の乙女

寫眞を求む

誌友諸孃の寫眞　本誌讀者諸孃の御寫眞は毎號掲出して居りますが猶ほ盛んにお送りを願ひます

家族の寫眞　誌友諸孃の家族皆樣とお撮りになつた寫眞、或はお子樣方の寫眞、何かの記念にお寫しになつた寫眞などを歡迎いたします

風景の寫眞　諸國の風景、或は風俗、山岳、河流、市街、野外など餘り有り觸れないのをお送り下さい

小集の寫眞　譬へ二三人ても又は多人數ても誌友小集などを催ふされた時の寫眞は必ず掲載いたしますから御寄送下さい

返送と報酬　寫眞は御希望に依り用濟次第に御返しいたします又寫眞に依りまして本社にて是は好いと認めた場合には相當の報酬を差上ますから右記載の寫眞を試みにお送り下さい、玆に改めてお勸いたします

雜報

○年を送る　本年は本號を以て愛讀諸君とお別れします、更に新來の鋭氣を以て年の初めに皆樣に見えませう、さらばー。

○散文詩と少女文壇　家庭日記と餘興のことは別項にあります、新設の散文詩と少女文壇の二欄は一は新興の口語詩も含まれて居ます、もつと自由なものでよろしい。少女文壇は十五才以下の少女諸孃の作文、和歌、俳句、唱歌などを歡迎します。

○辭書の出版　此頃は辭書の出版が流行します、片々たる册子よりは多くの人の爲になるでせうけれど、辭書も活きて使はない以上は、單に本函の飾りたるに止まることが多いものであす。

女子文壇改正定價

《四十二年一月發行分より》

▼定期發行分（毎月一回一日定期發行）

一册（一回分）	定價金拾五錢	郵税一錢五厘	合計金拾六錢五厘
三册（三月分）	同前金四拾三錢五厘	同四錢五厘	合計金四拾八錢
六册（半年分）	同前金八拾四錢	同九錢	合計金九拾三錢
十二册（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	同拾八錢	合計金壹圓七拾四錢

▼臨時增刊分（年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊））

一册（一回分）	定價金貳拾錢	郵税一錢五厘	合計金貳拾一錢五厘
二册（半年分）	同前金三拾八錢	同三錢	合計金四拾壹錢
四册（壹年分）	同前金七拾貳錢	同六錢	合計金七拾八錢

▼定期發行及び臨時增刊（全部一十六回）

四册（三月分）	定價前金六拾三錢五厘	郵税六錢	合計金六拾九錢五厘
八册（半年分）	同前金壹圓二拾二錢	同拾貳錢	合計金壹圓三拾四錢
十六册（壹年分）	同前金貳圓二拾八錢	同二拾四錢	合計金貳圓五拾二錢

明年初刊分より右の如く定價改正致します從來の定價にて前金拂込の方は此改正表を御覽の上不足分と繼續前金をお早く御拂込願ふ存じます

▲注意　凡ての投稿は毎月十五日締切

懸賞贈額

▲甲種（短篇小説　美文）
天賞：金參圓
地賞：金壹圓五拾錢
人賞：金七拾錢

▲乙種（お伽噺　日記文　新論文　實用文　新體詩）
天賞：金貳圓
地賞：金八拾錢
人賞：金四拾錢

▲丙種（和歌　俳句　短文　圖畫　餘興　滑稽　歌謠　學校生活）
天賞：金壹圓
地賞：金五拾錢
人賞：金貳拾錢

○各種とも發表翌月廿日に總べて正金を以て贈呈す

定價

女子文壇　毎月一回一日發行　其外定期增刊四回發行（三、五、七、十二月十五日）臨時增刊貳回發行（四月十月）例號二倍

一册（定期百頁）	前金拾錢	郵税共計金拾壹錢
九册（增刊トモ半ケ年分）	前金九拾五錢	同計金壹圓〇五錢
十八册（增刊トモ一ケ年分）	前金壹圓八拾錢	同計金貳圓
六册（增刊ナシ半ケ年分）	前金五拾七錢	同計金六拾三錢
十二册（增刊ナシ一ケ年分）	前金壹圓〇八錢	同計金壹圓貳拾錢

〔備考〕○定期及增刊は各拾錢郵税壹錢　○臨時增刊は金貳拾錢郵税貳錢

振替貯金の拂込は登記料貳錢增すと
郵便切手代用壹割增○收入印紙謝絕

▲女子文壇社の郵便振替貯金口座は　第壹七貳九番

明治四十一年十一月廿九日印刷
明治四十一年十二月一日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

黄金は積んで山をなし

身には錦を纏ふとも、病持つ身の苦しさは、花見遊山や芝居見や人の喜び樂も樂みとては更になく況て兒女なき病婦の悲しさ限りなからん

●中將湯は是れ等不幸なる病婦を救濟して子寶多き圓滿の家庭を作るべく發賣す

定價	
四日分	卅五錢
一週間分	六十錢
二週間分	一円十錢
三週間分	一円六十錢
五週間分	二円五十錢

左の容體にて苦しむ婦人は

早く中將湯を服して無病の幸福を得給へ



中將湯

●子宮病子宮内膜炎にて白帶多く前たゞれ又下腹腰足の引つり痛む人
●婦人神經（ヒステリー）血の道にて氣鬱ぎ癇高ぶり物を苦し夜眠ざる人
●月經不順月經滯り等にて吹出物多く又何となく身體惡き人
●逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え●息切れ動氣強く手足痺れ水腫
●十七八歳になりて月經なく血ぶとり又月經の前後に下腹の痛む人
●白血赤血滯下多く顔色蒼白き人●冷症にて難産流産の癖ある人
●産前何となく常ならざる人、嘔吐、産後古血の滯り或は日立惡く
●此外子宮血の道月經不順に起因する諸症にてぶら〳〵と惡き人

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇 金拾錢 郵税壹錢

【東京秀英舍印刷】